新島真は鳴上悠と出会う。

ローファイト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新島真が鳴上悠に出会う話。

原作終了後１年が過ぎ、大学２年生となった真が悠と出会う。

話は真視点で進みます。

ペルソナ５とペルソナ４のクロス

目次

真と悠の出会い。 1
真下かなみとの出会い。 23
真とかなみ 38
真と春とおかしな二人。 55
真と春とおかしな二人。【中編】 69
真と春とおかしな二人。【後編】 88
真と春とおかしな二人。【終幕】 99
新たな出会い。 114

真と悠の出会い。

東都大学法学部に入学し二年の春。
皆と出会ってからもう2年になるかしら。
当時は心の怪盗団の一員として世の裏に隠れて悪事を働く人達と戦い、私自身様々な経験をして、色々と成長したと思う。
人々の心を歪ませ支配しようとした神を名乗るあの聖杯にも勝つ事が出来た。
あんな出来事があったのだけど、その時の記憶は人々から消え、世の中は何事もなかったかのように代り映えもせず日常が進んでいる。
私達のペルソナ能力も消え、怪盗団は解散し、皆はそれぞれの思いを抱き、自分の道を歩み始めた。皆との絆という一番大切な物を残して……

蓮は国立大学に進学。
将来はお姉ちゃんと同じで法律の道へ、最終的には裁判官を目指すとか、冤罪に苦しむ人々を見逃せないと……蓮らしいと言えば蓮らしい。お姉ちゃんと法廷で顔を合わす日もそう遠くはないかもね。
モルガナは蓮と一緒に住んでいるわ。ネコの生活も随分と板について来たようね。
杏はそのままモデルの世界へ。
大手芸能プロダクションに所属して、本格的にモデルの世界に入り、一から勉強中だと言っていたわ。さっそく映画で女優デビューの話も来てるらしいのだけど、今はモデルの仕事に集中したいからと断ってるとか。杏なら女優としてもやって行けると思うんだけどね。
竜司は私立大学へ何とか進学。
教師を目指すらしいの。自分の過去の経験を活かして、自分みたいな奴らの面倒を見たいって言っていたわ。意外と似合ってると思うわ。
祐介はそのまま美の道へ。
スポンサーが付いたらしく、念願の海外留学にむけ、準備の真っ最

中。
双葉は定時制高校、要するに夜間学校に入学。
同じような境遇の子も結構いるらしくて、何とかコミュニケーションは取れてるみたい。
今は蓮と同じ大学に行くんだと言って、猛勉強中。
春は某有名私立大学経済学部に通いながら、仕事もしてるわ。
父親の会社は部下の人に社長業を引き継いでもらい、子会社の都内に3店舗ある純喫茶チェーンのオーナーに就任。実質のやりくりは各店長に任せて、喫茶店について一から勉強したいからと、自分の会社なのに、従業員見習い扱いでアルバイトしてる。実に春らしい。
お姉ちゃん（新島冴）は検察官から弁護士に転職。
外から法の秩序を守って見せると言ってたわ。
伝手で有名な法律事務所に所属してるけど、近い将来には自分の事務所を持つと、もう決めてる。やりがいがあると、今のお姉ちゃんの顔はどこか楽しげ。
そろそろ恋人の一人でも作っても良いかなと思うけど。浮いた話が一切ないのが心配。
皆、夢に向かって邁進中、私も頑張らないと。
私はもちろん尊敬する父と同じ警察の道へ。警察官僚を目指して勉強中。
あの腐敗しきってる警察内部を私の手で変えて見せるわ。

「昼からの講義は民俗伝承学と……」
今年から出来た学科で、法学関連以外の選択科目で特に興味がある学科が無くて、定員も少ないし息抜きには丁度いいかもって　何となく選んだ学科で、今日がその初日。
学科選択時には教授や講師は未定って書いてあったわ。大丈夫なのかしら？
「この講義室ね……人が多いわね」
講義室前には人だかりが……しかも女性ばかり。

何かしら？
見知った顔の子も何人も…
「あっ真！真ってもしかしてこの学科を選択したの!?」
「そうだけど」
「えーー、いいな！講師があの人だって知ったら私も入ったのに！」
「誰が講師なの？」
「鳴上さんだよ！ほら！去年卒業しちゃった！超イケメンだよね！」
「ええ？」
鳴上さんってもしかして三つ上の学年の先輩。学内で何かと有名な人で私も知ってる人物だった……実際会って話した事はないけれど。でも卒業していきなり講師なんて……
私は女子学生をかき分けて、講義室に何とか入る事が出来た。
そこには、温和そうな優し気な感じの青年が、少々困り顔で壇上に立っていた。
この人が鳴上さん。確か校内広報とかにも写真が載っていたのを見たことがあるわ。
私は興味は無かったのだけど、去年の恋人にしたいランキング学内一位だったとか……
こうして本人を目の前にするのは初めてだけど、確かに整った顔。ちょっと蓮に似てるかしら。
ドクン
……え？……なに？……頭痛？眩暈？急に……頭の奥の何かが……？
……止まった。
何かしら、初めてペルソナを発現した時に少し似てる感じが……。
いいえ、あの事件でメメントスが崩壊し認知世界は消えた。もうペルソナは使えなくなったはず。
私は講義が始まってからも、何故か鳴上さんが気になって仕方がなかった。
３０人も満たない小さな講義。

やはり参加してる生徒は9割以上男性。民俗伝承学なんてマニアックな学問は本来興味がある人しか受けないわよね。
講義の内容はその……よく覚えてない。
講義が終わった後、研究会を近々立ち上がるそうでゼミ生募集と呼びかけていたわ。
鳴上さんいえ、鳴上准教授。大学卒業したてで准教授とかありえるのだろうか？

私は家に帰り、夕食の用意をしお姉ちゃんを待つ。
メールではあと３０分ぐらいで帰って来ると連絡があった。
待ってる間に何となくリビングでノートパソコンを開く。
大学のホームページを開き、自然と今日会ったばかりの鳴上さんの経歴を調べていた。
【3年時オーストラリアへ留学、現地大学の卒業資格を得る】
たった一年で海外の大学卒業資格を取得とは、そうとう勉強ができるのか、その分野で飛びぬけた能力を持っているかだわ。一昨年という事は私達が怪盗団として活動していた期間ね。
【大学在籍中に難事件の幾つかの解決に警察に協力】
【○○町と○○村、○○市の難題に貢献。市町村からの感謝状】
え？なにこれ？
民族伝承学と関係あるの？
風習とか慣わしとかの調査とか研究をする学問じゃないの？
それとは別に、彼個人が協力してる？いえ、それならば学内のホームページには載せないわ。
一体どういう事かしら？
いつの間にやら鳴上さんについて、次々と興味がわいてきていた。
今度は鳴上さん個人について、ネット上で情報を集めようとサイトを検索していた。
ある電子新聞記事を見つけることができた。
【お手柄、東都大学2年生鳴上悠さん（２０）斬新な切り口で迷宮入り難事件解決。行方不明者４名無事救助】

え？……なにこれ？

「ただいま真……ん？真？」

「あっ、おかえりお姉ちゃん」

つい記事を見入ってしまって、お姉ちゃんが帰って来た事に気が付かなくて返事が遅れる。

「ぼーっとして、何を見てるのかしら？……その記事は……ああ、本庁の刑事の先輩が恥をかいた事件ね。なぜそんな記事を見ているのかしら」

お姉ちゃんは私の後ろからノートパソコンを一瞥してから、何かに気が付き覗き込む。

「知ってるの？おねえちゃん」

「あの獅童の事件の二年前ね。私も聞いた話なのだけど、その村では不審死が二人発見され、その後も行方不明者が立て続けに発生したのよ。誘拐・殺人事件の疑いで本庁が乗りだしたのはいいのだけど、捜査は難航、結局手がかりもまったく見つからず時間ばかり過ぎたらしいわ。しばらくして、この青年がふらりと現れて、その行方不明者全員を救出したらしいのよ。最初はこの青年こそが犯人だと先輩達は決めつけてかかったのだけど、証拠も集められない上に、本人に見事論破され、拳の置きどころをなくしたって話。後に先輩に会ってその話を聞いたら、その悔しそうな顔は傑作だったわ」

「犯人は見つかったの？」

「そうね。その犯人も彼の証言通りの場所に居たわ。犯人自身精神を病んでいて自供からは不明な点が多かったらしいけど、犯人の行動と状況証拠で犯人確定で事件解決というわけよ。……で、その彼がなにか？」

「うちの大学の講師なの。私が選択した二年時選択科目で受ける授業のね。しかもまだ卒業したてなのに准教授の肩書だったから、そんなに早くなれるものなのかと思って、ちょっと調べてたの」

「へえ、海外ではそういう事はあるらしいけど、日本では珍しいわね。そう、丁度いいじゃない。気になるならこの事件の事を聞いてみなさ

い。本庁のエリート達の鼻を明かした話、私も話の種として聞いてみたいわ」
お姉ちゃんはそう言いながら、少し悪戯っぽい顔をしていた。
そのネタを使って何か悪だくみ（情報協力という名の情報搾取）をするつもりね。
鳴上さん……蓮とどことなく似た感じがした。顔もちょっと似てるところもあるけどそうじゃない。雰囲気かしら？……よくわからないわ。

一度、話しかけて見ようかな。
お姉ちゃんもああ言ってたし。

そうこうしてる内に４月も末。
結局、鳴上さんとは一度も話をできずじまい。
民俗伝承学の講義は週１度で、しかも鳴上さんにひっきりなしに女子生徒が話しかけるものだから、なかなか機会が得られない。
講義が無い日は本人は外出してる事が多いみたいだし。
もうゴールデンウィークか……
杏の提案で一泊旅行に行く事になってるわ。双葉も春ももちろん一緒よ。今回は女子だけの旅行。たまには女の子だけでというのも悪くないわね。
私が車を出して温泉旅行へ。
温泉旅行に行くなんて竜司あたりが知ったら、連れて行けってうるさいだろうから、男連中には内緒にしてるわ。帰ってから土産話と一緒に教えるつもり。
蓮はゴールデンウィーク中はこっちにずっと居るって言ってたわ。ルブランの屋根裏で泊るみたいね。またみんなルブランで集まることになるでしょうね。
普段からしょっちゅう誰かしらと会ってるから、あまり新鮮味がないけれども。

先週も私の誕生日会を開いてくれてみんな集まってくれたし、蓮以外はみんな住んでる場所が近いから、ルブランに行けば誰かしらと会えるしね。
そういえば、祐介は８月に留学が決定したと言ってたわね。
それは少々寂しくなるけど、スマホでいつでも話せるしね。

【民俗伝承学科第一回現地研究会参加者募集。東京都○○市○○神社跡及び近隣調査。聞き取り調査が主になります。体力に自信がある方是非。日帰り。定員６名まで。日程５月２日７：００大学出発。主催：高畑貴志教授・鳴上悠准教授。連絡は考古学部第２資料室又は高畑貴志教授室まで】
何気なしに大学の掲示板を確認するとこんな募集が。
５月２日は空いてるわ。鳴上さんにいろいろ聞けるいい機会。
でも、もう定員埋まってるわよね。あの女性からの人気ぶりだと……一応聞いてみるだけ聞いてみようかな。
早速校内で一番古い木造の校舎に向かい、考古学部第２資料室の扉をノックをする。
「すみません」
「入っていいよ」
中から男性の声が返って来る。
鳴上さんの声じゃない。
「失礼します」
「なんか用かな？えー、ここの学部の教授をやってる高畑ーです」
白衣をだらしなく着崩した４０前後位のひょうひょうとした印象の男性が、椅子から立ち上がり頭を掻きながら、挨拶をした。
高畑教授はこの大学ではかなり有名な教授で、若くして数々の発見や論文を記してきた生粋の考古学者。専門は日本の考古学全般。
「こんにちは、民族伝承学科講義を受けてます。２年の新島真です」
「あっ、君が法学部の新島さんか。勉強熱心だと他の教授連中からも聞ーてるよ。そんな君がこの寂れた学部に何の御用かな？」
かなり軽い感じのしゃべり方をする人で、とても偉い人には見えな

い。
「あの、5月の民俗伝承学科現地研究会の募集要項を見て、ちょっとお伺いしようと」
「ほう、君は民俗学に興味を?…んん?それとも君も鳴上くん目当てかい?だったらお断りだよ!」
しっしと言わんばかりに手を振って、いきなり拒絶される。
「ち、違います」
違わないけど、その他の女子生徒達とは違って鳴上さん自身に興味が有るとかではなくて、その、あの事件の事でも聞けたらなと。
「ならなんなんだい」
「その……まだ、興味とまではとは行かないのですけど、各地に伝わってる伝承が現代の生活にどう影響してるのかなって、気になって」
私は適当な言い訳を思いつくまま口にだす。
「いい!!実にいいよ新島ちゃんだっけ!!邪険にしてすまなかった!!そうなんだよ!!そういう事なんだよ!!古くからの伝承が今の現代とどう関わって、それがどう活かされているか!!そこに目を付けるなんて!!君は合格だ!!我々について来たまーえい!!」
教授は急に眼をキラキラさせて、私の腕を引っ張って無理やりその辺の椅子に座らされる。
どうやら私の回答は正解だったようね。反応が過剰だけど……
「……」
改めて室内を見回すと、教授が座ってるだろう机周りは乱雑だけど、第2資料室と呼ばれる高校の教室位の広さのこの部屋は、物は多いけど綺麗に整頓されていた。
「ん?……この部屋かい?悠…あー鳴上くんがさ、直ぐに綺麗にしちゃうんだよ。考古学ってもっとあれだ、埃っぽい方が雰囲気あるって言ってるのにさ」
私が思っている事を察し、大きくため息を吐く教授。
「あの、質問してもいいですか?」
「ああ、何でも聞きたまえ!」
「考古学部になぜ新しく民俗伝承学科を併設したのですか?今迄は考

古学部だけだと」
「それ聞いちゃう？まあ、あいつのための学科だな。鳴上く……言いにくて仕方がない。もういいだろ。悠の奴の為さ」
「どういう事ですか？」
「あいつが研究っていうか、日本における古来からの伝承については、今じゃあいつの方が知識は俺より上だ。しかもあいつは単に研究だけじゃ収まらねえ。その伝承や風習を活かした街づくりや、それを残していく活動も行ってる。地元の人たちと協力してな。もう考古学っていうカビが生え切った学問の枠を完全に超えてるって事さ。
　あいつは実績もあるし、即教授にしたかったんだが、上や他の教授連中がごねてな。若過ぎるとか言いやがって！…そんでとりあえず学科を作って、あいつの居場所を作ったってわけだ。……これは未来の日本人にとって必要な学問であるはずなんだが、なかなか他者に理解されねえ。それでもここまで漕ぎつけたのは、あいつの実力さ、人と人との繋がりらしいぜ。だってよ。宮内庁から直々に嘆願書がきたんだぜ！普通あり得ねえだろ？流石に俺もビビったよ。あいつがこの４年で民俗学に真摯に取り組んで築いてきた人のつながりは本物ってことだ。そんでしぶしぶ大学も動かざるを得なかったってことだ。大学のお偉方はそんな経緯や内容をまったく理解してねーけどな！」
「そ、そうなんですか」
　……私もよく理解できないけど、凄い人みたいね鳴上さんって。この教授の個性にも十分驚いたけど。
「おっと、奥さん待たせてたんだった。悪いな新島ちゃん。俺出ねーと行けねーんだわ。談義は今度な。あれの参加はＯＫってことで、電車賃は自己負担だぞ。昼飯ぐらいは奢ってやらー。それと動きやすい恰好と飲み物ペットボトル２本な」
　そう言って教授は私を資料室から出して、鍵をかけてそそくさと行ってしまった。
「……私、参加するとは言って無いんだけど……勝手に行く事にされてる。……まあ、いいわ」

私は高畑教授のバイタリティーというか、個性に圧倒されっぱなしだった。

5月2日民俗伝承学研究会当日

「改めて鳴上悠です。よろしく」

挨拶をする鳴上さんは講義中とは異なり眼鏡をしていない。

講義以外の鳴上さんとは会った事が無かったかな。

イメージが少々変わるかな。私達の年代にずっと近づいた感じよね。

眼鏡をかけた姿は随分と年上に、……大人っぽい感じがしいてたわ。

「2年の新島真です。よろしくお願いします鳴上准教授」

「准教授って言われるのはちょっと慣れてないから、鳴上で」

「では、鳴上さん……あの、ところで参加者は私一人だけですか？」

周囲を見回しても、待ち合わせ場所の学校裏門付近には私と鳴上さんしかいない。

「……高畑教授が全部断っちゃって。よく君は参加を許してもらえたね」

鳴上さんは苦笑していた。何時もの事なんだろうな。きっと。

あの教授の対応じゃ、本当に行きたくても尻込みしちゃうだろうし。

「いえ、研究会の内容を聞きに行ったんですが、その勝手に参加ＯＫになってしまって……肝心の高畑教授はどこに？」

「なるほど、教授によっぽど気にいられたんだ……その…教授は風邪で寝込んで来られないそうだ」

「ええ？」

「言いたいことはわかる。さっき教授の奥さんから電話がかかってきて…その、ごめん」

「いえ、病気なら仕方がないですが……」

「どうする？今日はやめにする？俺は行くけど……」

申し訳なさそうな表情を私に向ける鳴上さんを後目に考えをまとめる。
あの事件について聞けるいいチャンスね。
でも、直接話をするのが初めての年上の男性と二人っきりというのは……悪い人にはとても見えないけど。流石にまずいかしら。春に知られたら怒られそうね。
もし二人きりをいいことに、いかがわしい事をして来たら、鉄拳制裁すればいいかな。
腕っぷしには自信あるし。
「私は大丈夫ですよ」
「そうか……じゃあいこうか」
鳴上さんは笑顔を向ける。
緊張気味だったのだけど、その笑顔を見て一気にほぐれる。
……その笑顔は反則だわ。女性にモテるのは分かる気がする。
もしかして、蓮と同じで天然ジゴロ？
そういえば蓮って結局誰と付き合ってるのかしら……聞いても要領を得ないと言うか……。まさか二股？複数の女性と付き合ってるとか？あり得そうなのよね。蓮に限っては……。
私は勿論双葉を応援してるのだけど。
その双葉があの年増教師退治してやるとか、あの藪医者の弱みを握ってやるとか……占い師め。私が構築したソフトの方が当たる！とか、あの飲兵衛記者！未成年に酒を飲ませて何をしようとしてるんだ！とか愚痴を言っていたわね。
……年増教師ってやっぱり川上先生よね。あと藪医者は、近所のなんていうのかしら、ちょっと変わった女医さん。占い師と記者はわからないけど。やっぱり本当に複数の女性と付き合ってるのかしら、職業柄からもきっと全員年上よね。……まさかお姉ちゃんもだったりして……なーんてあり得ないわね。
電車に揺られしばらくすると、乗客もまばらになって行き、窓の外は徐々に田舎の風景に……。

今は空いた対面席に、鳴上さんと座ってる。
あの事件について聞くチャンスね。
でもどうやって聞こう？いきなり聞いたら怪しまれるわよね。鳴上さんの事を知らべさせてもらいましたなんて言ったら、ストーカーに間違えられるんじゃないかしら？
……自分の迂闊さに今更気が付いた。とても聞きづらい。
鳴上さんは私に話しかけるでもなく、ぼんやりと窓の外の風景を見ていた。
この沈黙は気まずい。……そう思ってるのは私だけかしら。
鳴上さんから話しかけてくれてもいい様に思うのだけど、なぜ現地研究会に参加したとか、今日の内容とか……そうすれば、私も聞き返しやすい。
そんな事を考えながら、チラリと鳴上さんの顔を伺う。
……今の鳴上さんは私とさほど変わらない年見える。実際年は3つしか離れていないからあたりまえなのだけど。
講義中の鳴上さんは実年齢よりもかなり大人に見える。眼鏡の影響も多少あるのかもしれないけども、それでも理路整然と講義する姿はとても一か月前までは同じ大学生だったとは見えないわ。なによりも自信に満ち溢れているもの。
「あの、鳴上さん。神社跡での調査というのは実際には何をするんですか？」
「そっか、……何も説明してなかった。ごめん。つい何時もの調子で……いつもは一人か高畑教授とだけだから」
……説明するのを忘れていただけのようね。意外と抜けてる所があるのかしら。
「はい、私はこういう活動は初めてなので、教えていただけると助かります」
厳密にいえば初めてでもないわよね。怪盗団では隠密行動をとりながら、お宝を見つける為に綿密に現地調査を行っていたのだから。
勝手は色々と違うのだろうけど、根本は一緒よね。
「高畑教授が見つけて来た案件で、俺も実際に行くのは初めての場所

だ。今日は神社の成り立ちから、廃止までにいたる経緯の調査かな。郷土史の資料では明治にはまだ健在だったようだけど、それ以上の詳しい内容は分からずじまい。この前の講義した内容を覚えてる？明治から大正にかけて行われた神社合祀令（神社整理）について、その影響で廃止となったのだろうけどね。資料が殆どない神社だから、今回の調査の結果次第では、郷土史の穴を埋める発見があるかもしれない。頑張ろう」

「え？結構重要な事じゃないんですか？……私みたいな素人が関わっても良いんですか？」

「どうせ今まで放ったらかしになっていたんだ、そんなに重要な事じゃない。誰に迷惑かけるわけでもないし、気楽な感じでいい。ただ、この土地にこんな歴史や風習があったんだと自分達で調べて見つけたら、楽しくない？」

そう言って語る鳴上さんは楽し気ね。こういうのが好きなようね。

私はあまり歴史とかには興味はわかないけど、わからなかったことが分かるようになる事に楽しみを覚えるのには賛同するわ。

「わかりました。参加するからには出来る限りの事をさせてもらいます」

でも、参加するからには全力でやらなきゃね。

この後も、調査について幾つか話をしたのだけど、あの事件については聞けずじまい。

なかなか切っ掛けがつかめない。

そうこうしてる内に、駅に到着し、川岸の道路を歩くこと1時間。

なるほど、確かに動きやすい恰好が必要ね。ハイキングのような物ね。

山道に少し逸れた場所に入ると、木々が他よりも生い茂ってる場所に神社の鳥居らしきものが見えて来た。

「……当たり……だな。それ程強い気配じゃないが……高畑教授はよりによって、こんなところを第一回目の研究会に……」

鳴上さんは半分呆れたような感じで独り言ちていた。

当たりって何かしら？

鳥居の前まで到着する。５ｍ程の木造の鳥居は傾きかけ、朱色だったものは色あせて、半分朽ちかけていた。
鳥居の奥には所々欠落した石の階段が続き、石段の頂上にももう一つ大きな鳥居が……
何となく不気味な雰囲気ね。

鳥居の前で鳴上さんは振り返り私を見据える。
「やはりか……今日はここで帰ろう」
「え？なぜですか？調査は良いんですか？」
「……ちょっとね。まだ……その早いと言うか。説明が難しいが、やめておいた方が良い」
「ん？鳴上さん。石段の上の鳥居の下に小さな子が……どうしてこんな場所に子供が、声を掛けないと」
石段を登り切った場所に子供の影が見えた。
影なのになぜか子供だと認識し、私は衝動的にその子を追いかけるように石段を駆けあがる。
「不味い！新島さん！」
私が鳥居をくぐり、崩れかけている石段を駆け上がると急に何かしら違和感を感じるが、子供を追いかけなければという衝動のまま、石段の上まで駆け上がる。
石段の上には立派な社が建っていて、しかも屋台が沢山でて、祭囃子まで聞こえてくる。
先ほどまで、そんな音や気配はまったくなかったのに。
そして、その屋台には、人の影が……いえ、影だけが蠢いている。
祭囃子も影が演奏している……。
しかも、石段の上の鳥居の下に私が見かけた子供の影も……影だけ……しかも、何故か私を見上げ笑っているようにも見える。
「……これは？シャドウ……もしかして、ここはパレス？どうして？」
このざらついた独特の空気感、まるでパレスの中のと同じ感じ……
その人影達が私に気が付いたかのように一斉にこちらに振り向く。

なに……これ？
そして、私はいつの間に、怪盗団でクイーンと呼ばれていたあの勇ましい姿に変身していた。
……どういう事？やはりここはパレスの中？……なぜ？あの事件でパレスは無くなったはずよ！どうして……これは誰のパレスなの!?
この姿……私は敵とみなされたって事？
人影はのそりのそりとこちらに向かって近づいてくる。
そして……化け物に変化して、私に一気に迫って来た。
「やっぱり！シャドウ！……まずいわ!!ヨハンナ!!」
私は反射的にヨハンナの名を叫んでいた。
ヨハンナは私の声に反応し『久し振りですね。また貴方の正義を見せつける時です』と私の心の中に返事をしながら、私の目の前に現れる。
良かったペルソナが…ヨハンナが私の声に反応してくれた！……やっぱりここはパレスの中！
「行くよ！ヨハンナ!!フル・スロットル」
私は大型バイクの姿をした私の半身ヨハンナにまたがり、迫りくる化け物をヨハンナの突撃で蹴散らす。
上空からはカラスの姿をした化け物が迫って来た。
「爆ぜろ！ヨハンナ!!」
ヨハンナの核熱魔術『マハフレイラ』で爆破を起こし吹き飛ばす。
久々だけど上手くやれてる。
化け物たちはシャドウで間違いないと思うけど、今迄見たことが無いタイプ。
力はそれほどでもないけど、数が多いわ。
状況もわからない。一度引いてパレスの外に出ないと……
それに鳴上さんも私を追って巻き込まれる可能性がある。
早く脱出しないといけないわね。
私は元来た道をも戻ろうと、ヨハンナに乗ったまま勢いよく鳥居をくぐり石段を飛び下りたのだけど、鳴上さんが居るはずの石段下の鳥

居にたどり着けない。
それどころかいつの間に山道を走ってる？
山道には小さな石仏がところどころ並んでる。見たことが無い風景。
しまったわ。パレスと同じね。迷宮化してるわ。
出口を探さないと……
私はヨハンナで山道を駆け巡る。
しかし、いつの間にやら元の社の前に戻っていた。
似たような道ばかりだから、どこがどうなっているかが把握できないわ。
ナビ（双葉）がいてくれたら……
元の山道に戻ろうとしたのだけど……
既に遅かった。周りはシャドウだらけに。
囲まれた!?
このままじゃ！
じりじりと迫って来る。
一点突破……それしかない。
覚悟を決め突破を図ろうとしたその時
「行くぞ」
掛け声と共に、目の前のカブトムシのような化け物が４体霧散していく。
「え？誰？」
刀を構える男性の後姿が目の前に現れる。
多分この男性がカブトムシのような化け物を倒したのだろう。

その男性は振り返る。
「そうか…君はペルソナ使いだったのか……だから教授は」
「鳴上さん？」
え？なぜ……なぜ鳴上さんが？…ペルソナ使いを知ってる……しかも生身でシャドウを倒した？
その後、鳴上さんは刀を振るい次々と私を囲んでいたシャドウを倒

していく。
私も武術（合気道）の心得があるからわかる。凄まじい技量……。
しかも、電撃を体や刀にまとわせた技も繰り出してる。……鳴上さんは何者なの？
あっ、私もぼーっとしてる暇は無いわ。
「ヨハンナ!!飛ばすよ！」
私もヨハンナと共に、シャドウを倒していく。

周りのシャドウが次々と消滅し、ようやくひと段落つく。
私はヨハンナを一時収めて、鳴上さんに話しかけ一気に疑問を問いかける。
「その……鳴上さんは何者ですか？ここは何ですか？パレスの中ですよね」
「……その姿、いやその仮面が君のペルソナの核で、先ほどのバイクがペルソナか……霊能者……いやペルソナ使い。しかもこれ程の使い手に会うのは久々だ」
「あの、私の話を聞いてます？」
「すまん。説明は後でする。新島さん手伝ってくれ」
鳴上さんはそう言って、社の方へ進んでいく。
「え？どういう事ですか鳴上さん？ちょっと待ってください」
鳴上さんの後を追う。
「今から、この異空間を形成してるだろう者に会う。戦闘になる可能性が高い。準備してくれ」
鳴上さんは歩きながら振り返り、こんな事を言って来た。
「だから、どういう……」
あ……もしかして、このパレスのような空間で何かを成そうとしてる……パレスの主と戦うと……
鳴上さんの落ち着き様はどう？この状況に慣れてる？……鳴上さんは何らかの特殊能力者のようね。霊能者という言葉も出てきたわ。しかも私達ペルソナ使いを知っていて、他にもペルソナ使いがいるような事も言っていたわ。

「……来る」
鳴上さんが社前で歩みを止めると……社の正面から白装束を着た顔色の悪い若い女性がスッと現れる。……いいえ、年の頃は中学校に入りたて前後かしら、少女と言った方が良いわ。
『……お菓子は持ってきたの？……貢物は？賽銭は？お祭りは？お囃子は？』
その少女は、宙に浮き……静かに私達に近づき、こんな事を聞いてきた。
「お菓子はある。後で社にお供えをする。君はどうしてここに？」
鳴上さんはこんな状況なのに、冷静にその少女に対応する。
『……毎日、お供えするって言ってたのに……誰も来ない。ずーっとずーっと来ない!!独りぼっち!!もう、嫌なのに!!独りは!!早く父様と母様のいる下に行きたいのに!!』
少女はいきなり怒りをあらわにする。
「そうか、君は厄災の人身御供としてここに……誰もいないここにずっと一人で……分かった俺が天に返す」
少女は既に鳴上さんの言葉は聞いてない。怒りの形相で狂ったように叫びだし、次々と周りにシャドウを生み出す。
私は身構え、戦闘態勢をとる。

目の前の鳴上さんは……
「ペ・ル・ソ・ナ!!だいそうじょう!!」
右手に青白い炎を纏ったカードが出現し、気合いの声と共にカードを握りしめると、頭上に高僧の即身仏が現れた。
ペ…ペルソナ!?
鳴上さんはペルソナ使い？間違いない。あれはペルソナ!!
「君の無念は分かる。……君は人身御供として死を強制され、ここに永い間縛られていたのだろう。既に居ない住人のために……だから天に返す！マハンマオン!!」
そのペルソナが何やら言葉を紡ぐと……その少女と、現れたシャドウが光の柱に包まれる。

間違いない。ハマ系術だわ。
すると、少女とシャドウは光の柱の中で徐々に薄らぎ消えて行った。

鳴上さんはその後も構えを解いていない……
「チェンジ!イ・ザ・ナ・ギ!!」
それどころか、ペルソナを入れ変えた!?
黒ずくめの大きな人型のペルソナが鳴上さんの目の前に現れる。
あの力、蓮と一緒!でも……このペルソナの力は何?先ほどのペルソナも凄い力を感じたけど、このペルソナは規格外だわ。まるで蓮のサタナエルと同じぐらいの力を感じる。
このペルソナ、鳴上さんの雰囲気と似ている……

社から今度は黒い泡のような物が一気に吹き出て来て、徐々に一つの塊となる。
まるで大きな黒いスライム……蓮が扱うアバドンとかいうペルソナに似てるわ……
禍々しいけど、さっきの少女よりも力を感じない。

「厄災の本体……こんなもののために、先ほどの子は……イザナギ!行く!!ジオンガ!!」
鳴上さんのペルソナイザナギが手にする大きな刀を空に掲げると、その大きなスライムに強烈な雷光が空から降り注ぐ。
そして……その大きなスライムは跡形も無く消滅。

この異空間も徐々に解けて行き、目の前にあった立派な社はなくなり、荒れ果てた土地と木々が現れる。
私のあの恰好も解け、元の服装に……
パレスが解けたのね。

「ふぅ、新島さん。巻き込んですまなかった」

鳴上さんは振り返り、一呼吸してから私に話しかける。その手には持っていたはずの刀は無かった。
「その……どういう事ですか？私は何が何だか……そのただ一つ分かったのは、鳴上さん……あなたがペルソナ使いだということだけです」
「君もね……流石に最初に君のあの姿を見た時は驚いた。普段のお淑やかな感じとは全く逆だったから」
「あ……あれは忘れてください!!」
自分で顔が真っ赤になるのが分かる……２０歳にもなってあの恰好は流石に…だって仕方がないじゃない。パレスではあの恰好が普通なのだから！

この後、私は休憩する。
久々のパレスに、ペルソナを使ったことによる疲れと脱力感が辛い。
鳴上さんはその間、この神社跡を彼方此方と調べていた。
鳴上さんは疲れが見えない。
もしかして、鳴上さんはペルソナを使って、あのネットに載っていた事件とかを解決していたのかしら。私たち怪盗団が行っていたように……それだったら納得かも。

この後、十分休憩を取った後、駅まで歩くことになる。行きは一時間だったけど、私の足取りが遅く2時間程かかり、駅に着くころには日が落ちかけ夕方に。
その間に、鳴上さんにいろいろ聞いた。
やはり、鳴上さんはペルソナ使いだった。
今回の事は、江戸時代末期に何らかの厄災がこの地に起き、人身御供としてあの少女が生贄にされ、この神社が建立されたらしい。その厄災の種もごくごく小さなもので、あの様な姿になっていたが、本来放っておいても問題ないぐらいの物だったらしい。
だけど、あの少女は厄災の封印のために死を強制させられ、神社に

括られていたと……

しかし、厄災から守っていたはずの住人が、時代の流れと共にこの地から去り……この神社も忘れ去られ……封印の一助であるお供えや祭りも行われなくなり……封印が綻び、括られていた彼女自身が暴走しこんな形で異界を形成したと、今回の事象と跡地調査で鳴上さんは推測していた。

彼女は寂しかったのだと思う。だから、異界の中で祭りやお囃子を……そして私を見つけた彼女は……私を誘ったのだと……でも私はペルソナ能力者、そういうのを感じ取って敵と認識した。

鳴上さんの話を聞き私はそう感じた……。

鳴上さんが行ったマハンマオンの光は優しかった。とても攻撃をしてる感じには見えなかった。

マハンマオンの光に溶けていく彼女の霊は……小さく微笑んでいたように見えた。

鳴上さんはこういう暴走までも行かないまでも、何らかの不具合を起こしてる村や町に行って、調査を行って、伝承や風習に基づき、風習を復活などの改善等に取り組んでいるらしい。

過去の風習や伝承には必ず何らかの意味があると……それが損なわれる事によって何らかの不具合がその地に起こると言っていた。

詳しくはかなり複雑らしいのだけど、簡単に言うとそういう事らしい。

今回のようにペルソナを使うような事は少ないケースだと……

巻き込んでしまった事を私に何度も謝っていたわ。

鳴上さんというよりも、この場所を第一回研究会に選んだ高畑教授が悪い様に思うけど。

高畑教授も鳴上さんがペルソナ使いだと言う事は十分承知していて、高畑教授自身はペルソナ使いではないそうだけど、元お寺の跡継ぎで霊能者らしい。

電車に乗り込むと、私は疲れで直ぐに寝てしまって、その後はタクシーで自宅マンションまで送ってもらった。

……鳴上さんがどうやってペルソナ能力を得たとか、鳴上さん自身の事は聞けずじまいだし、私の事は全然話は出来てない。
しかもペルソナとは何なのか、ますます私の中で分からなくなった。
反逆の心。私の抑圧されていた心がペルソナだと思っていたから……だからパレスの中の私の姿があんな感じに……
鳴上さんは全く姿を変えずにペルソナが使えたしね。
認知世界のパレス以外にも異空間が存在し……そこでもペルソナが使えるとか、謎が深まるばかり。
しかも今回の事象みたいなのは、結構あると言う事なのかしら？
私達以外にもペルソナ使いが居て……しかも霊能者と呼ばれる人も関わってて……
なかなか整理のつかない話ね。
世の中の裏側には私の知らない事が沢山あるという事だけは分かったわ。

鳴上さんはタクシーでの送り際に、再度謝りながら……
ゴールデンウィーク明けに、また話をしようと約束してくれた。

鳴上さんが人身御供にされた少女に使ったあのマハンマオンの光を思い出す。
ペルソナ……敵を倒すための力だけじゃなかった。
……あの少女は確かに微笑んでいた。

真下かなみとの出会い。

ゴールデンウイークに双葉と杏と春とで予定通り熱海に温泉旅行に。

昨日のあの神社跡でペルソナを使った疲れがあったけど、温泉にゆっくり浸かって疲れが取れたように思うわ。

最近の流行についてや、恋バナや男連中にたいしての愚痴など、男連中の前では話しにくい話を大いに楽しめたわ。女子だけの旅行も悪くは無いわよね。

双葉は蓮の事が好きなのに、蓮を目の前にすると素直になれないよう。

不器用に恋をしてる姿は可愛らしい。

でも、ライバルに対しては容赦しないみたいで、温泉旅行の前に蓮のスマホに何か仕掛けたようなの。ゴールデンウイーク最終日に会った蓮はクールを装っていたけど、引っ掻き傷やら痣など作って、包帯や絆創膏だらけの姿になっていたのだけど……

双葉はその後、ニカっとした笑顔で『修羅場を演出した』と私にこそっと耳打ちしたわ。

蓮に何が起こったか想像に難くないわね。双葉にも困ったものね。

でも、最終的には女性関係に少々だらしない蓮が悪いのだろうけど。

春は学業に仕事に忙しいみたいだけど、充実してると笑顔で言っていたわ。

父の死を乗り越えて、頑張る春の姿はとても眩しい。

私はお父さんが亡くなった時、ただただ泣くだけだった。

私にはお姉ちゃんが居たから……

杏は仕事は順調らしい。

でも、なんか変。

というよりも……祐介をやたら悪く言うのだけど……

これって、その逆なのかな。祐介の事を意識してるってことよね。

祐介が８月には海外留学に行くからかな。
それで余計に……
杏は自分の気持ちに整理ついていないよう。
まだ黙って見守っていた方がよさそうね。

鳴上さんに成るべくペルソナ関連の事は秘密にしてくれと言われていたけど、皆には話さないわけにはいかない。
温泉旅行の時にも話したのだけど、ゴールデンウイーク最終日、皆でルブランで集まった際にも話をした。
やっぱり皆驚いてた。
そうよね。やっぱり驚くわよね。
何よりも、ペルソナ使いが自分たち以外でも居たという事と、自分たちの中にペルソナはまだ息づいている事、パレス以外にあのような異空間が存在しペルソナが使える事に。
双葉が鳴上さんの事を調べたようなのだけど。
彼自身の経歴は普通の範疇内。かなり成績は至って優秀だという以外はね。
気になるのは、鳴上さんが高校生の時代に殺人事件が起こった町に一年間だけ居た事かな。
そこでは、殺人事件とは別に変な噂が囁かれていた。
霧がその年に限ってかなり濃かったとか。
電源を入れていないはずのテレビが真夜中の０時に勝手につくとか。
それ以外は、私がちょっと調べた鳴上さんの大学での活動内容にプラスされたような情報のみだった。
後は、女優にアイドルとマルチな活躍を見せるトップアイドルの久慈川りせと知り合いだと言う事……。そんな噂は学内でも上がった事ないけど。
……２人並んだら結構お似合いかもと想像してしまった。
皆の意見では、一度みんなで鳴上さんに会いに行こうという話になった。

私もそれが良いと思う。
鳴上さんは私達が知らないペルソナやそれに付随する世界について知ってるはずだから。
この能力の本当の意味と、世の中に蠢くシャドウやあの神を名乗った存在とかの話を聞けると思う。

ゴールデンウイークが明けたその日。
午後の講習を終え、鳴上さんが居るだろう考古学部第2資料室へ向かい、古い木造の校舎の階段に差し掛かった頃。
何かしら？
怪しい人の後姿を目撃した。
なにやらコソコソと誰かをつけているか、探しているかのような行動をしていた。
今は、第2資料室がある2階廊下の様子を階段踊り場から覗いている。
女の子のようなのだけど。
緑色のジャージを着て、長いボサボサの髪を左右で括っていて、どうやら眼鏡をかけてるよう。
そわそわキョロキョロと挙動が明らかに不審者のそれよね。
……鳴上さんのファンの子？ストーカーかしら？
声を掛けて注意した方がいいわよね。
「あなた。ここで何をしてるのかしら？」
私は怪しい行動をとる女の子の後ろから声を掛けた。
「どしぇーーー！ええ？あわわわ。あ、怪しい人じゃないですよ」
その慌てっぷりに、その言動……もはや自ら不審者を名乗っているようなものよ。
「……怪しい人って自分で言ってるじゃない」
私は呆れながらその子の手を掴む。
ん？前髪で隠れていたけど、可愛らしい顔ね……どこかで見たような。

「ななななな、怪しくないです～。ちょっと人を探してただけなんです～っ」
怪しい子は声を大にして、ジタバタしだす。
「物凄く怪しいわよ」
私は呆れるばかり。
どうしよう、この子。
うちの学校の生徒かしら？

そこに丁度、階段を上がって来る人物が。

「新島さん……それにかなみ？」
鳴上さんが階段を上がって来た。
「鳴上さんこんにちは、この子が怪しいそぶりを見せていたので……」
私は鳴上さんに今の状況を説明する。
しかし……
「ゆゆゆゆ、悠さーーーん!!探しましたよ～っ!!マンションにも居ないし、学校まで来て探したら、この女の人に捕まって～～」
女の子は鳴上さんに飛びつかんばかりに、駆け寄る。
どうやら彼女、鳴上さんの知り合いのようね。
「スマホで連絡してくれたらいいだろ？」
「あ!?……忘れてました～」
「ふぅ、どうして大学まで来た」
「悠さんのごはんを食べて癒されたかったんです～」
女の子は鳴上さんの腕に縋りつく。
何この会話？どうやらこの子は鳴上さんの随分親しい知り合いみたいだけど、恋人には全く見えないし、妹なのかしら？でも、鳴上さんは一人っ子のはず。
「鳴上さんの知り合いですか？」
「ああ、そうなんだが……とりあえずかなみ。話はこっちで…新島さんも悪い。第2資料室でいいかな」
私は第2資料室までついて行く。

かなみさんと言ったかしら、彼女は嬉しそうに鳴上さんの横にくっ付いて行く。
ファンの子がこの姿を見たらどう思うかしら……でも彼女の姿恰好では鳴上さんを狙うライバルとかには見えないでしょうけど。
「そこらへんに座って、新島さんは紅茶でいい？」
「お構いなく」
私は資料室の６人掛けの大きなテーブルの椅子に座る。
「私も紅茶で！あとごはんも！」
かなみさんは私の前に座る。
「わかった」
第２資料室の廊下を挟んだ給湯室へと鳴上さんは呆れた顔をしながら出て行った。

「自己紹介まだよね。法学部２年の新島真です。あなたはこの学校の生徒なの？」
私はごはんごはんと繰り返し鼻歌を歌ってるかなみさんに聞く。
「へ？違いますよ～。大学生に見えます？きっと賢そうなオーラがにじみ出ているですね私って！」
「じゃあ、高校生かしら？」
「ちちちち違います～っ！こう見えてもハタチです～っ!!」
「え？私と同じ年？」
とてもそうには見えない。子供っぽいというかなんていうか。
「へ？同じ年って、う～なんか大人っぽいです～。……わたしも自己紹介すべし！真下かなみです～。テレビで見た事ないですか？」
「真下かなみさん？テレビ……うーん」
聞いたことあるのだけど……どこでかしら。
「ええ？私を知らないんですか!?かなみん知らないんですか？」
「かなみの今の姿で、誰だろうと売れっ子アイドルの真下かなみだとは分からない」
鳴上さんが戻って来て紅茶を私とかなみさんの前置き、そう言ってまた直ぐに、部屋を出て行ってしまった。

「え？」
私は改めてかなみさんをまじまじと見てしまった。
……売れっ子アイドルの真下かなみって、まさかあのキラキラというかキャピキャピとした感じで若い子に人気の真下かなみ？……でも全然そんな感じが……
髪の色だって真っ黒だし。服も地味というかジャージだし、髪の毛もぼさぼさだし。メガネかけてるし。
「お肉は霜降り、動きはゆっくり、食べたら寝べし！　のおっきな牛さん、〝真下かなみ〟です！」
かなみさんは立ち上がり、眼鏡をはずして、ＣＭなどでおなじみの真下かなみのキャッチフレーズの振り付けを見せてくれた。
「ええ!?本物!?真下かなみ!?でも??」
お化粧はしてないけど顔もよくよく見れば真下かなみ。
胸も物凄く大きいし！本物？でもこれは流石に……私生活とＴＶとのギャップが凄すぎる。
いいえ、これはもしかすると、ファン等から隠れるための変装かしら？
「ようやくわかってくれましたか!?そうです。私がかなみんですっ!!」
かなみさんは大きな胸を突き出して、満足げに頷いていた。
その恰好で、そう言われてもあまり説得力がないのだけど。
久慈川りせだけでなくて、真下かなみさんも鳴上さんの友人ということのようね。
確か、二人とも同じ事務所だったような、そう言う繋がりなのかもしれないわ。
「私生活もオシャレをしたらどうだ？りせみたいに」
鳴上さんが戻って来てピラフとサラダをかなみさんの前に置く。
「私は良いんです！りせ先輩みたいに細くないですし！ファンには絶対バレないですし!!何よりも私が楽です!!普段の自分を見失わないべし!!……そして頂きますなのです!!」
……どうやら、変装とかではなくて、こういう子なのね。

しかも、あのテレビの明るいキャラクターは素のようだわ。
かなみさんは美味しそうに鳴上さんが持ってきたピラフを食べ始めていた。
「鳴上さんの手作りですか？」
「ああ、作り置きしてる。教授が食べたいと駄々をこねることが有るから。ピラフだったら冷凍出来るし便利だ。君も食べる？」
鳴上さんも料理ができるようね。
そうね。蓮も祐介も料理が出来るし、この頃は男子でも普通に料理するわね。
出来ない女子の方が多いぐらいかしら。
私達の中で料理ができないのは、双葉と竜司だけかも。
「いえ、私はお昼は済ませましたので」
そう言いつつ、私はかなみさんが美味しそうにご飯を食べてるテーブルから離れ、一つ離れた作業台のようなテーブルの席に座る。
鳴上さんもならって、私の前に座ってくれる。
「あの、本当に彼女はあの真下かなみさんなんですか？」
かなみさんにチラっと目をやり、鳴上さんに小声で聞く。
正直、今のかなみさんを見ていたら、一度は本人だと認識しても、また直ぐに疑問が浮かんできてしまうわ。
「……正真正銘本人だ。アイドルのかなみは、姿恰好は別人レベルでキャラ作りをしているが、性格は素のままだ。元（素顔）はいいから最初は清純派で売ろうとしたようだ。だが、あの性格が元でこうなったようだ」
鳴上さんは淡々と説明をする。
正真正銘本物。鳴上さんの話は今の彼女を見てると、自然と納得できてしまうわ。
「……それはそうとですね。先日の件でお伺いしたのですが、後の方が良いですか？」
再度、美味しそうにピラフを口にするかなみさんを見やってから、鳴上さんに本題を切り出す。
先日の事とはもちろん研究会のあの事件とペルソナの件。

かなみさんが居る前で話す内容ではないわ。
「いや、大丈夫だろう。内容にもよるが、かなみも俺がペルソナ使いだと知ってる。まあ、しばらくピラフに夢中になってるだろうし、この距離だと話の内容は聞こえない」
鳴上さんも苦笑気味にかなみさんに目をやっていた。
鳴上さんのかなみさんへの対応は、やっぱり妹のような感じがする。そう言うポジションみたいね。
蓮の双葉への接し方に似てる。妹ポジションから脱却しないと双葉にも目は無いかもしれないわ。

「わかりました。先日は家の前まで送って頂いてありがとうございました……」
私は一息ついてから、まずはタクシーで自宅マンション前まで送って貰った事をお礼を言う。
「いや、俺の方も巻き込んで悪かった」
「その……鳴上さん。根本的な事を聞きますが、ペルソナとは何ですか？」
「君はなんだと思う？」
鳴上さんは私の質問に対し、聞き返してきた。
「私、いえ私達の認識では、ペルソナは自身の抑圧された感情が、怒りによって顕現した存在。怒りを表現したもう一人の自分です。」
そうヨハンナは私の怒りの代弁者。許せないという心が呼び起こした私の半身。
「なるほど、怒りか……それであの勇ましい姿なのか」
「あ、あの姿は忘れてください！」
本当に恥ずかしい。あの姿を仲間以外の他の人に見られたと思うと……
「ん？カッコよかったけど？」
「恥ずかしいので……それよりも鳴上さんはどう認識してるんですか？」
「ほぼ一緒だ。だが完全にもう一人の自分だと認識している。それは

自分の中に存在する嘘偽りなき存在だと。しかしペルソナは成り立ちが人によって異なる。君……いや君らは怒りによってペルソナを顕現させることが出来たのか……俺達は自分たちの抱えている弱い心をシャドウに変えられ、それを立ち向かい受け入れることでペルソナを顕現させることが出来た。俺だけは少々違ったが」
「……シャドウに変えられた？どういうことですか？」
「神が作った世界に閉じ込められ、受け入れられない自分の醜い一面をシャドウに変えられ、そのシャドウに襲われた。そして実際にそれによって命を落としたものもいる。その自分の半身と言えるシャドウと対峙し、己の弱い心を受け入れる事によりシャドウはペルソナとして転生を果たした。だからそのペルソナは自らの心を表現した姿となった」
　どうやら鳴上さんと、私達のペルソナの成り立ちがかなり異なるみたい。
「私達は認知世界という場所で、人の心を弄ぶような巨大な欲望を持った人間の心の世界に入り込み、その中で自分の抑圧された心を怒りによって解放し、ペルソナが顕現したんです。結局その認知世界は、人間を弄ぶ神と名乗る存在が作りだした世界だったのですが……」
「神を名乗る存在が関わるか……しかし、君……いや君には仲間がいるだろう。絆の力を感じることが出来る。その君らは自らの意思で悪に抗うためにペルソナを解放した。……強いはずだ」
「私に仲間が居ることまで……どうしてそれを？それに絆の力とは？」
「君のペルソナからは女教皇のアルカナを感じた。仲間を思う心を感じる。君は強くて優しい」
　この人さらっとこんな事を言うなんて、やっぱり天然かしら？
「そ、そうですか」
「俺の持論だが、ペルソナとは人の内面を映したもの。自身の精神を具現化したものがペルソナだ。
　人によってペルソナの成り立ちや、扱いが異なる事が多い。君の場

合は怒りがキーワード、俺と俺の仲間は自身の醜い、いや弱い心だ。それによってペルソナの発動条件や振るえる力が大きく変わるようだ」
「精神を具現化……鳴上さんにも仲間が、それ以外にも？」
「ああ、俺が知っているだけで２０人は居る。ペルソナは一種の霊能力者だ」
「れ、霊能力者……あの、高畑教授がそうだと言ってましたが、本当にそんな人が」
　霊能者ってテレビとかで見かけるうさん臭い人という印象しかないけれども……
「ペルソナ使いなんてものが存在する。霊能力者が居ても全然おかしくない」
　確かにそうよね。私達がペルソナを使えること自体が、世の中ではファンタジーの世界だわ。

「ではシャドウとはなんですか？」
　私は次の質問をする。
「一概には何とは言えない。人の感情が集まって具現化したものであったり、死者の行きつく過程の物であったり、それぞれだ。そのような不確定なものをひっくるめてシャドウと呼んでいるだけで、発生過程は色々だ」
　そうなのね。私達が今迄パレスで敵対していたシャドウと、先日の神社跡で対峙したシャドウは何かが違っていた。
「……神や悪魔は存在するのですか？」
「存在する」
　鳴上さんは力強く断言した。
「……」
「……先日のあの神社に人柱として括られたあの女の子は、いわゆる人工的に生み出された限定的な神だ」
「え？どういう？」
「この世界の理に介入できる存在が神であったり悪魔だと……神や悪

魔は同列の存在であり、すべては別の存在ともいえる。人間の物差しで神や悪魔と分類しているだけの話だ。俺はそんな存在を幾つか知っている」
「あの…」
私は鳴上さんが言っていることが、なかなか理解できなかった。
でも、あの神を名乗った聖杯を思い浮かべ……何となくだけど、その意味が分かる気がした。
「あ……ごめん。まだこの話は早かったかな」
鳴上さんは申し訳なさそうな顔をしていた。
「いろいろとその、まだ、話が突拍子も無くて、よく飲み込めてはいないのですが……鳴上さんのお話は何となくですが理解できます」
私はまだ、鳴上さんの話を消化しきれなかった。
メメントスや認知世界は、あの神を名乗る聖杯が起こした現象だった。
あのような存在が他にも居てもおかしくないわ。
しかも、先日のあの神社での出来事……

「悠さ～～ん。何話してるんですか？私を仲間外れにしないでくださいよ～」
かなみさんが鳴上さんの横に椅子を持ってきて、勢いよく座る。
「かなみ。ピラフはもういいのか？」
「とりあえずは満足です～。腹半分目にすべし！ふっ～大分癒されました！」
「今日は仕事は大丈夫なのか？」
「それですっ！それなんです悠さん!!」
かなみさんは鳴上さんに顔を瑞っと近づける。
……かなり近いわ。
「……また、厄介ごとに巻き込まれたのか？」
鳴上さんはかなみさんの肩を掴み引き離してから、呆れたようにそんな事を聞いていた。

「ひどいです～。人をトラブルメーカーのように言わないでくださいよ～！」
　かなみさんは口をとがらして、かわいらしく抗議しているのだけど……今でも十分トラブルメーカーだと思うわ。
「じゃあどうした」
「聞いてください～。今日の午前中、映画の宣伝で先行上映会のゲストに出たんですけど、映画が始まって４０分ぐらいしたら、急に映画が止まっちゃって、しかも映画館全体が停電しちゃったんです～。復旧出来なくて……上演会は延期になっちゃんたんです～」
「ただの設備トラブルじゃないのか？」
「そこまでは良いんです!!私見ちゃったんです!!停電した瞬間に映画のスクリーンにおっきな穴が開いて!!なんか羽が生えた人がスクリーンの中に入って行ったんです!!」
　きっと停電寸前のオカルト映画のワンシーンを見間違えたのじゃないかしら？
「……」
　かなみさんの続きの話を聞いて鳴上さんの顔つきが変わる。
「それをスタッフの人に言っても、マネージャーさんに言っても信じてもらえなくて!!疲れてるんだ～とか言われて、せっかくだから休みなさいって帰らされたんです～！でも、私絶対見たんです～、あれは絶対いけない何かだったんです！」
　普通はそう思われるわね。でも、かなみさんの表情に冗談や嘘を言っている風ではないわ。
「面白――――い!!かなみくん!!実に面白い!!」
　突如として、資料室の大きな２段式のキャビネットの下の扉が勢いよく開き、興奮気味の大きな声で叫びながら人が這い出て来た。
　え？なんでキャビネットから、え？……どういうこと？
「教授、キャビネットで昼寝ですか……また風邪をひきますよ。寝るなら教授室で寝てください」
　鳴上さんは呆れたように、キャビネットから這い出て来た白衣姿の

中年男性……高畑教授に注意をしてるけど、突っ込むところはそこかしら？もっと他にあると思うのだけど。
なぜキャビネットの中で寝ていたの？確かに人が入れるくらいの広さはあるけど、そんな狭苦しい場所にわざわざ？
まさかと思うけど、この前風邪ひいて寝込んだのは、ここで寝てたせい？
かなみさんも驚いた様子で鳴上さんにしがみついていたわ。
「いや～、あそこさ。本と資料で埋め尽くされててさ～足の踏み場のないんだわ。それにさーここのキャビネットってちょっとひんやりしてて気持ちいいんだ」
高畑教授は頭を掻きながら言い訳を言う。
そう言えば高畑教授は教務棟にある教授室を使わずに、この第二資料室にいることが多いと聞いたことがあるわ。
教授室を使わないんじゃなくて、使えない程散らかしていたのね。
教授室はそこそこ広いはずなのに……
「また奥さんに怒られますよ」
「……さあ、そんな些末な事は置いといて！かなみくん!!さっきの話詳しく話したまえ!!」
高畑教授は鳴上さんの注意を聞かなかった事にし、かなみさんに指さし仰々しい物言いをする。
「ふ～…かなみ、教授に話してやってくれ」
鳴上さん、腕にしがみついていたかなみさんに高畑教授に話すように促す。
かなみさんはゆっくりと語りだす。
かなみさんがゲストで呼ばれた映画は今話題のホラー映画ね。
劇場も、先行上映会とあって、映画の雰囲気に合わせた凝ったセットで飾り付けされていたとの事。
開始して中盤当たりで、映像の中の除霊師が呪文のような物を唱えるシーンが流れた瞬間。劇場が停電して、真っ暗になったよう。
その際、かなみさんは、羽の生えたいけない物がスクリーンに出来た穴に入って行ったと……

「悠、どう思うよ。ビンゴだろこれ。場所も丁度起きそうな場所だ」
「ですね……」
ビンゴってやっぱり、前の神社跡のような現象が起きているという事よね。
神や悪魔やシャドウが関わる現象の何かが起きてる。
「まあ、かなみちゃんが見た羽の生えた奴が何なのかはわからんが、明らかに怪しいよな。かなみちゃんは何か持ってるな～。ラッキー!!」
高畑教授はかなみさんに、ニカっとした笑顔でグッドのサインを出す。
かなみさん。高畑教授とも知り合いみたいだけど……かなみさんって、こういう事に巻き込まれることが多いと言いう事かしら？
鳴上さんと高畑教授とはそれ繋がりで知り合ったのかな？

「う～、私は全然ラッキーじゃないです～。でも悠さんのごはんが食べれたからよかったとすべし！」
「悠、とりあえず今からそこに行ってみるか。ここからも近いしな。もちろん新島ちゃんも来るだろ？」
「え？私も？」
「だって悠から聞いたけど、新島ちゃん。ペルソナ使いなんだろ？」
「あの、高畑教授は私がペルソナ使いだと知って、あの神社跡調査の研究会参加許可をしたのではないのですか？」
「ははっ、そんな事わかるわけがない!!超偶然!!俺って何かもってんなーーー!!超ラッキーー!!」
……という事は、何も知らずにあんな危険な場所に行かせたという事？もしかして、あの場所があんな危険な場所だとも認識なかったんじゃ？
かなみさんじゃないけど、アンラッキーよ。
同じペルソナ使いの鳴上さんとこうやって話し合えたのはラッキーなのかもしれないけども。
ふう。高畑教授って相当変わった人ね。もう変人レベルだわ。
天才と変人は紙一重というけど、まさにそうね。

「新島さん。教授はああ言ってるけど断ってもいいよ。無理強いはしない。でも君のような使い手が居てくれると助かる」
教授が資料室のキャビネットからゴソゴソと何かの準備をしてる最中に、鳴上さんが私に耳打ちをする。
「ここまで聞いてしまったら、行かない訳にはいかないですね」
鳴上さんにそう言われると断りにくい。何よりも私自身、興味が湧いて来たのは確かだわ。

こうして鳴上さんと高畑教授、そしてかなみさんと問題の劇場へとタクシーで向かう。

真とかなみ

かなみさんが語った今日の仕事中遭遇した不可思議現象について、鳴上さんと高畑教授は、ビンゴだと評し、そしてかなみさんとその問題の現場である劇場へとタクシーで向かった。

ビンゴとは、二人の話ぶりからあの神社跡での出来事と同じく、シャドウや異界が関係してることだと……

劇場施設の関係者入口から入り、かなみさんが持っていた写真付きＩＤを提示し、忘れ物をしたという嘘で入る事はできた。

私達もかなみさんの付き添いという事で入る事が許される。

最初は若い警備員がかなみさんを引き留めて、ＩＤと照らし合わせ、訝し気に幾つか質問をし中々通してくれなかったけど、上司だろうベテランの警備員が出てきて、通してもらうことができた。

幸いにもかなみさんのＩＤに添付されていた写真には、今の姿のかなみさんが写されていたのも功を奏したのだと思う。

問題の映画上映会があった館内に入ると、高畑教授は真剣な面持ちで周囲を見渡しながら、早足に歩きだす。

「こりゃあれだな。このセットがまずいな。滅茶苦茶なつくりだが造形はしっかりしてる。何を参考にしたのかはわからんが、西洋の術式オンパレードかよ。これなんかヤバくないか？五芒星に十字に逆マンジまで、くーーーっ、作った奴マニアックすぎだろ！……しかもご丁寧に樫木の若木か？生贄に血……絵具だなこれ。本物だったらちょっとやばかったか？いや、豚足の燻製？こりゃ本物だ……まあ、これだけじゃ何も起こらんだろう。

しかし後は依り代がありゃ……って、映画のスクリーンか。鏡と同じく人の人間性や魂が宿ると言われてるが……なるほどな。ホラー映画か。恐れなどの恐怖の感情がそこに生まれるか……そんでここは霊脈の真上ときたもんだ。あとは映画のスクリーンにキーとなる呪詛か呪文の言葉や術符のようなものが音声や映像で映し出されて

いたら、偶然の出来上がりってか？」
　そう説明する教授の目はどこかギラついているように見える。
「……こっちも西洋の魔法方陣か。しかも召喚術式を模してる。本物の術式を偶然参考にして描いたのか？いやコピーか？六芒星のＳ極に３・６・６か……教授、こっちのはかなり精巧なものですよこれは……」
　鳴上さんはタブレットを片手に調査を進めている。
　かなり慣れてるような感じがするわ。
　鳴上さんと高畑教授の会話は、私には理解が及ばないけど、何かがここで起こってる事はたしかのようね。

　鳴上さんと高畑教授は劇場中を駆け回り、色々と調べている中、私はその様子を見ている事しかできない。下手に手伝おうとすると邪魔にしかならないと思う。今は……
「うーん」
　隣のかなみさんも私と同じようだけど、何やら考え事をしてるみたいね。
「どうしたの真下さん？」
「かなみでいいですよぉ」
「じゃあかなみさん。考え事をしてるようだけど、何か気が付いた事でもあるの？」
「うーん。なんで真さんってここにいるのかなーって？真さんって悠さんの追っかけじゃないですか～」
　かなみさんは今頃になってこんな事を私に聞いてきた。
「違います！追っかけはあなたでしょ！」
　さっきまでの話は聞いてなかったのかしら？
　ペルソナ使いだと紹介されたはずだけど。
「私は悠さんのお友達だから良いんですよ～。でもでも真さんは悠さんの何ですか？」
　何ですかと聞かれても……あっ、根本的な事を忘れるところだったわ。私は鳴上さんの大学の講義を受けてる生徒であり、先の研究会に

参加したのだから一応ゼミ生になるはずよ。
「私は鳴上准教授の生徒よ」
「という事は先生と生徒の関係ですか……ううう、なんかうらやましい。先生と生徒って響きが何だかやらしいです～」
「やらしくない！どうしてそんな発想になるのよ」
この子の思考にもついて行けないわ。
本当にアイドルの破天荒なキャラクターそのものね。

「かなみ、新島さん。来てくれ！」
鳴上さんに呼ばれ、私とかなみさんは劇場の舞台の上に登る。
「準備はいいか？」
鳴上さんは私達に真剣な顔で尋ねる。
「いつでもいいですよ～」
かなみさんはそれにピースで答える。
「え？なんの準備ですか？」
私には何のことかわからない。

「今から、異界に入る」
「ええ？今からですか!?」
「ああ」
鳴上さんは私の手を引っ張り、舞台正面のスクリーンに体が入って行く。
「ええ!?」
私とかなみさんも体がスクリーンに吸い込まれる……

？ここはどこかしら？見た事がない部屋…まるで映画にでてくる豪華な洋館の部屋のようね。
たしかスクリーンに吸い込まれたて……
先ほどまでとは場の雰囲気が違うわ。
まるでパレスの中のよう。
ここは異界かしら。

「大丈夫か？二人とも」
　目の前に鳴上さんが立っていた。
「はい、ここは？」
「スクリーンの中だ。この場所がどこかは分からないが」
　鳴上さんは意を察し答えてくれた。
「まままま真さーーん!!やっぱり、悠さんのストーカーでＳＭの人だったんですね!!悠さんにいかがわしいことをしようと!!」
「何を言ってるのかなみさん……あっ！」
　そんな事を私の後ろから突然大声で叫ぶかなみさんに振り返って抗議しようとしたのだけど。
　かなみさんの姿は、さっきまでのジャージでボサボサ頭の姿ではなく。茶髪に派手な可愛らしいコスチューム姿のアイドル真下かなみの姿だった。
　かなみさんは鳴上さんの下にかけつけ、明らかに敵視した表情で私の事をブンブン腕を振りながら指さしてきた。
「なんですかなんですかその恰好は!!悠さん危ないです。離れてください!!この人ヒャッハーする人ですよ!!間違いないです～!!」
　私もクイーンの姿に……やはりここはパレス、いえ異界ね。
「おちつけ。新島さんはペルソナ使いだ。しかもかなりの使い手だ」
「えええーーー!?聞いてませんよ!!でもその恰好なんですか!?まるで世紀末で覇王伝説な人みたいじゃないですかーー!!」
　かなみさんは尚も私の恰好の事を……結構気にしてるから、やめてほしいわ。
「鳴上さん。という事はかなみさんも……」
　私はかなみさんの言動にため息を吐いてから、先ほどから疑問に思っていた事を鳴上さんに聞こうとしたのだけど、私が最後まで言葉を発する前に、正確に意を汲み答えてくれる。
「そうだ。かなみもペルソナ使いだ」
「そうです～。驚きました？私もペルソナ使いです。踊って歌えるペルソナ使いです～っ！」

かなみさんはクルっと一回転し可愛らしく衣装をはためかせる。
かなみさんもやっぱりペルソナ使いだったのね。
そんな気がしていたわ。
「かなみ。早速だがこの異空間の中心を凡そでいい、探してくれ」
「はいはいーっ！ペ・ル・ソ・ナ！テルプシコラ顕現すべし!!」
かなみさんは踊るかのように、また一回転してピースサインをウインクと重ねると、かなみさんの後ろに、ハープを片手に持ち、赤とピンクのリボンを体中に巻つかせた、明らかに女性型の白を基調としたペルソナが現れる。
何故か、そのペルソナとかなみさんの周りだけスポットライトが当たっているかのように明るい。
可愛らしいペルソナね。
このペルソナはかなみさんの何を表しているのかしら？
少なくとも怒りや悲しみとかじゃなさそうね。
喜びとか楽しさというところかしら。
「テルプシコラ、わかりますか？」
かなみさんのペルソナの体中あちらこちらに巻かれているリボンが解け、リボンの切っ先を地面に張り付けたり、空中を漂わせたりする。
「うーん。この空間はそんなに広く無さそうです。中心はだいたい分かりました」
かなみさんは暫くしてから、鳴上さんに探査結果を報告する。
どうやら、ペルソナで探査をしていたようだけど、双葉のペルソナとは大分異なるようね。
双葉のは現代的というかデジタル制御みたいな感じだけど、かなみさんのはリボンで何かを探知させて情報を集めてるみたい。アナログ的な感じがするわ。
「この異空間は出来て間もない。それ程広がっていないだろう。複雑化もしてないはずだ。今の内ならば攻略も楽だろう。……かなみ、ここがどういう場所なのかわかるか？」
「テルプシコラではそこまでわからないです～。でもこれ多分今日の

上映会のホラー映画のセットの場所と同じです。部屋のところどころ作りが荒いですよ～」
かなみさんはそう言って天井を指さす。
私はつられて天井をみると、洋館風の天井は無く、この劇場の舞台上みたいに大きな照明が複数天井から吊り下げられていた。
なるほど、撮影現場の映画のセットという事ね。撮影された場所の舞台裏まで表現されてるわ。
「かなみ、案内頼めるか」
「ドンと大船に乗った気持ちでまっかせてください！悠さん！」
「新島さん。かなみのペルソナはサポートに特化したペルソナだ。一応戦うことはできるが、前線で戦える能力は低い。かなみは後方支援として俺と新島さんでシャドウの前にでる」
「わかりました」
鳴上さんの作戦に了承したのだけど、疑問が残るわ。
かなみさんのペルソナはサポートに特化したペルソナと鳴上さんは言っていたのだけど、双葉のＵＦＯじゃなかった…ネクロノミコンと同じような探査サポート系なのかしら、双葉みたいに敵の位置を探っていたわ。でもまったく戦闘ができないわけじゃなさそうだし、双葉をちょっと戦える感じにしたという事かしら？
「じゃあレッツゴーです～」
かなみさんはまるでピクニックに行くかのような軽い感じで、この部屋に唯一ある扉を開ける。
かなみさんは異世界に慣れてるようね。この状況に全く動じてない。余裕すら感じるわ。
私も修羅場をくぐって来た自負はあるけれど、やっぱりいざと言う時は、多少緊張するわ。
かなみさん。あんな感じだけど、実はすごい実力者なのかしら。
そうよね。あんなに強い鳴上さんがこの異世界に連れて来たという事は、鳴上さんからの信頼が厚いという事。鳴上さんと今まで相当の場数をくぐって来たという事よね。
でもなぜかしら、そんな鳴上さんがちょっと苦笑してる様にみえる

けど。
　扉を開けた先は、廊下ではなく、石壁に囲まれれ西洋風のお墓が並んでる学校の体育館程ある結構広い空間だった。
「あっ、ここも映画で見ました。多分ロケ地です～」
　かなみさんは楽し気ね。
　どうやら、ここも映画にゆかりがある場所をモチーフにして作られた空間のようね。
　鳴上さんと私とで警戒しながら、お墓の間を歩き、奥にある扉に向かう。
　かなみさんは鳴上さんの後ろにピタリと付いて来ていた。
「あっ、なんか来るです！きっとシャドウです！」
　かなみさんが語気を強めて知らせてくれる。
　すると、地面から人の手のようなものが現れたと思ったら、次々と人が地面から湧き出るように現れ……というよりも死体…ゾンビだわ。
「ゆゆゆゆゆ悠さーーん!!ぞ、ゾンビです。ゾンビのシャドウです～!!グロいです～!!」
　かなみさんは先ほどの楽し気な表情から一変して、怯えながら鳴上さんの後ろにしがみつく。
　この驚きよう……かなみさんが実力者だと思っていたのは私の勘違いだったのかしら？
　いえ、ただちょっと気持ち悪いものが苦手なだけなのかもしれないわ。
「おちつけ、かなみ」
「でででででも～！」
　かなみさんは鳴上さんの腰にがっちりしがみついていた。
「新島さん、頼めるか」
「はい、大丈夫です」
　このゾンビのシャドウ。見た目は気持ち悪いけど大したことはなさそうね。
「ヨハンナ！行くよ！」

私はペルソナ、ヨハンナを呼び出し、跨る。
私たちの周囲に現れたゾンビ6体をヨハンナの体当たりで、次々と吹き飛ばす。
ゾンビ達はそれだけで、黒い霧となって消滅した。
「……ババババ、バイク!?やっぱり、真さん!!世紀末でヒャッハーする人だったんです～!!怖い人だったんです～!!」
かなみさんは鳴上さんの腰を掴みながら、おっかなびっくりと言った感じで私を指さす。
「……もうそれはいいわ」
私は呆れながら、ヨハンナを戻す。
「鳴上さん……かなみさんは…」
「ああ、かなみはペルソナ使いとして覚醒してから結構年数は経っているが……場数を踏んでいない。ようやくペルソナの扱いに慣れて来たという感じだ。もし一人の時に巻き込まれても対処できる位の力はつけてほしいと……実戦が有ればこうやって慣らしている」
鳴上さんは私の聞きたい意図を正確に汲んで、答えてくれた。
「そうなんですか」
あの妙な自信や余裕は、ただ単にかなみさんの性格によるものだったのね。
場数を踏んでいないか……私達みたいに大きな事件に巻き込まれていないという事かしら……
「ああ、だがサポート系スキルについては中々の素質を持ってる」
「えっへん！悠さんに褒められたです！でも、真さんって、見た目と同じで怖……強いです～」
何処からその自信がくるのかしら。
しかも私の事を怖いって言おうとしたわ。
どこまで私のこのクイーンの恰好の事を引っ張るのよ。
「かなみ。新島さんは凄い使い手だ。頼っていい。」
「見た目通りです～。それで、真さんのあのバイクはなんですか？ペルソナみたいでした。真さんはどんなスキルを持ってるんですか？やっぱり釘バットとか斧とか振り回したりするんですか？」

かなみさんは興味深そうに聞いてくるのだけど……やっぱり、世紀末なんたらを引きずってるようね。いい加減にしてほしいわ。それに斧を振り回すのはノワールよ。
「あのバイクが私のペルソナ、ヨハンナよ。そうね。ディア系の回復と核熱系の攻撃術スキル、防御系の補助スキル、後は物理的な攻撃が得意だわ」
「物理的って見たまんまですね～。でも回復系と補助系もできて、攻撃術までできるって、万能じゃないですか！真さんってもしかして、物凄く強い人なんじゃ……」
「すごいな新島さん」
鳴上さんも感心してくれて、ちょっと嬉しいかな。
「私のペルソナ、テルプシコラは……物理的な攻撃とか苦手です。サポート系の補助スキルは一応全部使えますけど……一人に掛けるのが精一杯です。……攻撃術系はありますけど弱いです……一応フィールド探査とアナライズはできますけど……あやふやで、中途半端で全部わかりません……う、うううううう……ち……ち中途半端なんです～。……ペルソナ使いとして中途半端なんです……ううううっ……　ダンスなんて中学生の菜々子さんに全然かなわなくって……うううっ……アイドルとしても中途半端なんです……うっうううう……もう、悠さんのお嫁さんになるしかないんです～～っ！」
かなみさんは私に、自らのペルソナの能力について教えてくれていたのだけど、徐々に涙目になってきて、遂には泣き出してしまったわ。
中学生の菜々子さんというのは誰かわからないけど、彼女は彼女なりにちゃんと悩んでいるようね。
でも補助スキルが全系統が使えるのは凄いわ。サポートスキルに特化してるとはよく言ったものね。
怪盗団にもこれほど補助スキルに特化した人は居なかったわ。
そういえば、最後にとんでもない発言をしていたようだけど……
「かなみ。焦るな。ここまで出来たんだ。もう少しだ。努力は得意だろ？」

鳴上さんは優しい笑顔でかなみさんの頭にポンと手を置く。
「そう言ってくれるのは悠さんだけです～。わっかりました！頑張って見せます！明日に向かって打つべし！」
……もう、立ち直った様ね。
「それで鳴上さんのペルソナは何ができるんですか？」
「複数のペルソナが扱えるが、アナライズや探査系は苦手だ」
思った通りね。やっぱり蓮と同じ系統のペルソナ使いって事ね。
「引き続き鳴上さんと私が前に出ますね。かなみさんには敵を近づけさせないから安心して、でも経験を積むには実践が必要だから、かなみさん。余裕があったら敵に攻撃した方が良いわ」
「うううう、真さん。凄くいい人です～～！世紀末な人とかヒャッハーな人とか言ってごめんなさいです～」
かなみさんは私にそう言いながら飛びついてきた。
この子、悪い子じゃないんだけど。
そういえば同じ年なのよね。かなみさんと私って。
かなみさんを見てると双葉と同じぐらいの年下のように感じるわ。

墓場の部屋を抜けると、次はまた最初の部屋のような洋館風の部屋。でも西洋人形がづらりと並んでいるわ。これだけ数多く並んでいると不気味ね。
「この部屋も映画と一緒です。という事は……やっぱり、あの人形全部シャドウです!!ひゃ～！」
かなみさんがそう知らせてくれたと同時に、西洋人形達の目が一斉にこっちに向く。
流石に気味が悪いわ。
私も戦闘態勢をとり、拳を構えると同時に、西洋人形たちは一斉に飛びかかって来た。
私に襲って来た西洋人形を拳で次々と吹き飛ばす。
さっきのゾンビもそうだけど、弱いわね。これならメリケンサックとかが無くても、素手で十分ね。
鳴上さんもどこからか刀を取り出し、襲って来た西洋人形を刀に電

撃を纏わせながらすべて薙ぎ払う。
「に、人形怖いです～、真さんも怖いです～～、人形でもシャドウですよ!!素手で倒すなんて!!一子相伝の○斗神拳伝承者ですか!!」
……まだ、引っ張るつもりかしら。意外としつこいわ。
それにしても、前もそうだったのだけど、鳴上さんは刀をどこから取り出したのかしら、持ってる風には見えなかったのだけど……後で聞いてみた方が良いわね。
人形は次々と現れるが、私と鳴上さんで倒していく。
人形自体弱いのだけど、数はそこそこ多かったわ。
そして、次の部屋に入ると、そこは広々とした教会のような作りだった。
教会の祭壇の前には若い男の人が立っていた。
『ハニー、待っていたよ』
若い男はキザっぽい仕草で、投げキスをしてくる。
この人、どこかで見たことが有る顔……でも気配は人間じゃない。
瞳の色は黄金色に鈍い光を帯びているわ。……シャドウね。
「あーーっ、この映画の主演俳優の生野春信さん……のそっくりさんです～中身はシャドウです!!このシャドウが異世界の中心です～!!」
そういえば、若手俳優でドラマによく出てる人ね。私は良く知らないのだけど大学の友達がファンのようだったわ。なんでも若手ナンバーワン俳優だとか。
という事はこのシャドウはその生野春信の心の闇がシャドウ化したものという事かしら?
「なるほど。さっそく異世界の形成者と対面か。やはり初期で良かったな。あっさりと見つかった」
鳴上さんは刀を構えたまま一歩二歩前に出る。
『ノンノンノンノン……残念ながらねー、僕は男には興味がないんだよ』
いちいちしぐさが仰々しいわ。このシャドウ。
「鳴上さん、攻撃しますか?」
……嫌いなタイプだわ。

「いや、ちょっと待ってくれ」
　鳴上さんが私を制止する。
　また、一歩二歩、鳴上さんは生野春信と思わしきシャドウに近づく。
『男には興味は無いのに……ふっ、それとも僕の美しさが、男さえも虜にするのだろうか？』
「お前は何者で、どうやってここに現れた？」
『不躾だね。……でもいいよ。答えてあげるよ。僕は生野春信さ！いや、裏の顔かな？ファンの前やテレビや映画の前の爽やかで潔癖なイメージの生野春信という仮面を被らないと完璧じゃないんだ。だから僕はこの世界の王となって、ファンが勝手に思ってるテレビや映画の中の生野春信のイメージ像を僕は吸収して、本物になるのさ～』
「ドッペルゲンガーか、いやインプかそれともインキュバスか……そんなところか」
　鳴上さんはシャドウの話を聞き、何か呟く。
『男は嫌いだから、殺しちゃうよ？』
「かなみ。このシャドウをかなみだけで相手してみてくれ」
　鳴上さんはシャドウの言葉に耳を貸さずに、かなみさんの方を振り向きこんな提案をする。
「えええええー!?無理無理無理無理無理ですーーーーー!!戦えないです～～!!」
　かなみさんは腕と首をブンブン振って、嫌がっていた。
「大丈夫だ。インプか何かの小悪魔が生野春信の負の感情の一部を反映させたに過ぎない。力を感じない……かなみなら出来る。もしダメだったら俺が入るから」
　……確かに、力を感じないわねこのシャドウ。ゾンビにしろ西洋人形にしろ弱かったわ。
「でもでも～、怖いです～！」
「……かなみ、今日の夕飯。ハンバーグにしようか。チーズのせだ。特性のコンソメスープも昨日仕込んでる」
「はいはいはい、やります！絶対ですよ!!悠さん特性ハンバーグ２個とチーズダブル乗せですよ!!」

そう言ってかなみさんは鳴上さんの前に出る。
食べ物にとことん弱いようね、かなみさん。
『おやおや？真下かなみさん!!これはいい。君とはじっくり話したかったんだ』
「生野春信さん!!私のチーズハンバーグのために!!倒れてください!!」
かなみさんはビシッと生野春信のシャドウに指さす。
『ふふふふっ、タカクラプロのアイドルはガードが固くてね。先日久慈川りせにも振られちゃったよ。このイケメンの僕が折角誘ったのにさ。アイドル達は僕が誘うとみーんな尻尾振ってついてくるのにさ。なんかムカツクよね。でも、本命は君だったんだよ。その大きな胸を揉みしだきたくてね～。君に楽屋で声を掛けようとしても、何時も居ないんだ。入ったのを確認して中に入っても、芋臭いジャージのマネージャーしかいなくて、どこかに消えててね。君はマジシャンか何かかい？でも、それも終わりさ。今日こそ君を僕の物にするよ』
……最低な奴ね。鳴上さんがこのシャドウの事を本人の負の感情の一部を反映させた何かだと言っていたけど、それって生野春信本人はこんな事を実際に行っていたという事よね。
でも、その芋臭いジャージのマネージャーって、きっと普段のかなみさんの姿よね。本人とは知らずに、間抜けね。
「むむむ胸を揉む～っ！へへへ変態さんですか！変態です～！誰が変態さんの物になるものですか!!テルプシコラ!!変態さんをお仕置きすべし!!」
かなみさんはプンスカし、ペルソナを呼び出す。
『いい、いいよ。かなみん!!僕と合体しようーーー!!』
そう言って生野春信のシャドウは、頭から二本の髭のような細い角が生やし、肌は赤茶色に……そして、背中には悪魔のような羽が生える。
これが本性ね。
「……インキュバスか」
鳴上さんは呟く。

「テルプシコラ!!アナラーーイズ（探査）!!ふむふむ!!弱点見え見えです～」
『さあ、かなみん～、僕と合体しようよ～』
インキュバスの本性を現した敵が、かなみさんに襲い掛かろうとする。
「お断りです～！テルプシコラ！いっきますよ～！ミュージックスタート！はいそれ！（タルカジャ：攻撃力アップ）・キラッ！（スクカジャ：命中率回避率アップ）・ピース!!（ラクカジャ：防御力アップ）」
何故かかなみさんの周りでダンスミュージックが流れ出す。
それに合わせ、かなみさんはダンスを踊りだし、決めポーズを取って行く。
ペルソナテルプシコラはダンスの決めポーズに合わせて、リボンの先端からスポットライトの様に色とりどりの光がかなみさんを照らし、補助スキルを発動させていく。
「続いて～、えい！（タルンダ：敵攻撃力ダウン）・クルン！（スクンダ：敵命中回避率ダウン）・ズキューン!!（ラクンダ：敵防御力ダウン）」
先ほどと同じようにダンスを踊り決めポーズをとっていくと、テルプシコラの複数のリボンから色とりどりのレーザービームのような光線が放たれ、インキュバスにあたり、ダウン系の補助スキルが次々に発動した。
凄いわ。本当にこんなにたくさんの補助スキルを使えるのね。
でも……これって、無駄が多くないかしら？
『ああ!!いい!!もっとーーー!!』
攻撃を受けたインキュバスは何故か嬉しそうだわ。
「仕上げです～。ラブラブビームーー!!（マリンカリン：洗脳）」
かなみさんが指でっぽうを構えると、テレプシコラのリボンがハートを象り、そこからピンク色のハート型の光線が照射され、インキュバスに直撃する。
『ああん。もう。メロメロ～!!』
「はい！これでおしまいです～、光にな～れっ!?（コウハ：祝福属性小攻撃：弱点攻撃）」

かなみさんはテルプシコラからピコピコハンマーのような物を手渡され、インキュバスに向かって投げつけた。
『ああん。もうダメーーーん、昇天する～～ん!!』
インキュバスの頭にピコピコハンマーが当たり、光の粒子となって消える。
かなみさんは鳴上さんに会心の笑顔でブイサインを送る。
そして、かなみさんの周りで鳴り響いていたダンスミュージックが止まる。
かなみさん。なかなか個性的なペルソナと攻撃方法ね。
補助スキルがあんなに多彩に使えるのは凄いわ。
攻撃に無駄が多かったけど……。
でも、成長すると凄いペルソナ使いになるんじゃないかしら?
「かなみ、よくやった」
鳴上さんは、かなみさんの頭にポンと手を置く。
「えへへへへっ!」
かなみさんは満面の笑みね。

そして、本体を失った異世界空間は崩れるように消え去り、私達はスクリーンの中から強制的に出される。
クイーンの姿も解けたという事は、元の世界に戻ったのね。
隣のかなみさんもジャージ姿に。
「よー!お帰り～!!」
高畑教授が楽し気に私達に声を掛けて来る。
……はぁ、またなんだかんだと巻き込まれてるわ。私。
「新島さん。協力してくれてありがとう」
でも、鳴上さんにお礼を言われると、悪い気はしないのは何故かしら。
「いえ、私は……でも、敵が弱いんで私が居なくても大丈夫だったんじゃないでしょうか?」
「新島さん。敵が弱いと感じる新島さんは、ペルソナ使いとして凄まじい使い手だという事だ。この敵でも霊能が無い人や、普通のペルソ

ナ使いや霊能者にとっては脅威となるんだ」
「え？」
「ひと昔前のかなみだったら、確実にやられていた。……やはり君、いや君らが戦った神を名乗る存在というのは、世界を改変するレベルの厄災だったんだね」
「……」
確かにあの怪盗団での戦いの日々に比べると、今日のあの敵は、全く問題にならないレベルだった……
「新島さんどうだろう？これからも手伝ってくれないか？……無理強いはしない。でも世の中の裏側にはこれに類した事件があちらこちら起きている。今日みたいな小さなものから大きな物まで。君がいてくれると心強い」
鳴上さんはズルいわ。こんな言い方をされると……
「分かりました。但し、私は飽くまでも学生なので勉学を優先させてください」
断る事はできないわ。
「ああ、それで構わない。助かる」
私は後日、正式に鳴上准教授の特別ゼミ生となった。
今回の事件。
劇場のディスプレイが大いに影響したようね。
ディスプレイに描かれた召喚魔法陣が映画の中のシーンの術式と重なり、このホラー映画を見た観客の恐怖心と映画内の呪文のようなセリフが引き金となって、小悪魔に分類されるインキュバスの一種を偶然召喚してしまって、その呪文のようなセリフを言葉にした映画の中の主人公の生野春信に憑依したというのが、高畑教授と鳴上さんの見解だった。
生野春信自身、インキュバスが好む淫猥な煩悩を秘めていたらしくて、それも加味してこんな現象が起きたとの事。
ただ、生野春信に憑依したインキュバスを倒したからと言って、認知世界のように、生野春信さんの心の闇は解消されないとのこと。
という事は、かなみさんは現実世界で、生野春信に狙われる可能性

があるという事ね。
　でも、生野さんは普段の恰好のかなみさんに気が付いていないから、大丈夫かもしれないわ。
　それに、かなみさんは生野春信を今後は避けるだろうし、もし声を掛けられても、かなみさんの毛嫌いしてる調子だと、逆に手を上げかねない勢いだったし。
　今日も色々あったのだけど、あのアイドルの真下かなみさんと知り合いになるなんてね。予想外もいいところだわ。しかも彼女自身、ペルソナ使いというおまけつきで。
　杏や春、双葉に話したら驚くでしょうね。
　特に竜司なんて、会わせろってうるさいかな。

「ハンバーグ！ハンバーグ！チーズとハンバーグ！」
「……」
　あの後、何故か私もかなみさんと一緒に、鳴上さんのマンションで手作りチーズハンバーグをご馳走になることに……
　かなみさんが鳴上さんの料理で癒されると言っていた意味が十分わかったわ。
「おいしい……」
「でしょでしょ！悠さんの料理はぜーーーんぶ美味しいんです～。この料理で癒されない人はいないです～」
　かなみさんは自慢げだったのだけど、作ったのは鳴上さんだから。
　高級料理店でも味わえないわ。それ程美味しい。
　また、ご馳走になりたい……いえ、作り方を教えてほしい。
　お姉ちゃんにも食べさせてあげたいわ。

真と春とおかしな二人。

鳴上准教授の民俗伝承学科特別ゼミ生として、活動するようになって1か月が過ぎた。

鳴上さんには週に1回程度顔を出すだけで良いと言われていたのだけど、つい時間が空いてると、第二考古学資料室に足を運んでしまってる私。

当大学の民俗伝承学科の主な役割は、失われた土地の風習や歴史を掘り起こし記録する事、または風化していく風習の保管。または失われた風習や伝統行事の復活など多岐にわたる。

鳴上さんはそのために、全国各地へと自らの足で出向いていた。

鳴上さんや高畑教授が目星をつけてその土地に行く事も在るようだけど、地域の住民の方々に乞われて呼ばれたり、自治体や他の大学や資料館などからも呼ばれる事も多いようね。

ここからは他の大学の考古学系とは一線を画している所なのだけど、世の中の不可思議な現象をその土地の歴史や風習や神事から紐解き、解決したりと、現代の物理や科学ではとても証明できないような物を扱う事もあるみたい。

これは鳴上さんや高畑教授の個人の力が大きいようね。

更に、その中には大なり小なりはあるのだけど、神や悪魔、この世の裏側の存在が関わるような事柄なども、鳴上さんはペルソナの力で事が大きくなる前に収めて来た。

その筋では結構有名らしく、神社仏閣だけでなく地方のお役所などからも、そんな依頼が来たり、時には宮内庁などからも直接調査依頼を受ける事も在るらしいの。

また、民俗伝承学の方面以外からも、この前の映画館のように、オカルトチックな事件も呼ばれるようね。こっちは高畑教授のお寺の関係で霊能者としてかしら。

高畑教授は全国でも有名な考古学者ではあるのだけど、裏の顔は、実家がお寺さんで、ご本人も僧侶、しかも霊能力者。鳴上さん曰く、霊能力者としても一流だと言っていたわ。

本物の霊能力者という人物に初めて会ったのだけど、実在していた事に驚いたわ。
よく考えてみれば、私達ペルソナ使いも相当眉唾物の存在なのだけど……
高畑教授自身は普段はかなり変わった人で、とても偉い人に見えないし、僧侶や霊能力者と言われてもピンとこないわ。
でも、映画館のあの事件での高畑教授の様子を見れば、納得しないわけにはいかないかしら。
鳴上さんは考古学の世界では、若手の最有力者と目される人物で、大学卒業と共に准教授として、大学で教鞭を振るってる。
そしてご本人はペルソナ使いで、しかも蓮と同じく複数のペルソナを操れる。
その力は明らかに蓮と同じ……いえ、もしかしたらそれよりも上かもしれない。
少なくとも経験や熟練度は間違いなく蓮や私達よりも大分上のようだわ。

そして……
「悠さーん。今度、悠さん特製のチーズとトマトがいっぱいのラザニアが食べたいです～」
「またな」
「やったー！絶対ですよ！」
緑のジャージにボサボサの髪、大きな眼鏡をかけたオシャレとは無縁そうな女の子が、この考古学部第二資料室に上がり込み、まったく学科とは関係の無い会話を鳴上さんとし、嬉しそうに楽しんでる。
鳴上さんは苦笑気味に対応しているけど……彼女はこの学校の生徒では無いわ。
彼女の名前は真下かなみさん。
こう見えても私と同じ年で、学年で言うと一つ上。
どう見ても私より年上には見えないのだけど、それが真実だわ。
しかも彼女の表の顔は、キラキラ、キャピキャピとしたというのか

しら、あの売れっ子アイドル真下かなみなのよ。
普段のかなみさんの恰好は、アイドルの時とはもはや別人だと言っても過言ではないぐらいのギャップで、この姿のかなみさんは、普通に街を歩いていてもあのアイドル真下かなみだと絶対に気が付かれない。
それどころか、どうやら同じ芸能界の人にも気が付かれてないようなのよね。
かなみさんのそのジャージ姿は、芸能人だという事がバレないように変装してるわけでは無くて、この格好が本当のかなみさんの姿で、楽だからという理由なの。
動きやすい服を私も好んで着てるから、分からないでもないのだけど、流石にその恰好は厳しいわね。
私も杏程にオシャレに気を使ってるわけではないけど、それなりには服装には気をつけているわ。
かなみさんは、少しはオシャレをしたらどうだと言う鳴上さんの意見も全く聞く耳を持たない程に、オシャレに対する年相応の感性は無いみたい。
これで彼女に会うのは3回目、私もついその事を忘れてしまいそうになるのだけど、目の前の彼女は間違いなく売れっ子アイドル真下かなみなの。
仕事の合間をぬって鳴上さんに会いにここへ遊びに来ている。
彼女は鳴上さんの事が好きなのだろうけど、恋人にはとても見えない。
どちらかというと兄妹かな、鳴上さんが優しい兄でお転婆甘えん坊の年の離れた妹の面倒を見ているといった感じにみえるわ。
そんなかなみさんなのだけど、驚くことに彼女もペルソナ使い。
彼女のペルソナは補助スキルに特化したペルソナ　テルプシコラ。
戦闘は苦手みたいなのだけど、殆どの補助サポート系のスキルを使えるのは凄いわ。
まだまだ未熟なようで、鳴上さんに戦い方などを教わってる段階。

「鳴上さん、新玉市三十木町の地域調査の報告と、伝承や風習の資料をまとめておきました」
「助かる。新島さんがこうして手伝ってくれると、資料整理や論文作りが捗る。俺一人では流石にこの量は厳しかった」
「いえ、前回は同行できなかったので、せめて資料の整理の手伝いだけでもと」
「十分助かる」
鳴上さんの説明を受けながら、資料作りの手伝いをさせてもらってる。
日本の普段よく目にする身近な伝統行事や、慣れ親しんださり気ない風習や挨拶など、知ってたり、実際よく行ってる行動だったりしてるのだけど、改めて説明してもらうと、成り立ちや本当の意味も知らずに今迄生活していたことに、驚きと共に感慨深いものがあった。
それと、難解な歴史的解釈や事柄や、地方の風習とか中々普段目にする事がないような事柄は、今はまだ理解が及ばない事が多いのだけど、徐々に勉強中よ。
鳴上さんがいつも私に口癖のように語ってくれるのは『伝統や伝承には意味がある』と、その中でも失ってはいけないものが幾つもあって、それ等を失ってバランスが著しく崩れた際に、この世の裏側から改変、または修正力のようなものが働くと、それが形をとり、厄災へと繋がる。
その改変や修正力が大きい場合、それが神や大悪魔という人智を越えた存在として降りかかると……
そう語ってくれた言葉は、私の中でストンと腑に落ちる。
私達が体験したあの怪盗団での日々はまさにそれだった。
伝統や伝承とは直接かかわりが無いのかもしれない。ただ、人々の欲望が肥大化し、世の中のバランスが著しく崩れていたとは感じていた。他者を思いやる心を失い、自らの欲望だけを肥大化させていった。その結果なのではないかと。
私は資料整理とか文章をまとめるのは得意な方だし、なにより鳴上

さんの現地調査資料は見やすいし、事細かに書かれてるから、知識の薄い私でもまとめるのにそれほど苦にはならなかったわ。
高畑教授のメモは何を書いてるのか、さっぱりわからないから、手を付けられなかったのだけど。
民俗伝承学科のゼミ生となったからには、私が今できる事は行いたいと思ってる。

「真さーん」
「なにかしら？」
「ラザニアに合うスープって、コンソメスープとミネストローネ、どっちがいいと思います～」
「うーん、そうね。ミネストローネはラザニアと同じイタリアの伝統料理だけど、ラザニアもトマトがベースだから私はコンソメスープかしら、卵と玉ねぎを足して甘くしたコンソメスープなんて良いと思うわ」
「それです！真さん天才ですか！悠さーん。コンソメスープに卵と玉ねぎ入りのスープもお願いします～」
かなみさんはパソコンで作業してる私の横に座り、足をぶらぶらさせていた。
何気ない会話なのだけど、かなみさんはいつも楽し気ね。
私達はまだ3回しか会ってないのだけど、随分と親しくなったものね。
かなみさんは学年は上なのだけど、感覚としては年下の双葉と会話してるような感じ。
「そうだ。真さんも一緒に悠さんのお家でご馳走になりに行きましょう！」
「流石にそれは申し訳ないわ」
「大丈夫ですって、悠さんは何時も一人分作るのも二人分作るのも一緒だって言ってました。だから一人分が二人分、二人分が三人分になっても一緒です～」
かなみさん、それは流石に都合よすぎる理論だと思うわ。

「私は……」
私はかなみさんに断ろうとしたのだけど……
「新島さんもどう？資料まとめを手伝ってもらってるお礼も兼ねて」
鳴上さんはこの会話を聞いていたようで、資料を腕に抱えながら、そう言ってくれる。
「その……いいんですか？」
「かなみじゃないが、二人分作るのも三人分作るのも大して手間は変わらない」
「……では、お言葉に甘えて」
鳴上さんの優し気な眼差しに、ついそう返事をしてしまったのだけど。
よく考えなくとも男の人の家に、行く話なのに……。
かなみさんも一緒だし、鳴上さん自身、信頼できる人なのだけど、世間ではそうはみられないわよね。
「やったー！真さんと一緒に悠さんのごはん！ごはん！ご・は・ん！」
かなみさんは嬉しそうに燥いでる姿を見ると、そんな事は些細な事に思えてくるわ。
この日の晩、またしても鳴上さんの手作り料理を堪能することに……。
ラザニアはとても美味しい。
プロ顔負けの美味しさ。
お姉ちゃんにも食べてもらいたいわ。
レシピを教えて頂けないかしら？

数日後。
私は午前中で大学の講義を終え、午後から春が経営してる世田谷にある喫茶店に向かう。
春は父親の遺産の一部であり、祖父の代からあるこの喫茶店の経営者でありながら、アルバイターとして店先に出てるの。

接客業とコーヒーの道を一から学ぶためにと。
春と普通に会うためだったら、ルブランや春の家や私の家という事が多いのだけど、
私が春と春の喫茶店で待ち合わせをするのには訳があった。
昨日、電話で春から相談があったの。
一週間前のある日突然、喫茶店のアルバイト中に知らない男の人に急に告白されたとか……。
それ以降、何人もの人に結婚やら恋人にならないかなどの告白を受けたと。
前々から、男の人に声をかけられることはあったらしいのだけど、告白までのようなマネは今迄なかったらしいの。
春は全てキッパリ断ったのだけど、流石におかしいと思って、私に相談を……。
もしかしたら、自分が知らず知らずの内に男の人を惑わすような振舞や恰好をしてるのではないかと、気にしてたわ。
春は私から見ても可愛らしいけど、急にそんな事になるなんて、何かあると思って間違いないわ。
もしかすると、春が所有してる父親から相続した莫大な遺産が目当てなのかもしれないわね。
もし、そんな事情であれば、皆に相談しないといけないし、弁護士のお姉ちゃんを頼った方が良さそうね。

そう言う理由で私はとりあえず、春のアルバイトの様子を見るために、外から窓越しに喫茶店の中の様子を伺っていたのだけど、春はいないわね。休憩中かしら？
私は春に電話をかけてみたのだけど、でないわ。
どうしたのかしら？
すると、喫茶店の横の狭い路地から、何やら争ってるような声がかすかに聞こえ、気になって、路地に入ったら……
ビジネススーツ姿の男の人二人の背中が見え、その奥に困り顔の春の姿が……

まさか、春に強引に迫って…こうしてはいられないわ。
私は静かに近づき、背の高い方の男を後ろから腕を取り、関節を決め立ったまま取り押さえる。合気道の基本の型。こういう時は便利ね。
「痛たたたたたっ、ちょっ？何？痛たたたたっ」
「あなた達、何をやってるの！」
私は関節を決め痛がる男を取り押さえたまま、もう一人の金髪の男に凄んだ。
「およよよ？お姉さん急に何するクマか？んん？美人お姉さん登場クマ！」
金髪の男は独特のしゃべり方で、私に抗議……いえ、なんなのかしら？私を見て嬉しそうにしてるわ。
「ま、マコちゃん!?……違うのこの人たちは違うのよ!?」
春は何故か慌てて、私を止めようとする。
「痛たたたっ、ちょっ、ギブっ、ギブだって!?」
「マコちゃん！マコちゃんの勘違い！この人たちは私を助けてくれたの！」
私は春に腕を掴まれ、目を見て訴えかけられる。
「えっ？」

この後、春の喫茶店のテーブル席で……
「ごめんなさい。私、早とちりしてしまって」
私は先ほどの男の人二人にテーブル越しに頭を下げる。
どうやら私の早とちりだったよう。
失敗したわ。
「ははははっ、いいっていいって、痛かったけど」
私が技を決め、取り押さえた男の人は、軽い感じで許してくれた。
「お姉さん強いクマね～」
外国の方かしら？金髪碧眼の美少年という感じのこの人、口調もちょっと独特ね。
「改めて、花村さんにクマさん。助けて頂いてありがとうございます」

私の隣に座る春は二人に頭を下げ、お礼を言う。
「春、この方たちは知り合いなの？」
「先月位からの常連さんなの」
「ははは、俺、花村陽介。仕事の研修で東京に来ててさ、此処の近くの研修所に通ってるんだけど、この喫茶店気に入っちゃって、コーヒー美味しいし、接客もいいし、なんか落ち着くし」
「そうクマね。クマは熊田クマ。陽介と研修クマ。春ちゃんは可愛いし、いつも研修の帰りに来てるクマ♪」
私が取り押さえてしまった男の人はちょっと軽い感じの花村陽介さんで、もう一人の金髪碧眼の美少年然とした口調が変な人は熊田クマさん。春の喫茶店の常連さんとの事だった。
花村さんは私達より、少し年上に見える。仕事の研修に通ってるという事は大学新卒で新入社員研修ということなのかしら？熊田さんはどちらかというと、私達と同じかそれよりも若く見えるのだけど、話ぶりからすると花村さんと同期みたいね。
「私は春の友人で新島真です。改めて、先ほどはすみませんでした」
私は自己紹介をしつつ、再度頭を下げる。
「もう、いいっていいって。新島さんは春ちゃんの友達って事は大学の？」
花村さんはネクタイを緩めながら、軽い感じで私達に質問する。
「いえ、高校からの友達です」
「春ちゃんはプリチーだけど、真ちゃんはビューティー&クールガールクマ～」
金髪の熊田さんは子供っぽい笑顔で、面と向かってこんな事を言うのね。
……この熊田さんって人は、ちょっと気を付けた方が良さそう。
初めて会った女性にこんな事を言うなんて、女性にだらしないのかしら？それとも天然なのかしら？
お互い自己紹介が終わった所で、春は先ほどの路地裏での経緯を話す。

「実は、裏路地にゴミ出しをしていたら、急に知らない男の人に声を掛けられて、交際を迫られたの。きっぱりお断りしたんだけど、強引に腕を掴まれて……そこに花村さんとクマさんが助けに来てくれて、追い払ってくれたの」
そうだったのね。花村さん達がその男を追い払った後の現場を私が目撃して、春が花村さん達に迫られてると勘違いして、花村さんにあんな真似をしてしまったのね。
私の早とちりもいい所だわ。春の恩人に手を上げるなんて……。
「そういや、春ちゃん。この頃男に声かけられる事多いような……」
「でも、春ちゃんはぜーんぶきっぱり断るクマ。ムムムムム、という事は、春ちゃんは彼氏がいるクマね！」
花村さんは真面目な顔で春に何か聞こうとしていたのだけど、熊田さんが横から春にこんな事を聞いてしまう。
「え？彼氏なんていませんよ」
「じゃあ、クマが春ちゃんにナンパしていいクマね？」
「お断りします」
春はにこやかな笑顔できっぱりと断った。
「即答クマ！オヨヨヨヨ、雪ちゃん並みにしどい～」
熊田さん、がっくりしてるわね。
春は見た目大人しそうだけど、嫌な事は嫌だときっぱり言えるのよね。
私も声を掛けられる事があるけど、即答できなくて、しどろもどろになるのに。
見習わないといけないわね。
「お前バカだろ……。春ちゃんがナンパで困ってるって言ってるそばからナンパする奴がどこに居るんだよ」
花村さんの意見はもっともね。
どうやら花村さんは節度と常識を持った人の様ね。
「ここにいるクマ！」
熊田さんはさっきとうって変わって、元気よく返事をしていたのだけど……。

さっきからのは冗談半分だったのかしら？
「ああ、わかったからクマ、ちょっと黙ってろっつうの！」
うーん。どうやら、熊田さんは相当天然が入ってるようね。
この分だと警戒しなくともよさそうね。
熊田さんの暴走気味な感じを、花村さんがいい塩梅で押さえている感じね。
花村さんと熊田さんはどう見ても、昔からの親友みたい。
竜司と祐介のやり取りを思い浮かべるわ。
「じゃあ、真ちゃんをナンパするクマ！」
「わ、私もお断りします」
「しくしく、連敗クマ」

「はぁ、そういや、春ちゃんの事もそうだけど、この頃あちこちでナンパする奴が増えてるような気がする」
花村さんは熊田さんの事を余所に置き、ため息交じりに話を元に戻そうとしたのだけど……
「はいはいはい！クマはこの辺で前から逆ナン待ってたクマ！綺麗なマダムたちに声掛けられまくりクマ！」
「そのたんびに断る俺の身にもなれよ！それに、いちいち話の腰を折るなよな！ちょっと黙ってろって！はぁ、……話を元に戻すけど、それだけじゃない。やたらとカップルが増えた気もするし、なんていうか、この辺りの雰囲気がなんかおかしい感じがするんだよな。この店も以前に比べて、明らかにカップルが多いし、前までは結構お年寄り夫婦とか、常連客ばっかりだったのにさ」
花村さんは見た目は軽い感じの人だけど、気配りが出来る人見たいね。
熊田さんは相当天然が入ってそう。もしかしたら、祐介といい勝負かも知れないわね。
「花村さんもそう感じますか？実は私も一週間前ぐらいからちょっと変かなって。私が男の人に声を掛けられるのもそうなんですけど、お客さんの層もちょっと、……それにお店の雰囲気も少し、なんていう

のか……」
　春も花村さんの意見に同意の様ね。
　どうやら、告白騒動は春だけじゃないよう。
　確かに、以前このお店に来た時は、落ち着いた雰囲気のお客ばかりだったようなのに……、カップルがやたらと目につくし、そのカップル達のスキンシップもちょっとね。
　雰囲気が少しというか、大分違う様に思うわ。
「やっぱり春ちゃんも？」
「はいはーい！クマもおかしいかなーーーって、感じてたクマ。なんか皆、心に余裕がないクマ。クマみたいに～、いつでもどっしりずっしり構えてナンパすればいいクマ」
　熊田さんもよくわからないけど、春や花村さんと同じ意見の様ね。
　何かしら、この感じ、何かに似ているわ。
　私は春にこんな事を聞いてみた。
「春が急に告白されたのが1週間前からって言ってたわよね。その前ぐらいから、この辺で何か変わった事とかなかったかしら？」
「うーん…何かあったかな？……そう言えば、関係は無いと思うのだけど、この喫茶店の路地裏の奥に古い小さなお社があるの。縁結びにご利益があるとかで、ちょくちょく人が訪れていたのだけど。自治会の会長さんが町おこしの一環で、縁結びの神様として大々的にアピールしたいって言いだして、その小さなお社におっきな看板やら、電飾まで施しちゃって……、風情が無いって、皆反対したんだけど、自治会長さんが強引に……、それが確か１０日ぐらい前かしら。それ以外には……うーん」
　それって、もしかして……最近鳴上さんに教えて頂いた典型的なパターンじゃないかしら？
　その土地に古くからある小さな社や地蔵尊等は何かしら意味があって建てられると。干ばつのための雨乞いや疫病や祟りを静めるためだとか、そう言う負の物を正にただすために建てられる。地を流れる霊脈の流れを正したり、風水に基づいて建てられたり、本当に神

様の力を収める器として建てられたりと、いずれにしても、負の物を封印したり、寄せ付けないという意味が込められてる事が多いのだそうよ。
でも、時代と共にいつしかその本当の意味を知る人も居なくなり、人が願いたい物を願う様になり、商売繁盛だとか恋愛成就や、家内安全などに変異していくことが多いのだとか。
お社を変に弄ったり、勝手に壊すと、本来の役目のはずの、負の物の封印が解かれたり、薄れたり、地に流れる霊脈の制御が狂ったりすることで、いろんな影響が出るとか。
鳴上さんに出会って民俗伝承学科のゼミ生になにならなければ、春のこの話が怪しいなんて思わなかったでしょうね。
これは鳴上さんに相談した方が良さそうね。
その前に、鳴上さんに状況を説明するのにも、お社の様子を見ておいた方がいいかしら。
「春、そのお社に案内してもらえないかしら？」
「え？この話、なにか関係あるの？」
春は首を傾げる。
「行ってみない事には何ともわからないけど……ちょっとね」
私は含みを持たせた言い方をしながら、春にアイコンタクトを取る。
流石に、花村さんや熊田さんの前で、霊脈やら神様やら祟りだのの話はできないわ。
間違いなくオカルトの部類の話だもの、ペルソナや認知世界を知ってる私だって、鳴上さんに体験させてもらわなかったら、こんな話は信じなかったでしょうしね。
花村さんや熊田さんに、変な目で見られるに決まってるわ。
「わかったわマコちゃん。花村さん、クマさんありがとうございました。あの、ここのコーヒーは私からのお礼という事で……」
春は私の意図を理解してくれて、花村さんとクマさんに別れの挨拶をして、席を立とうとしたのだけど……。
「俺達も付き合うぜ。ここで友人と待ち合わせなんだけど、まだ時間

があるしさ。また、さっきみたいな強引なナンパ野郎が出ないとも限らないしさ。まあ、新島さんが居れば大丈夫そうだけど。これも何かの縁って事で」
「そうクマ、クマの怪しさセンサーがビンビンに反応してるクマ！レッツゴークマ！」
花村さんと熊田さんもそう言って席を立つ。
付き合ってくれる気満々のようね。
どうしたものかしら、花村さんや熊田さんに私の推測のオカルト的な話をするわけにもいかないし、そうかといってご迷惑をおかけしたのに、せっかくの申し出を無碍に断るわけにはいかないし……。
うーん。今はお社の様子を見に行くだけだから、問題はないかな。
春には後で、私の推測の話を聞いてもらえばいいのだし。
「ありがとうございます」
私はお礼を言って、お二人の厚意を受け取る事にする。
喫茶店を出て先ほどの裏路地へ、春と私が並んで先に歩き、その後ろに花村さんと熊田さんと問題のお社へと向かう事に。

真と春とおかしな二人。【中編】

私は春から先日電話で相談を受けたのだけど……まさかこんな事になるなんて思いもよらなかった。

春は一週間程前に、アルバイト先の喫茶店で急に知らない男性から告白を受けて、それ以降何人もの男性に結婚やら恋人にならないかとかの告白を立て続けに受けるようになったとか。

春は流石にこの状況はおかしいと思い私に相談を……

春は知らず知らずの内に男性を誘惑するような振舞をしているのか気にしていたのだけど、私はそうは思わなかった。

その話を聞いて私が真っ先に思い浮かべたのは、春が亡くなったお父さんから引き継いだ莫大な遺産を狙っての事なのかもしれないと。

私は心配になり、翌日に春のアルバイト先の喫茶店へと様子を見に行く事に。

私は喫茶店に着いて早々、裏路地で春が男性二人に強引に迫られている姿を目撃し、春を助けるために男性の一人を取り押さえたのだけど……、それは私の大きな勘違いだった。

私が取り押さえてしまったちょっと軽そうな感じの男性は花村陽介さん、もう一人の男性は金髪碧眼の美少年然とした口調が独特な熊田クマさん。

お二人は春のアルバイト先の常連さんで、春が男に強引に交際を迫れていた所を見かけ、助けに入り、その男を追い払ってくれた春の恩人だった。

私は喫茶店で花村さんと熊田さんに謝罪し、春はお二人に改めてお礼を。

お二人は私達と年はそう変わらないように見えるのだけど、社会人で長期研修の為に東京に来られ、研修先の近隣にある春の喫茶店に通う様になったとか。

花村さんは、見た目は軽そうに見えるけど、話してみると節度を持った常識人。

熊田さんは、名前は日本名だけど海外の方の様、金髪碧眼の美少年

然として、私達より若く見えるわ。
言動はかなり破天荒でそれを花村さんが窘める感じ、どこか祐介と竜司の関係に似てるわね。
お二人は悪い人にとても見えない。
そんな花村さんと熊田さん、春と私との会話の中で、春が最近急に続けて告白を受けていた事について話題が上がる。
春やお二人の話から、春だけでなく、近隣でもナンパが横行し、さらにはカップルの往来が増えてるとか。
そういえば落ち着いた雰囲気だった春の喫茶店も、カップル客が増えどこか様子がおかしい。
私は春が告白され始めた頃、近隣で変わった事が無いか聞いたのだけど、あまり関係ないかもしれないけどという前置きで春が語った内容は、私の勘に引っかかった。
この喫茶店の裏路地の奥に、縁結びのご利益があるという古い小さなお社があって、何でも自治会長さんが、そのお社を町おこしの一環として、縁結びの神様として大々的にアピールするために、電飾を施したり、液晶画面のある大きな看板を立てたりとか、勝手に改装を行ったと。
小さいながらも厳かな雰囲気のあったそのお社の風情を著しく損なうような様相に、近所の方からは不評だとか。
私が引っかかったのはそこね。
本来、神様を奉る神社やお社などには何らかの意味があって、その場所に建立され、その姿形状もそれに合わせて作られてる。
だから、神社やお社を無闇に壊したり移動させたりすると、その土地のバランスが狂い、周囲の環境に歪みが生じ、自然災害や疫病等として現れる…それが祟りだとか呪いだとか言われるものの正体。
もちろん鳴上さんからの受け売り。
春から聞いた話は、まさしく鳴上准教授の元で教わっている民俗伝承学でいう、なんらかの歪みが起きている状態ではないかと……。
この歪みは大きくなれば、諸所の問題が起きる。
最初は違和感ない程度の些細なものだったものが、徐々に現世に影

響が現れるようになり、ありえない自然現象や災害、疫病や不自然な事故等、科学では証明できない様な現象が現れる。
もし、そのお社の改装が原因で、この地域の雰囲気がおかしくなったというのであれば、すでに現世まで影響が出て来ていることになる。
歪みはそこそこ大きくなってる可能性が高いわ。
放置してしまうと、歪みは更に酷くなり、何らかの実質的な被害が出るかもしれない。

飽くまでも私の推測が当たってるのであればという前提なのだけど。
もしかすると、この前のかなみさんの映画試写会時のような異界化が起こってるのかもしれない。
何にしろ、鳴上さんに相談する方がいいわね。
とりあえずはそのお社を確認して、鳴上さんに状況説明できるようにしておきたい。
春に問題のお社に案内してもらおうと思ったのだけど、花村さんと熊田さんも一緒に来て下さる事に……。
春には事前に私の推測の話を説明するつもりだったのだけど、花村さんと熊田さんの前では憚れるわ。
こんなオカルトじみた話をこのお二人に聞いてもらうわけにはいかない。
こんな話を信じてもらえるはずが無いし、変な目で見られるのが落ちね。
それに、無闇やたらとこの話を人にするものでは無いように思うわ。
異界や本物のオカルト事件にかかわるなんて事は、普通は無いのだがから。

私達は春の案内により、その問題の小さなお社へと向かう。
「マコちゃん、ここよ」

「……え？」
春にここだと指し示された場所を見て、私は一瞬目が丸くなる。
「なんだこれ？趣味が悪いどころの話じゃないっての」
「わぉ！ラブラブホテルそっくしクマ!!」
「あーあ、言っちまったよ。皆までそれ言っちゃう？」
「雪ちゃんの逆ナン城を小っちゃくした感じクマね！」
「……まだ、それ引っ張ってるのかよ」
花村さんと熊田さんがそう言うのも無理はないわ。
雪ちゃんの逆ナン城が何なのかは分からないけど、私はパチンコ店の外観の様な印象も受けたわ。
そこには神社やお社にある厳かな雰囲気など一つもなく、ネオン街にも引けを取らないギラギラした何かがそこにあった。
よく見ると、こじんまりとした鳥居が小さなお社の前にあるのだけど、電飾が巻かれた上に、大きな液晶画面が取りつけられ、流れる映像にはこの神社の御利益である恋愛成就についてだけじゃなくて、ラブホテルの宣伝等まで流れ、もはや鳥居本来の役割である結界の意味もなしていない。
狭い敷地には派手な電飾や宣伝の立て看板が立ち並び、怪しいお店の割引券なども置かれ、さらには自動販売機が鳥居の両脇に置かれ、その自販機には恋愛に関するお守りとおみくじが多岐にわたって販売されていた。
小さなお社自体にも派手な電飾が掲げられ、お賽銭箱にも液晶画面が取りつけられてる。
「春……花村さんではないけど、これは趣味が悪すぎるわ」
「うん……自治会長さんは不動産屋とその…歓楽街のお店やラブホテルの経営もされてて……それで」
これは想像以上に酷いわ。
普通に考えても罰当たりだと思うのだけど。
やはり、これが原因で歪みが起きているのではないかしら。
早速、明日にでも鳴上さんに相談した方が良いわ。
鳴上さんにこのお社の状況説明するのにも、写真を撮った方が一目

瞭然ね。
私はそう考え、スマホでお社全体を撮ろうとしたのだけど……。
『助けて……』
か細い女性……いえ、女の子の声が何処からともなく聞こえる。
明らかに春の声じゃないわ。
まさか、誰か強引なナンパをされてる人が近くに居るのかしら？
私は咄嗟にそう思って周囲を見渡しても、私たち以外誰もいない。
「春……今、助けてって女の人の声、聞こえなかった？」
私は春に訪ねる。
「え？何も聞こえなかったけど……」
春はそんな私を不思議そうに見つめながらそう返事をする。
『……助けて……』
「今も聞こえたわ、ほら」
「マコちゃん？何も？」
春には本当に聞こえてない様子。
『……助けて……』
「どうかした？春ちゃんと新島さん」
花村さんはそんな私達の様子に、声を掛けてくれるのだけど、どうやら花村さんにもこの声が聞こえていないみたい。
「……え？」
この声が聞こえるのは、私だけ？
ま、まさか、ゆ、幽霊？
私は考えたくもないのだけど、そんな事を思い浮かべてしまった。
私、幽霊は大の苦手、というか考えただけで恐怖で足が竦むのよ……。
双葉には、シャドウも幽霊やお化けみたいな物なのに、シャドーは平気で何故幽霊やお化けが怖いのかと不思議がられるけど、だってシャドウは実際に見えるし拳で何とかなるけど……幽霊やお化けは触れないし、怖いじゃない。
私は私だけに聞こえるその声に恐怖し竦んでいた。
「ま、まこちゃん大丈夫？」

顔色を悪くしてるだろう私を、心配そうに見つめる春。

「クマにも聞こえるクマよ、助けてって。若い女の子の声クマ♪きっときゃわいい子クマ！こうしてはいられないクマ！今から助けに行くクマよー」

熊田さんもどうやら聞こえてるよう。

熊田さんはそう言って、鳥居をくぐり小さなお社の前に立つ。

『……助けて』

「この辺から聞こえたクマ！」

熊田さんは小さなお社に円を描く様に指さす。

その小さなお社はとても人が入れる大きさでは無いのだけど……

でも、確かに私もその辺で聞こえた様な気がするわ。

「クマ、まじかよ？俺には何も聞こえないぞ」

「私も何も……」

「……」

花村さんと春も熊田さんに続き、小さなお社に立つけど、聞こえてないみたい。

私は春の腕にしがみ付き、恐る恐る春に続く。

「クンクン……クンクンクンクン……クマの怪しさセンサービンビンクマ！」

熊田さんは匂いを嗅ぐ仕草をし……。

「ここクマ!!」

そして、熊田さんが指差した先には…お賽銭箱に取り付けられていた液晶ディスプレイ。

その瞬間、液晶ディスプレイから淡い光が漏れだし、熊田さんは指し示した指からディスプレイに吸い込まれていく。

「オヨヨヨヨヨヨ!?」

「おいおいおいマジかよ、クマ!?どうなってるって……」

花村さんは液晶ディスプレイに吸い込まれようとする熊田さんの手をとり引っ張ろうとするけど、花村さんも吸い込まれて行く。

「ええ!?クマさん!花村さん!?」
そんな花村さんの腕を掴む春も吸い込まれて行く。
「春!?」
そして、元々春の腕にしがみ付いていた私は、春の腕を引っ張り上げようと抵抗するも、吸い込む勢いが止まらず、私も吸い込まれてしまった。
これは……まさか……

「に…いじさん……新島さん……」
男の人の声……誰?
「ううん……」
そう言えば、さっき私はお社を調べて……
私は胡乱な記憶をたどりながら、目を開こうとする。
「よかった。気が付いた」
目の前には花村さんがホッとした顔で、私の顔を覗き込んでいた。
私は寝ていた?ここは?
明るい……、日が差してるのかしら?
それに背中にはデコボコとした硬い感触が伝わって来る。
地面のようね。
私は倒れてたのかしら。

「あっ!」
私はそこでようやく思い出し、勢いよく起き上がる。
お社の液晶ディスプレイに吸い込まれて……
「はは、俺もさっき目を覚ましたんだけどさ、こんな感じに」
花村さんはそう言って苦笑気味に周りを見渡す。
私も花村さんに促されるように周囲を見渡すと、そこは長閑な田園風景が何処までも広がっていた。
青々とした稲や草木は風に揺れ、柔らかい日差しの温かな光に包まれていた。

今の東京ではまず見られない風景。
見た事も無い風景なのだけど、何処か心が落ち着く。
「ここは……」
あの状況で、液晶ディスプレイに吸い込まれたと言う事は、ここも異界なのかしら。
そこで私はある事に気が付き、慌てて自分の姿を確認する。
今日着ていた私服姿のまま。
よかった。
勇ましいクイーンの姿でなかった事にホッと安堵の息を吐く。
あの格好を初対面の人に見られるのは流石に憚れるわ。
どういう事かしら？
状況からしてここが異界であることはまず間違いないわ。
私がクイーンの姿に変身していないのは、この異界の主からは敵とみなされていないと言う事なのかしら。
それに熊田さんと私だけに聞こえたあの『助けて』と助けを求める少女の声。
その声の主が私達をこの異界に招き入れたのかしら。
……分からない事だらけだわ。
分かっている事は、私達が今いるここが異界の可能性が高いと言う事。
……あっ！
という事は一緒に液晶ディスプレイに吸い込まれた春も巻き込まれてるわ。
「春？……」
私は慌てて再度、周囲を見渡すが、春の姿は見えない。
それに熊田さんも……。
「俺も気を失ってたんだけど、気が付いたらここで、近くで新島さんが倒れてたのを見つけはしたんだけど、この付近で春ちゃんとクマは見当たらなかったんだよな」
まず、春と熊田さんもこの異界らしき場所に入ったと考えて間違いないわ。

そうなると春と熊田さんは私達とは違う場所に飛ばされたと考えた方が良いわね。
それにしても、こんな異常事態なのに花村さんに動揺の色は見えないわ。
世田谷の街中から急に長閑なこんな場所に立っていたのだから、普通は慌てふためくと思うのだけど、多少慣れてる私でさえ状況を把握するまで、慌てていたのに……。
もしかすると、花村さんは相当鈍感な人なのか、もしくは現実離れし過ぎて夢か何かと思っているのかもしれないわ。
それよりも不味いわ。ここが異界だとすると、シャドウや悪魔がいつ現れるか分からない。
春と熊田さんと一刻も早く合流しないと。
ペルソナ使いの春は自力で対処できるけど、対抗手段が無い熊田さんは……。
春と熊田さんが一緒だったらまだいいのだけど。
「花村さん、とりあえず春と熊田さんを探さないと」
私は花村さんに少々強めに訴えかける。
花村さんに事情を説明しても、今置かれてる状況をきっと理解してもらえない。
そうかといって、何が起きるか分からない異界で花村さん一人をここに置いて行くわけには行かない。
何よりも時間が惜しいし、春と熊田さんを一緒に探すという一点だけは、わかって頂けると思う。
「へ？まあ、そうなんだけどさ……いっか。とりあえずは春ちゃんが心配だ」
花村さんは少々驚いた様な表情をした後、真剣な顔に。
花村さんはあっさり了承してくれたことに、多少拍子抜け感はあったのだけど、とりあえずは、春と熊田さんを探さないと。
周囲は見渡す限り田園風景が続いている。
それでも、私と花村さんはとりあえず田んぼのあぜ道を進もうとする。

しかし、２～３０歩ほど歩いたところで、突如として小さな鳥居が現れたのと同時に、その鳥居をくぐって一歩踏み込んでいた。
すると、当たりは一辺、目の前には先ほどまでの日差しが差す長閑な田園風景は無く、とある街並みの中に足をふみいれていた。
…別の場所に飛ばされた……みたいね。
私は周囲を見渡す。
瓦葺の木造長屋が連なり、無数の提灯の光が夜の街を淡く照らし、煌びやかな雰囲気を醸し出していた。
まるで江戸時代にタイムスリップしたかのような光景ね。
それも、時代劇でよく見る歓楽街……いいえ、色町と言った方がいいかしら。
ただ、街行く人々や、お店の中の人々は全て黒い影……
不味いわ。シャドウだわ。これだけの数、花村さんを守りながら突破するのは流石に厳しいわ。
でもまだ、私達の存在に気が付いていないか、敵とみなされていないわ。
そう思った矢先に、黒い人影は一斉にこちらを見る。
しまった。気が付かれた。
「うわっ！」
流石の花村さんもこの異様な光景に驚いたようね。
取り乱さないだけ助かるわ。
でも、何故だか花村さんは周囲を見渡すわけでもなく、シャドウ達と同じように私を見ていた。
「に、新島さん、その恰好?!」
花村さんは目を大きく見開いて呆けたように私を見て……恰好？
あっ、クイーンの姿に変身しているわ。
花村さんにどう説明すれば……
って、言ってる場合じゃないわ。
クイーンの姿に変身してると言う事は、シャドウに敵とみなされたと言う事。
シャドウが来る。

「花村さん、私の後ろに！」
私は花村さんに叫びながら戦闘態勢をとる。
シャドウたちは変化し、顔の無いガードマンの様な人型タイプや、顔の無い女郎の様な人型タイプ、こけしの様な姿や、提灯のお化けの様なタイプ等、今まで遭遇した事が無いようなタイプのシャドウに変身し、こちらに一斉に襲い掛かってくる。

「来て、ヨハンナ！」
私のペルソナ・ヨハンナを呼び出し、乗る。
花村さんはまだ、呆けたまま。
近づけさせてはダメだわ。
「ヨハンナ！広範囲攻撃よ！」
襲い掛かって来るシャドウ目掛け、核熱系スキル　マハフレイラを放つ。
前方のシャドウ達は十数体を核熱の爆発で一気に吹き飛ばす。
でも数が多すぎる！
上空地上問わず周囲３６０度からシャドウが次々と迫って来る。
不味いわ。ヨハンナの一点突破しか！
花村さんを乗せてっ……
私はそう思考を巡らせ、花村さんを確認しようと一瞬振り返る。
でも、居るはずの花村さんが居ない……
シャドウに捕まった!?
そう思った矢先……

「ペルソナ！ジライヤ!!吹き飛ばせっ!!」
頭上から花村さんの叫び声が聞こえ、突如として突風が吹き荒れ、この場所を中心とした
大きな竜巻が起こる。
「え!?」
迫りくるシャドウ達を竜巻が悉く吹き飛ばす。
こ、これは風系最上級スキル、マハガルダイン!?

頭上を見上げると、空中に白い忍者の様な人型の存在が……あの感じはペルソナ!?
そして、私の目の前へと、ビジネススーツ姿の花村さんが軽やかに地面に着地。
「ふぅ、久々に決まった」
竜巻は猛威を振るい。
１００体以上は居たシャドウを吹き飛ばして消滅させる。
「は、花村さん……ペルソナ使い」
私はそんな花村さんの後姿に声を掛ける。
間違いないわ。
花村さんはペルソナ使い。
しかも、これ程の威力のスキルを難なく行使出来る程の凄腕のペルソナ使い。
「という事は新島さんもペルソナ使いか。それにしてもその恰好とバイクのペルソナとかどこから突っ込んだらいいのか……」
花村さんは振り返り、私のヨハンナに跨って乗ってる姿を下から上へと見据え、一歩後ずさる。
「か、恰好は気にしないでください。私も好きでこの格好をしているわけじゃないので、誤解しないでください。ペルソナ能力を発現する際にはこの姿になってしまうんです」
私は早口で弁明じみた事をつい言ってしまう。
流石にこの姿を仲間以外に見られるのは、恥かしいわ。
この前は、かなみさんに散々この姿の事を言われたし。
「ま、まあなんていうか、ダークヒーローっぽくて、いいんじゃない？」
……これは明らかに慰めの言葉よね。
花村さんの表情を見る限り、ちょっと引いてる感じがするし。
それにしても、花村さんは鳴上さんと一緒で、そのままの姿でペルソナを扱えるのね。
羨ましいわ。
せめて、怪盗団の皆の恰好だったらまだましかしら……
でも、よく考えてみれば、杏の恰好はセクシー過ぎて流石に恥ずか

しいわ。
春の恰好もコスプレみたいだし、双葉の恰好が一番ましなのかもしれないけど、あのゴーグルは流石に……。
かなみさんみたいに、アイドルの恰好は恥ずかしい……。
私のこの格好の方がまだましなのかもしれないわね。
少しの沈黙の後、
「まさか花村さんがペルソナ使いだなんて……」
「どこかで聞いた名だと思った。そうか相棒の……」
二人同時に話しかけたのだけど……
また周囲にシャドウが何処からか現れ、集まりだす。
「げっ、やばっ、話は後で。とりあえずここを脱出しよう新島さん」
「花村さん、私の後ろに乗ってください。突破します」
「わかった」
花村さんがヨハンナの後ろに乗ったのと同時に、私はヨハンナをフルスロットルで一気に発進させる。
この江戸時代の色町の様な街並みの大通りを一気に駆け抜けようとするのだけど、シャドウが次々と襲い掛かって来る。
襲い来るシャドウに、花村さんの忍者の様なペルソナがスキルや手裏剣で撃退し、花村さん自らはヨハンナの後ろに乗りながらクナイを使い、シャドウを倒していく。
やはり花村さんは相当強い。
ここのシャドウ、前に映画に吸い込まれた時のシャドウとは比べ物にならないぐらい強い力を持ってる。
でも、それを難なく倒していく。
その強さは、怪盗団の皆に引けを取らない。

春と熊田さんを探しながら進むのだけど、街は迷宮化し、現在地もわからない状態。
シャドウも次から次へと襲い掛かって来る。
「春と熊田さんは……」
「大丈夫だ。クマが付いてる。彼奴ならこっちを見つけてくれる。こ

うも次から次へと…とりあえずこの場を離れた方が良い」
「わかりました」
私はそう返事をし、ヨハンナを駆け脱出路を探す。
……熊田さんもたぶんペルソナ使い。花村さんのその言い様だと、探査能力に特化したペルソナ使いなのかもしれない。
重火力に優れた春が付いているし、きっと大丈夫。
とりあえずはこの場を何とかしないと。
暫く街中を駆け巡り、入り組んだ街の路地を抜けると木造りの大きな門が遠目で見えてくる。
たぶん、ここを抜ければ……。
北町と書かれた城門の様な頑丈そうな大きな門にはひときわ大きな影…シャドウが立っていた。
そのシャドウは巨大なカメに変化する。
尻尾である場所には龍の頭があり、私達を威嚇する。
かなりの威圧感を感じるわ。
きっとこれは玄武を象ったシャドウね。
中国の四神に由来する北を守護する霊獣。
大方この大門の守護者というところね。
「テンプレな展開って感じだなこれ、門を通るにはあいつを倒さないといけないわけね。正面突破は苦手なんだけど仕方がないか……新島さん、そのまま一気に行こう」
「わかりました。私は正面突破が得意なので、フォローお願いします」
「任された。って、外見はお淑やかそうなのに、内面は里中系なの？肉が好きすぎるとか？」
「……とりあえず、行きます」
「んじゃ、行きますか」
花村さんの里中系とか肉が好きすぎるという言動は、よく意味は分からないのだけど、何故だか少し不快感を覚える。
私は玄武目掛けてヨハンナを加速させる。
花村さんは再びペルソナを召喚させ、私に補助スキルを付与してくれた。

相手の動きがいつもより良く見える。
これはスクカジャ（命中率・回避率アップ）だわ。
私はヨハンナを急加速させ一気にジャンプし、玄武の頭部へと突撃をする。
ヨハンナで玄武の頭部へ体当たりし、私はその反動で上空を舞い、玄武の頭上に落下速度を利用し、拳を突き刺す。
花村さんはその間に、ヨハンナから更に高く上空へとジャンプし、私に攻撃を仕掛けようとしていた玄武の龍の頭に、ペルソナを突撃させていた。
玄武は私と花村さんの攻撃で明らかに怯む。
効果有り、チャンスね。
私は玄武から飛びのき、畳みかけるように核熱スキル、フレイダインを玄武目掛けて叩き込む。
花村さんも、それに合わせて風系上位スキルを玄武に放ってくれる。
玄武は私のフレイダインと花村さんのガルダインにより、爆風吹き荒れる中、力尽き、黒い霧となり消え去った。
かなりの手応えの相手だったのだけど、意外とあっさり倒す事が出来たわ。
これは花村さんの的確なフォローのお陰だわ。
私の攻撃のタイミングに合わせて、攻撃を重ねたり、敵の攻撃を阻止してくれたりと……、今日会ったばかりなのに、怪盗団の皆と一緒に戦ってる時の様。
花村さん……かなりできる。ただ単に強いだけの人じゃないわ。
あの立ち回り、相当の経験を積んで来たはず。
花村さんは……一体どこで。
「新島さん、滅茶苦茶強いし、しかも拳をシャドウに叩き込むとかドンだけ？」
私が消滅するシャドウを見ながら考えにふけていた所に、花村さんに後ろから軽い感じで話しかけられる。
「いえ、花村さんの的確なフォローのお陰です」

私は花村さんに向き直る。
花村さんはあれだけの戦闘の後なのに息一つ切らしていない。
「いや～、戦い方が誰かさんによく似てたから、フォローしやすいっていうか、そんな感じ？」
きっと花村さんも私達と同じで、仲間と一緒にペルソナでシャドウと戦っていたんだわ。
そう言えば、鳴上さんはペルソナ使いの知り合いが２０人程居ると言ってたわ。
もしかすると、花村さんはそのうちの一人なのかもしれないわね。
「花村さんは、そのペルソナをどこで……」
「おわっ、またシャドウがこっちに来る！どんだけいるんだよ。さっさと門の外に出よう」
私が花村さんにペルソナについて聞こうとしたのだけど、シャドウの気配があちらこちらから感じる。
花村さんはそう言って勢いよく大門に体当たりし、大門を開けようとしたのだけど、門はビクともせず、逆に花村さんは跳ね返されて、思いっ切り後ろに転び、仰向けにひっくり返る。
「おわっ痛っ！あいててててっ、なんで開かないんだ？お約束通り門番っぽいのを倒したのに、なんで？」
「花村さん、流石にこの大きさの門は開かないと……横に出入口がちゃんとありますけど……」
高さ５～６ｍの門を一人で開けるのは厳しいと思うわ。
大概こういう城門などの門には人が出入りするための小さな扉があるものだけど……。
花村さんは間が抜けてる所があるのかしら？
「ああはははっ、普通ボスみたいなのを倒したら、門が勝手に開いたりって思うじゃん」
……そう言われると、認知世界ではそんな感じだったような。
私は地面にひっくり返る花村さんに手を伸ばし、助け起こす。
私は大門の横にある人が通れるだけの小さな扉に手を掛けると、

『助けて』
また、あの声が聞こえてくる。
前よりも随分とはっきりと……。
この声は何？
誰なの？
この声が聞こえてから、私達は小さなお社の液晶ディスプレイに吸い込まれ、ここに。
この声の主が私達をこの異界に連れて来たの？
私達に助けを求めるために？
私と花村さんは大門の小さな扉を開け、扉の向こうに入る。
最初は夜の暗がりで良く見えなかったのだけど……
私達の前方で真っ暗な夜空に眩い光が一気に灯される。
「げっ、まじかよ」
花村さんは灯された場所を見て、そんな声を上げる。
私達の前方には巨大な城が聳え建っていた。
巨大な木造の城なのだけど、あの小さなお社と同じく、ギラギラとした電飾や、派手なデコレーションが施されていた。
まるで、ラブホテルのように……
「悪趣味だわ……」
すると、ラブホテル様な巨大な城の中腹に、カッと、スポットライトのように光が灯され、そこに人影が浮かんでくる。
『予の街に狼藉を働く奴らとはお前らの事か？』
まるで時代劇によく見かける様な、いかにも悪代官という風体の恰幅のいい中年男性が現れ、私達を見下げ、横柄に物を言う。
「うはっ、またいかにもって奴が出て来た」
「……」
あの感じ……シャドウだわ。
そして、悪代官風の恰幅のいい中年男性の横に、煌びやかな着物姿の無表情の女性が静々と現れ、その悪代官風のいやらしい笑みを湛えながら、その女性を抱き寄せる。

『この街のすべてが予の物だ。そうよな春よ』
「え？春ちゃん？」
「……いいえ、あれは春じゃないわ」
あの感じあの雰囲気、春を模倣した影人間ね。
という事はここは認知世界という事？
もしそうだとしたら、この世界を形成させてる人は、あの悪代官風の中年男性ということになるわ。
誰だか知らないけど、春を模倣したと言う事は春の知り合い……もしかすると春の遺産を狙ってる人なのかもしれないわ。
「新島さん？春ちゃんそっくりなんだけど、……という事は春ちゃんのシャドウ？」
「……違います。あの中年男性が作り上げた春を模した操り人形」
「いまいちわからないけど、春ちゃんの偽物だってことでＯＫ？」
「そうです」
「という事は、あの悪代官っぽい人がこの世界のボスって事か……」
「多分、そうだと思います」
「あの悪代官を倒せば、万事解決って事ね」
「今は……」
花村さんは理解が早くて助かるわ。
たぶん、これに近い経験をされた事があるのだと……。
ただ、どんな経緯で認知世界のような異界化が起きたのかは知らないと、あの悪代官を倒しても解決しない可能性があるわ。
私達が戦って来きた認知世界では、相手の大切な物を盗むことによって、相手を改心させてきた。
でも、それがこの異界に通用するかは分からない。
認知世界にはあの神を名乗る聖杯の手引きによるアプリによって入る事が出来たのだけど……。もうその聖杯はない。
それにあの『助けて』という助けを求める声は、必ず何かに関係があるはず。
いずれにしても、情報が少なすぎるわ。
『貴様ら何をごちゃごちゃと……ん？その恰好、女の方はその手の男

共に需要がありそうだな、素材もなかなか良いではないか。たっぷり稼げそうだ。あの女は捕えろ！予の花街で死ぬまで働かせてやる。男の方は殺せ！』

悪代官風の中年男性がそう叫ぶと、次々と警備服を着たシャドウが現れ、私達を囲む。

「いかにもってなセリフをありがとうってところだけどよ、時代背景が滅茶苦茶だ。せめて時代にあわせて、侍とか岡っ引きとかにしろよな」

花村さんは冗談交じりにそう言いながら、油断なくクナイを構え、戦闘態勢をとる。

「流石に厳しいですね。一度体制を整えた方が……」

そう言っている間にもシャドウが次から次へと現れる。

不味いわ。多勢に無勢な上に完全に囲まれた。

『ふはははははっ!!この街は予の街だ。誰も歯向かう事は許さん！』

悪代官風の中年男性が満足そうに高笑いをする。

このタイミングで、城壁の上に人影が……

「お待ちなさい！そこの貴方！」

その人影は悪代官風の中年男性に指をさす。

『誰だ!!貴様!!』

悪代官風の中年男性がお約束の言葉を。

「美少女怪盗と申します！」

つばの大きな帽子に中世ヨーロッパ貴族の女性軽装衣装をまとった美少女怪盗を名乗るノワールはポージングをしっかりと決める。

その設定、今も通すのね。

でも、私は別の存在に目を奪われていた。

そのノワールの横に何故か変な着ぐるみがポージングを決めていた。

真と春とおかしな二人。【後編】

派手に電飾を施された戦国時代風の城の敷地で、私と花村さんは、悪代官風の中年男性と対峙し、多量のシャドウに囲まれる。
かなりピンチだわ。

でも……
「お待ちなさい！そこの貴方！」
城壁の上から人影が現れ、城の天守閣中層でふんぞり返る悪代官風の中年男性に指さす。
この声に、この口上は……。
「誰だ！貴様は!!」
悪代官風の中年男性は花村さん流で言うところのお約束の言葉を返す。
「美少女怪盗と申します！」
つばの大きな帽子に中世ヨーロッパ貴族の女性軽装衣装をまとった美少女怪盗を名乗るノワールはポージングを決めていた。
「ええ!?あれって春ちゃんだよな、妙にはっちゃけてるけど、コスプレに美少女で怪盗ってどういう事!?」
花村さんは困惑した表情で私に問いかける。
春…その設定、今も通すのね。
一応春はまだ19歳だからギリギリ少女を名乗れるのだけど、流石にそれは恥ずかしいわ。
春は普段はお淑やかに見えるけど、本当は結構自由奔放で、お嬢様育ちのちょっと常識ズレを起こして、こんな感じなのよね。
でも、春の突然の参上にも少々驚かされたのだけど、私は春の隣の存在に目を奪われていた。
「すべての女性のナイト！プリチークマモン参上クマ～！」
赤と青と白のトリコロールカラーの丸っぽい、とても変な着ぐるみが短めの手足を振り回し春に合わせながらポージングを決めてる。
何？あれは何なの？

表情はコロコロ変わるし、着ぐるみにしては動きが機敏過ぎるわ。
「は、花村さん…アレは何ですか？どう見ても着ぐるみに見えるんですけど……」
私の脳内のキャパシティーを大幅に超えるその存在に、しばらく茫然とするしかできなかった。
「あれは……説明はちょっと難しいんだけどクマだ」
花村さんは何故か遠い目をしながらそう説明してくれたのだけど……
「え？クマ？」
熊？動物の？とても熊に見えないわ……どちらかというと、タヌキか某ネコ型ロボットの方が近いかしら。
クマ？もしかして熊田さんという事かしら？
ええ!?
どういうことなの？
という事は、熊田さんも私や春の様に異世界に入って敵に認識されると、変身すると言う事かしら？
でもあれは斜め上に行きすぎよ。
私達のはちょっと過激なコスチュームに変身するだけだけど、あの存在はもはや熊田さんの原形をとどめていないわ。
身長も低いし、体格も全く別ものよ。
しかも、あのなんて言うのかしら、配色から姿恰好から全部が一言で言えば変。
『怪盗だと？まさか、貴様はあれを盗みに来たのか？ぐはははは！妙な格好をした女と、タヌキに何ができる』
少々茫然としていた私は、悪代官風の中年男性の大きな声でハッと正気を取り戻す。
悪代官風の中年男性は春達の格好を見て、いかにもそれらしい高笑いをしていたけど、怪盗と聞いて一瞬動揺していたのを見逃さない。
きっとなにか隠してる。
怪盗としての勘が私にそう訴えかける。
「ムキーッ！クマのこのクマ毛はどう見てもクマクマ!!このプリチー

さを分かっとらんとね！嘆かわしいクマ!!」
熊田さんと思わしき着ぐるみは短い手足を振り回して、タヌキ呼ばわれされて怒ってた。
熊田さん、ごめんなさい。
私もタヌキだと……
「私は美少女怪盗と申します。自治会長さん！貴方のお宝を盗みに来ました！」
ノワールこと春は、悪代官風の中年男性の言葉等聞いていないかのように、再び名乗りを上げる。
でも春、さらっと凄い事を口走ったわ。
あの悪代官風の中年男性の事を自治会長さんって……という事はあの小さなお社に、趣味悪い装飾を施した人よね。
この認知世界のような異世界を作り出した元凶という事？
しかも、春はこの自治会長のお宝を盗むと言っていたわ。
自治会長の歪んだ心の元凶を把握して、その核であるお宝が何なのかを調べて把握したと言う事かしら？
もうそこまで調べがついていたのね。凄いわ春。
という事は、この異世界は認知世界と同じで、そのお宝を実体化させて盗めば解決ということかしら。

『ぐぬぬぬぬ!!予は自治会長ではない！この世界の王だ！予の為の世界だ!!貴様らの様なふざけた輩にアレを渡しはせん!!者共!!あの不埒な輩をやってしまえ!!』
悪代官風の自治会長は怒りを露わにして警備員を模したシャドウ達に命令する。
春の偽物はサキュバスを模したシャドウに変化し、私達を囲む警備員に模したシャドウは次々と本性を現し化け物となって私達に襲い掛かる。
ノワールの春と着ぐるみの熊田さんは、城壁の上から私達の所に飛び降り合流。
「クマ！お前クマモンって、流行りに乗り過ぎなんだよ！あっちは一

目で熊とわかるが、さっきの悪代官みたいにタヌキに間違えられるのが落ちだからな!?」
「陽介！酷いクマ！ゆるキャラ歴はクマの方が長いクマ、ジュネス公認で全国区にまで知れ渡ってるクマ！」
「全国に広まってねえし、誰も公認してねえっつうの！」
　この着ぐるみ、本当に熊田さんみたいね。
　そんな着ぐるみの熊田さんと花村さんは軽口を叩きながらも、戦闘態勢を整える。
「マコちゃんじゃなかったクイーン、良かった無事で」
「ノワールも無事のようね」
「やっぱりここは認知世界なのかしら？」
「似てるけど、違うかもしれない。異世界である事は確かだと思うのだけど」
　春も私の後ろに立ち、攻撃の準備をしながら話かける。
「春ちゃんもペルソナ使いでコスプレ美少女って、しかも実はけっこう天然入ってる？」
「コスプレではないです。美少女怪盗です」
　花村さんが言う通り、美少女怪盗と言い切れる春は相当天然が入ってると思うわ。
「わぉ！真ちゃんのその恰好は知ってるクマ！陽介が持ってるビデオにでてくる女王様見たいクマ！なんだかいけない世界に行っちゃいそうクマ～」
「好き好んでこの格好ではないので……」
「おい、クマ！何、人のコレクション勝手に見てるんだよ！って……わわっ！こんな所で暴露すんなよなクマ！後で覚えてろよ！」
　熊田さんは私の姿を見て何故か着ぐるみの顔をほんのり赤らめ、花村さんは涙目でそんな熊田さんに怒鳴る。
　女王様って、ＳＭの人の事よね。かなみさんに散々言われたけど、やっぱりこの格好そう見えるのかな。
「それは置いといて、まあ、そんじゃ行きますか、ジライヤ！」

「クマもやる気満々ね！」
「はい、惑わせミラディ！」
「え、ええ、駆け抜けろ！ヨハンナ！」
花村さんの掛け声をきっかけに、襲い掛かって来るシャドウに一斉反撃を開始。
先ずは、春のペルソナ　ミラディのスカートの中に隠していた重機関銃が火を噴く。
襲い掛かるシャドウをその重火力で一斉掃射。
春のペルソナミラディは西洋中世の舞踏会に参加する貴婦人のドレスを纏った様なペルソナ。
ミラディの豪華絢爛なスカートの中には重機関銃が何丁も仕込んであり、後方からの重火力の銃撃によるこんな一斉掃射が得意。
私と春が連携をとる場合は至ってシンプル。
私が前衛で近接攻撃を繰り出し、春が後衛からの重火力攻撃。
このパターンは怪盗団の中でも攻撃に特化した連携ね。
先程と同じように花村さんが私達にスクカジャ系（命中率・回避率アップ）のスキルを掛けてくださったようね。相手の動きが良く見えわ。
それと同時に力も漲って来るのを感じる。
これはタルカジャ系（攻撃力アップ）のスキル。
熊田さんのスキルなのかもしれないわ。
花村さんはクナイとペルソナで、空中から襲い来るシャドウを撃退。
変な着ぐるみ姿の熊田さんは……何処から出したのか分からないけど、ジュース缶やらプラモデルやら、ドラム缶やらをシャドウに投げつけている。
しかも、それらに触れたシャドウはダメージを受けてるみたい。
どういう原理なのかしら？
いえ、そもそも認知世界なのだから原理とかは関係ないのかもしれないのだけど……。
「ペルクマ！キントキドウジ、でんしゃい！」

熊田さんがそう叫ぶと、真ん丸胴体にマントをたなびかせ極端に手足が短いペルソナが顕現される。
姿も熊田さんの着ぐるみ姿同様、そのペルソナの姿も変わってるのだけど、異様なのは掲げた手に持っている体より大きなミサイル。
それに変な格好だけど熊田さんもかなりのペルソナ使いだわ。
熊田さんと花村さんの連携もスムーズね。
私も春との連携で次々とシャドウを撃退していく。
周囲シャドウはあらかた撃退できたのだけど、城の天守閣の門からシャドウが次から次と現れこちらに向かってくる。
まだ、あんなにシャドウが……
「クマ、やっちまえ！」
「クマ、いっきまーす！クマ～！」
そのタイミングで花村さんの掛け声と共に熊田さんのペルソナは、城の天守閣から次から次に現れるシャドウの元へ飛んで行き、その手に持つ大きなミサイルを投げつけるというよりも、コンと叩きつける。
大きな爆発が起こり、周囲に爆風をまき散らす。
濛々と立ち込める砂埃が晴れると、地面に大穴が空き辺りのシャドウが一掃されていた。
「凄い……」
まるでメギドラオン……凄い威力だわ。
「クマさん可愛いだけでなくて強いんですね」
熊田さんの着ぐるみ姿が可愛いと言い切る春の感性は別にして、春も熊田さんの強さを実感してるようね。
「そんなに褒められるとくすぐったいクマ、はっ！これはモテ期到来クマ!?ナンパしていいクマ～？」
「それはお断りします」
「わ、私もお断りします」
熊田さんの突然のナンパにも春は動じることなく笑顔できっぱり断り、私もそんな春に習い断る。
「シクシク、しどいクマ～」

「クマ、お前、時と場合を選べよな」
そんな熊田さんに呆れる花村さん
「ぐぬぬぬぬぬっ！よくも貴様ら!!あれは渡さんぞ!!!!」
趣味の悪い城の中腹から様子を伺っていた悪代官風の自治会長は悪態をつきながら、天守閣の中へ姿を消すと同時に、天守閣の門が閉まろうとする。
「って、彼奴逃げるぞ！」
「自治会長さん、お待ちなさい！」
「あっ、門も閉まるわ」
「急ぐクマ～」
私達は急いで、閉まる門を駆け抜け天守閣の中へ入り、熊田さんの誘導に従ってとある一室に飛び込む。

「ふう、間に合った。……なんか城の中、見た目より広くないか？」
「ムムム、迷宮化してるクマね。」
「シャドウの反応は？」
「そこら中シャドウだらけクマ、ここも危ないクマ」
「はぁ、休憩も出来ないのかよ。」
花村さんは熊田さんの返事に、うんざりした表情をしていた。
「ノワールも熊田さんと一緒にこの異世界に？」
「最初は一人だったのだけど、可愛らしい恰好のクマさんが私を見つけてくれて、マコちゃんや花村さんの反応がこっちにあるからって、一緒にここまで。熊田さんもペルソナ使えるからびっくりしたわ。それに花村さんもペルソナ使いだなんて」
やっぱり。
熊田さんのペルソナは探査も出来る。
しかもあれ程の戦闘力まで持ってる。
探査と戦闘が両方可能なペルソナのようね。
かなみさんのペルソナの強力版といったところかしら。
「そういえばノワール、さっき悪代官の人を自治会長さんって、しかも

お宝を盗むとか言ってたわね。もう、その自治会長さんのお宝を見つけたの？という事は、認知世界みたいにお宝を盗んで改心できるということかしら？」
「え？お宝は見つけてないわ。さっきの人は自治会長さんだったから、認知世界と同じみたいに宝を持っているのかなって、それでいつもの感じで言っただけよ」
　なるほど、さっきの春の口上は認知世界と同じ感覚で口走ったと、特に真相が分かってるわけでは無いという事ね。
「新島さんと春ちゃん。ちょっといい？さっき春ちゃんが悪代官みたいな奴の事を自治会長って言ってたけど、あのお社に怪しげな電飾を施した人って事でいいんだよな」
　花村さんは私達の話に入り、私達に質問をする。
「はい、本人ではないとは思います」
　春がその質問に答える。
　認知世界と同じであれば本人そのものでは無くて、本人の深層意識の集合体。
「春ちゃんどういう事？…新島さんとさっき見た春ちゃんの偽物と同じって事？」
「いえ、どう説明したらいいのか、その仮に認知世界と同じと仮定すれば、本人の心の偶像が認知世界に反映されて、欲望がそのまま形となって……」
　私が花村さんに認知世界について説明しようとした矢先に、またシャドウが襲って来る。
「って、シャドウがまた来たっ！落ち着いて話ができないっつうの！さっき聞いたけど、とりあえずあの悪代官を何とかすればいいって事でいいんだよな」
「確証はないですが、今はそれしか。……ヨハンナ！」
　私は曖昧な返事に留め、戦闘に入る。
　認知世界に似ているけど、違うかもしれない。
　認知世界と同じだったら、悪代官の自治会長さんを会心させるために、お宝を盗まないと解決しない。でも、似ているだけで全く別物

だったなら、鳴上さんと一番最初に解決した神社の時のように、奉られた神様が暴走し異世界を形成しているのだとしたら、その神様が抱えてる問題を解決しないといけない。あの電飾が施されたお社を通じてここに来たのなら、その可能性も高いわ。そうだとしても、今の状況だとこの世界がどういうふうに形成され、何なのかもわからない。一度この異世界から出た方が良いのだけど、脱出方法もわからないわ。あの悪代官の自治会長さんが何らかに関わってるのは確かだから、今は追わないと。

『助けて！』

また、あの少女の声が聞こえてくる。

しかも、その少女に近づきつつあるのか、その声が次第に大きくなってきてる。

「クマの怪しげセンサーも、恥かしんぼ悪代官からこの世界の歪みを感じるクマ。近くに美少女を探知したクマ！きっと恥かしんぼ悪代官に捕まってるクマ～！今、助けに行くクマよ～」

熊田さんもどうやらあの少女の助けを求める声が聞こえてるみたい。

熊田さんは叫びながら突撃し、シャドウを蹴散らしながら上階へと昇って行く。

「クマ！待てって！はぁ、そうするしかないんだけどな！ジライヤ！吹き飛ばせ！新島さん、春ちゃん今だ！クマの後に続け！」

花村さんはペルソナを軽快に操り、襲い来る周囲のシャドウを吹き飛ばし、私達に進む道を作ってくれる。

私達はシャドウ達を倒しつつ、城の天守閣最上階まで到着する。

『き、貴様ら!!!盗賊風情の分際で、わしの宝はやらん!!!』

多数のシャドウを従える悪代官の自治会長さんが鬼の形相で、私達を睨んでいた。

その自治会長さんの上には鳥かごの様な牢屋が天井から吊り下げられ、巫女装束姿の少女が捕まっていた。

『助けて』

やっぱりあの声はこの子の様ね。自治会長さんのお宝はこの子みたいね。何でこの子が？
でも、この子の頭には白い少々尖った耳が、それにフサフサの白い尻尾まで……。コスプレ？しかもキツネ風かしら？
とりあえずは、認知世界と同じだとしたら、この子を奪ってしまえば、解決なのかもしれない。
……あの頑丈そうな牢屋をどうやって？
「胸糞悪いっつうの。いい大人が女の子をこんな所に閉じ込めやがって」
「今、助けるクマよ～」
「自治会長さん、この美少女怪盗が悪事を見届けました。大人しく彼女を開放してください」
花村さんや熊田さん、春までやる気満々ね。
このシャドウを蹴散らして、あの子の元に行けば何とかなるかもしれない。
『こ奴は予が世界を収めるための、金の卵！誰にも渡しはせん!!渡しはせんぞぉぉぉ!!うううう……うぐっ、ごはっ!?』
悪代官の自治会長さんはそう叫んだあと、急に苦しみだす。
「クマ、お前なんかやった？」
「何もしてないクマよ。恥ずかしんぼ悪代官はきっと、自分の姿に恥ずかしくなったクマ」
花村さんは突然自治会長さんが苦しみだす姿に疑問顔で熊田さんに聞き、熊田さんは何故かそう結論づける。熊田さんのその恰好も結構も厳しいわ。でも、そう言われると私の恰好も現実世界ではかなり恥ずかしいわ。
「腹痛ですか？悪事を働いた罰です。罪を認め、彼女を開放し悔い改めなさい」
この格好のノワールは何時もノリノリね。
でも、この苦しみよう異様だわ。
まさか、ペルソナを覚醒させるとかはないわよね。
そもそも、本人そのものではなさそうだから、それは無いわね。

遂に自治会長さんは苦し気に蹲る。
それと同時に、体から黒いドロドロとした大量の液体が一気に噴き出し、津波のように周りのシャドウを飲み込み、私達にまで押し寄せてくる。
何、あれは？見ているだけで悍ましい感覚が……
「えっ？」
「きゃっ!?
「げっ、なんなんだ!?」
「クマーーー!?あれは絶対いけない何かクマっ！に……逃げるクマよ!!」
熊田さんはそう言って、何処から出したのか、三段重なった赤いブラウン管テレビを私たちの前に置く。
「みんな、早くテレビに入るクマ!!」
「クマっ！お前っ！脱出できたのかよ!?」
「テレビ？しかも昔の？」
「え？どういう事ですか？」
「いいからいいから！早く入るクマ！」
熊田さんはそう言って私達を後ろから押し、ブラウン管テレビの画面に押し込む。
私達は吸い込まれるようにテレビの中に落ち込み、激しい眩暈が襲い……次の瞬間……。
どこかに落ちた様に地面に尻もちをつく。
「痛っ……ここは？」
あの異界独特の空気感はなく、じめっと蒸し暑い東京の夏の空気感。
目の前にはあの電飾の施された小さなお社が……現実世界に戻ってきたの？
「新島さん？それに陽介とクマ？」
私はその声に顔を上げると、鳴上さんが驚いた顔で私達を見下ろしていた。

真と春とおかしな二人。【終幕】

鳴上さんが何故あのタイミングでお社に現れたのか？
それは偶然では無く必然だった。
花村さんと熊田さんがこの喫茶店での待ち合わせをしていた人が鳴上さんだったの。
鳴上さんは、花村さんと熊田さんが約束の時間にも喫茶店に現れず、スマホも通じないため、暇を持て余し何気なしに喫茶店の周りを歩いていたら、このお社が目につき、興味本位に調べ始めたところに私達が突然お社から現れたと……。
その後、春の喫茶店の2階の個室を借りて、休憩を兼ねて今の出来事の話し合いの場を設けた。
6人掛けの席には鳴上さんと花村さん、熊田さんが横並びに、対面には春と私が座り、まずは春に鳴上さんを紹介した。
「春、こちらが大学で私が参加してるゼミの鳴上准教授よ」
「鳴上悠です。東都大学考古学部民俗伝承学科で研究と講師をさせてもらってます。陽介とクマとは高校時代からの友人です」
「マコちゃんからは色々お話を伺ってます。奥村春です。マコちゃんとは高校の同級生で、今は大学に通いながらここでアルバイトをしてます」
花村さんと熊田さんがペルソナを使えると知った時には、鳴上さんとは知り合いでは無いかとは思っていたのだけど、高校からの友人とは……。
もしかすると、私たちのような経験を鳴上さんや花村さん達も高校時代に……。
その流れで花村さんと熊田さんも改めて自己紹介をして下さる。
「俺もちゃんと自己紹介しておくか、花村陽介22歳、ジュネスの社員ってのは春ちゃんには話したことあったっけか、悠とはマブダチだ。まさか、春ちゃんの友達の新島ちゃんが悠の生徒だってのにも驚きだってのに、二人共ペルソナ使いとか、どんな偶然だっつうんだ？」
「熊田くまクマ。クマも先生とはマブダチクマ。陽介と同じジュネス

の社員で、宴会部長クマ！」
「え？クマさんは部長さんなんですか？こんなにお若いのに」
「クマっ！何勝手に役職作ってんだ！春ちゃん、そんな部署なんてないから、こいつの冗談だから」
先生って、鳴上さんのことかしら？熊田さんは同級生じゃないのかしら？確かに熊田さんは若く見えるし後輩なのかしら？でも鳴上さんと同じ歳の花村さんは呼び捨てだし、謎だわ。
それと春、驚くところはそこなの？お二人がペルソナ使いだという事の方が驚きだと思うのだけど、春の天然にも困った物ね。
でも、そう言う春も１９歳にしてこの喫茶店三店舗のオーナーで、しかも奥村グループの大株主で大資産家なのよね。
そっちの方が驚くと思うのだけど。
「改めまして、新島真です。東都大学法学部二年生です」
私も皆に倣って改めて自己紹介をする。

皆の自己紹介を終え、まずは鳴上さんが春に声をかける。
「話から推測すると、奥村さんもペルソナ使いという事でいい？」
「はい」
「私たちの仲間の一人です」
「新島ちゃんの名前、どこかで聞いた名前だと思ってたんだよな。それにしても悠、新島ちゃんってお淑やかそうなのに、滅茶苦茶強かったぞ」
「真ちゃんはビューティー&パワフル女王様で、春ちゃんはプリチーな美少女怪盗クマっ！」
花村さんの口ぶりだと、鳴上さんは私の事を花村さんには話していたようね。
それと熊田さん、女王様呼ばわりはやめてほしい、その、結構傷つくわ。
でも、春の美少女怪盗よりはマシなのかもしれないけど……。
「そういえば、二人共あの格好は？新島ちゃんは何ていうか、ペルソナはバイクだし、あんな勇ましい格好だし、春ちゃんは春ちゃんで美少

女怪盗って自分で名乗ってはっちゃけてたし」
花村さんは少々引きつった笑顔で私と春に質問をする。
「異世界では何故かあの格好になってしまうので……その、あまり指摘して頂けないと助かります」
「え？マコちゃんは気に入らないの？」
「真ちゃんも春ちゃんも、いい感じクマよ！」
春は恥ずかしくないのかしら？流石に二十歳になってあの格好は流石に恥ずかしいわ。
ほら、花村さんも引き気味よ。熊田さんは喜んでるようだけど。
花村さんは何か考え込んでから、次に私達にこんな質問をする。
「春ちゃん美少女怪盗、怪盗って、もしかして春ちゃん達って、心の怪盗団だったりして？」
「え？何故それを？」
そんな声が春から漏れる。
「げっ？まじで？結構適当に言ったんだけどな。３年前のあの獅童の事件はド派手だったし。その春ちゃんのはっちゃけようは納得というかなんていうか」
「心の怪盗団。やはりそうか……、直斗がペルソナ使いの可能性が高いと言っていたが、新島さん達がそうだったのか」
花村さんは驚き共に苦笑気味に、鳴上さんは納得したように頷く。
鳴上さんには私が心の怪盗団だったという事をまだ話していなかった。皆で一緒に鳴上さんと会った時に話そうと思っていたから。
でも鳴上さんは、うすうす気が付いていたみたい。
「すみません。隠すつもりはなかったんです。鳴上さんには私達の仲間と会っていただきたくて、その時にお伝えしようとは思っていたので、その、すみません」
「いいや、謝らなくてもいい」
「そうか春ちゃんと新島ちゃんは心の怪盗団かー、確か悠がオーストラリアに留学中だったよな、あの事件。そういえばさっきの異世界で、新島ちゃんは春ちゃんの事ノワールって呼んでたし、春ちゃんは新島ちゃんの事をクイーンって呼んでたのって、怪盗のコードネーム

か何か？新島ちゃんが女王（クイーン）様ってあながち間違いじゃなかったって事か？」
「やっぱし、真ちゃんは女王様クマ！クイーンって呼んでいいクマか？」
し、しまったわ。
つい、あの怪盗の姿の時の春と話していたから、コードネームで呼び合ってたわ。
「そ、その忘れてください」
思わず両手で顔を隠す。
赤面していることが自分でも分かるぐらい顔が熱い。
……恥かしい。
私は赤面しながらも何故か、指の間から鳴上さんの様子を伺っていた。
そんな私に鳴上さんはこの一言
「ハイカラだな」
「あの、も、もうやめて下さい」
鳴上さんに知られたのが一番恥かしいわ。
「ほ～、春ちゃんは～、悪を懲らしめる美少女怪盗って設定クマね～、っということは真ちゃんは～、国を追われ王女様が復讐のために怪盗になった世紀末ブラックＳＭ女王様って設定クマね～」
「ち、違います！」
「え？マコちゃん違うの？」
この格好ってやっぱり、世紀末なんたらや、…そのＳＭ女王様にみえるのかしら？
それより春、なんであなたまで熊田さんの意見に同調しているのかしら？私たちは一度じっくり話し合ったほうがよさそうね。
「クマ！いちいち話の腰を折るなっつうの！」
赤面する私をよそに、鳴上さんは話しを進める。
「それより陽介、何があった？」
「ああ、それな……」
花村さんが今迄の経緯を鳴上さんに説明を始める。

途中で熊田さんがマイペースに話の腰をちょくちょく折ったり、花村さんとの相変わらずの掛け合いに発展し、そのたびに私と春が代わりに説明を続けたりと。

説明は、ここ最近この近辺での人々の様子がおかしい事から、それがこの小さな神社に自治会長がいかがわしい電飾を施してからという事、この神社の様子を見に来ると少女の声が聞こえ、電飾の液晶ディスプレイに吸い込まれ、異界に落ちた事、そこではシャドウが闊歩し、自治会長のシャドウがその世界を支配していた事、キツネ耳の少女が捕まってたり、自治会長を追い詰めたのだけど、黒いドロドロとした液体が溢れ出て飲み込まれそうになり、熊田さんのお陰で現世に脱出出来た事まで事細かく……。

「成る程、この近辺の人々の異変は新島さんの推測通り、あの小さなお社へ電飾を施した事が引き金となった可能性が高いだろう。おそらくお社本来の役割である封印や霊脈の維持などの霊的機能が損なわれて暴走し、その影響によって、あの近辺に訪れた人の感情の一部が著しく増減したことが原因で精神暴走に近い状態となったと考えたほうが無難だ」

鳴上さんは私達の説明を一通り聞いた後に、一呼吸置いて、こう考えをまとめられる。

この状況で不謹慎なのだけど、私は鳴上さんの話を聞きながら喜びの感情が沸き上がっていた。

これは鳴上さんに認められたという自己満足。

私はこの感情を表情に出さないようにぐっと我慢する。

「じゃあ悠、あの異世界は何だったんだ?シャドウも居たし」

花村さんの質問は、皆が聞きたかった事だと思う。

「異世界であることは間違いないが、その異世界がどういうものかは詳しく調べないと何とも言えない。お社や神社、遺跡などが関わり異世界が形成されるパターンは結構ある」

「結構あるのかよ!さらっと言うなよな。はぁ、前々から聞いちゃいたが、悠、お前結構ハードな生活してるよな」

「そうか?確かに異世界や異空間の形成は大なり小なりそこそこある

が、ペルソナを使う事態に陥ることは少ない」
　鳴上さんはそういうのだけど、鳴上さんと知り合ってから異世界に関わったのはこれで3回目だわ。しかも3回ともペルソナを使う事態に。
　1回目と2回目は確かに大したことはなかったのだけど、今回の異世界のシャドウはかなり力を持っていたわ。
「あの、いいですか？」
　春は私とアイコンタクトをとってから手を挙げる。
　何か話したいことがあるみたいね。
「どうぞ、奥村さん」
　春は鳴上さんの同意を得て話始める。
「自治会長さんの変わりようと異世界のつくりというか雰囲気が、私たちが怪盗団で経験した認知世界のパレスに似ていたんです」
　春の意見は私も強く感じていたこと。
　あの江戸時代の色街の街並みに何かを守るかのような強固なお城、それに殿様の恰好をした自治会長さん。
　私たちが経験したパレスのように、あの世界のつくりが自治会長さんの心を表しているかのよう。
　それに自治会長さんがお宝を守るような発言もしたことも気になる。
「そういえば新島ちゃんも似たような経験をしたようなことを言ってたっけ、春ちゃんの偽物も見破ってたし、それってどういう場所なんだ？」
　シャドウに襲われ続けていたから、花村さんにちゃんと話せてなかったわ。
　その花村さんの質問に私が答える。
「認知世界、それは心の世界、人々の認知によって作られた世界。でも、強く歪んだ感情を持った人間はパレスという自身の欲望を表した認知世界を形成してしまうんです。ですがそれらは神を名乗る存在が人々の願いを叶えるためと称して人類の心を束縛し管理するために作られた世界だった。そして、その認知世界は人々の思いを糧に現

実世界にも侵食を始めたのですが、私たちは仲間と共に何とか阻止することはできました」
「うわっ、新島ちゃん達もかなりハードだな」
「なんかよくわからんクマが、春ちゃんと真ちゃんは頑張ったクマね」
「パレスの主である人間の欲望によって歪められた認知世界は徐々に現実世界にも影響を及ぼします。そのパレスの主の本性や秘めた思いが結晶化された物を私たち怪盗団はオタカラと呼び、それを認知世界で盗むことによって、パレスの主を改心させてきました」
「なるほど、獅童議員の突然の告白や、オクムラフーズ社長の謝罪は君たちの改心によるものか……」
　鳴上さんはこの時期、海外留学されていたと聞いていたけど、このあたりの大きなニュースは知っていらしたようね。
「確かにあれはインパクトデカすぎだったな。オクムラフーズってビッグバンバーガーのだよな。ん？オクムラフーズのオクムラって、まさか春ちゃんと関係があるの？」
「……オクムラフーズ社長の奥村邦和は私の父です」
　花村さんの何気ない質問に春は一瞬言葉に詰まるが、しっかりと答える。
　そう、あの事件で春は、悪行を行ってきた唯一の肉親である父親とパレスで向き合い、改心させた。
　でも、その直後、春のお父さんは亡くなった。
　私たちが改心を行った直ぐ後に、認知世界で人殺しを行っていた明智吾郎の手によって……。
「あ、そのごめん。春ちゃん」
　花村さんはそんな春に、慌てて頭を下げる。
　オクムラフーズ社長が既に亡くなっていることは世間でも知られている。
　テレビでの謝罪中継の真っ最中に倒れたのだから、当然花村さん達も。
「大丈夫です。今は心の整理がつきましたので、祖父や父が遺したこの喫茶店が残ってますし、それに、まこちゃんや怪盗団のみんなもい

ますから」
　そんな花村さんに春は笑顔で答える。
「およよよよ。春ちゃんは、春ちゃんは強いクマね」
「……だな」
　春のその話に熊田さんは涙を飛ばし、花村さんと鳴上さんは熊田さんのその言葉にうなずく。
　春の心は強い。
　あの時、唯一の肉親を亡くしたというのに、直ぐに立ち直り前へと進んだ春。
　私もお姉ちゃんとパレスで対峙したのだけど、もしお姉ちゃんが亡くなってしまったら、私は春のように前へと進むことが出来たのだろうか？
「ごめんなさい。なんか変な空気になっちゃって、ま、マコちゃん」
　春は、自分の事でしんみりした空気感になってしまったことに、私へと助けを求めてきた。
　私は強引に話に戻すために、話を続ける。
「先ほど体験した異世界がそのパレスに似ていたんです。怪盗団での経験に当てはめると、パレスの主が自治会長さんで、自治会長さんの心によって形成された認知世界が、江戸時代の夜の街並みに電飾を施したお城だと……」
「神を名乗る存在により形成された認知世界、確かに話を聞く限り、今回の状況と似ている点が多い。ただ、異世界の形成の仕方としては似たようなケースは結構ある」
　鳴上さんは大きくうなずく。
「はい、実際パレスと様子が異なる点もあって、自治会長に捕まっていたキツネ耳の少女が、現実世界で私と熊田さんに助けを求めて来て……その声を聞いて、社のディスプレイに熊田さんが触れて異世界に……」
　私もパレスとはなんとなく様子が違うようにも思う。
　異世界に落とされる前から聞こえて来たキツネ耳の少女の助けを求める声もそう。

「そうクマ！モフ耳キツネ美少女が助けてってずっと言ってたクマよ！」
「話からすると、そのキツネ耳の娘はおそらくこの小さなお社の主、姿恰好からすると稲荷の化身だ。歯止めが効かない神社の暴走を止めたい一心で助けを求めていたのだろう。その声が感受性の高いクマや最近も異世界に関わった新島さんに届いたといったところか。さっきネットでこの神社の事を調べると今は安産祈願や恋愛成就等の神様として奉られているとあるが、おそらく元々ここは豊穣を司る稲荷神社だったと考えられる。時代と共に人々の習慣や信仰が変化し、今の形になったのだろう」
私は鳴上さんの返答に納得する。
豊穣を司る稲荷神社、異世界に飛ばされた時にはのどかな田園風景だった。
稲荷神社だった昔のこの辺りの風景だったのかもしれない。
あの声の、キツネ耳の少女がこのお社の主だった。
神社を建立した当初とは時代の流れや人々の営みによって信仰の対象が変る事が多々ある。
時代時代に流行る神様も異なったり、人々の願いが変化したりするものだから。
それでも、豊穣を司る稲荷の化身として、この地を見守ってきた。
でも、お社をあんな風にしてしまったため、暴走したのかもしれないわ。
今度は花村さんが鳴上さんに質問をする。
「なーるほど、そういうのがあるってことか、そんじゃ、あの自治会長から溢れ出てきた黒いドロドロの液体は、何だったんだ？」
「これも話から得た情報からの推測でしかないが、稲荷神社は霊脈の流れを正常にする役目も果たしていたと考えられる。あの派手な電飾によって神社の霊脈の流れをコントロールする機能が阻害されたか、若しくは暴走を促していたのだろう。そして人々の何らかの負の感情を吸収しだした。人々の負の感情のエネルギーは自治会長の精神を介して世界を形成したと考えるのが妥当だ。人々の負の感情の

エネルギーは厄災の元となる類のものだ」
「うーん。先生！恥かしんぼ悪代官がキツネ耳美少女にナンパに失敗して振られたクマか？」
「クマ……いいから少し黙ってろって」
「おそらく、自治会長の精神が負のエネルギーを抑えきれなくなり、自治会長自身を飲み込み本格的に厄災と化したと考えられる」
「ということは、早く何とかしないと大変なことになりかねないですね」
厄災化となると、現実的な問題に発展する可能性が高いわ。
ただでさえ、付近の人々の恋愛感情が暴走気味なのに、これ以上は野放しにするのは危険だわ。
鳴上さんはうなずきながら、こう言ってくれた。
「早々に何とかしよう」
私の予想通り、鳴上さんはこの件の解決に乗り出してくれるようね。
「まあ、お前だったらそう言うだろうな」
「さすが先生クマ！」
「そんじゃ、さっそくあの異世界に乗り込んで、今度こそ、あの狐の子を助けに行くか、相棒が一緒なら、余裕っしょ」
「クマも頑張るクマ！あのプリティーガール、クマの事をきっと待ってるクマ！」
花村さんと熊田さんは解決のために今から異世界に戻る気満々のよう。
「いや、やめておいた方がいい。陽介たちの話から異世界の状況はかなり悪化しているだろう。既に現実世界にも影響を及ぼしはじめ厄災化している状況だ。慎重に行った方がいい。しかもさっき話したことは推測でしかない。正確に原因を突き止めるためにも先にお社やその周囲の事象を詳細に調べる必要がある」
鳴上さんはまず現実世界での調査が必要だと、確かに心の怪盗団の時も現実世界での調査が必要だった。
「なるほどな。そんじゃ、手分けして聞き込みか、なんだか懐かしくな

いか？」
「それも必要だが、一番厄介なのはこの件に介入する方法だ。まずはお社を管理している自治体の許可が必要となるが……」
調査にも正式な手続きが必要となる。
法学部で法律を学んでいる身としては、それを破るわけにはいかない。
このような小規模な神社やお社は自治体等が管理していたり、個人で管理しているケースもある。本来勝手に調べることはできないわ。
「自治会の方は私の方で任せてください。元々自治会長さんの暴走でこんなことに、なんとかします」
春は覚悟したかのように、神妙に返事をしていた。
たぶん自治会長さんの暴走を止められなかったことに責任を感じているみたい。
春のせいじゃないのに……。

こうして、東都大学考古学部が歴史的遺物研究と称し介入し、民族伝承学科鳴上准教授主導で、解決に向けて動き出す。
高畑教授はもちろん、ゼミ生の私も積極的に参加し活動することに。
春も現地協力者として、自治会との交渉や周囲住民との折衝などで動いてくれて、花村さんと熊田さんにも仕事の合間に手伝っていただけた。
調査の結果、鳴上さんの推測通り、直接的原因はお社を無茶苦茶に改装したことによって、お社の機能が正常に働かなくなり、霊脈が乱れ、負の念や気が集まり厄災化したものだった。
さらに、あの改装を私的な欲望で行った自治会長さんの負の思念が混じりあんな異世界が顕現したとのこと。
まずは、お社のいかがわしい電飾などを取り外し、元に戻すことから始め、さらに失われた稲荷神社としての役割を復活させるために、正しい装飾と神事を再建。
電飾の取り外しなどに関して、自治会長さんへ交渉に向かったのだ

けど、自治会長さんは原因不明の昏睡状態に陥り、入院していた。
鳴上さんが言うには、あの異世界で自治会長さんを飲み込んだドロドロの呪いが原因だろうと。
そこで、高畑教授が寺の住職及び霊能者のという立場をフルに活用して、自治会長さんが病床に倒れたのは、お社にあのような電飾を施した事が原因だと家族の方を説き伏せ、電飾などの改装を元に戻させた。
それどころか、綺麗に再建までさせた。
正しいことをしているのだけど、高畑教授が作り笑顔で説き伏せる姿は、なぜか如何わしい霊媒師などの霊感商法の類に見えてしまったことは内緒。
また、自治会や地域住民の方々に対しお社の維持管理と復活させる神事の説明や研修を行ったりもした。
そして、目に見えて地域の雰囲気が徐々に元に戻っていく。
それどころか、前よりも活気づいて見えるわ。
お社からキツネ耳の少女の助けを求める声も聞こえなくなり、異世界の気配も感じられなくなった。
そう、解決に至ったのだ。
わずか二週間でのスピード解決。
この二週間、春とはほとんど毎日顔を合わせ、高畑教授や鳴上さん、夕方には仕事終わりの花村さんや熊田さんとも何度もミーティングを重ねた。
活動してきた日々は、まるで心の怪盗団の皆で過ごしてきた時感じた充実感に似ていた。
いえ、あの時は不安や怒りなどの感情が渦巻き、何においても手探りで必死だった。
今回は自分たちに降りかかる危機的状況ではなく、しかも鳴上さんが引っ張ってくれる圧倒的な安心感が、なんとも言えない心地良さだった。
そして、解決したと結論付け、最後のミーティングを行った後に、皆

であの小さなお社へ向かった。
お社に手を合わせると、どこからともなくあのキツネ耳の少女の声が……
『ありがとう』と。
これで終わったのだと。

数日後、春の喫茶店で……。
「春、あれからどう？」
「うん、すっかり元通り」
「よかったわ」
「うーん、でも前よりも雰囲気が良くなった気がする」
「そのようね」
「マコちゃんのおかげよ」
「私なんてぜんぜん、鳴上さんが解決してくれたから」
「ううん、マコちゃんが相談に乗ってくれたからよ」
私はカウンター席で春が入れてくれたコーヒーを口にする。
このレトロな雰囲気に香り立つコーヒーの匂いは何故か懐かしい気分にさせてくれる。
特にコーヒーに拘りもなかったし、思入れもないのだけど、なんとなくそんな気分。
目の前の春は今も一応バイト中で、喫茶店のレトロな濃茶系のロングスカートエプロン姿、今はお客さんが少ない時間帯だから、カウンター越しに私の接客を行いつつ、話し相手をしてくれている。
「マコちゃん、鳴上さんって凄いよね」
「そうね。大学卒業してすぐに准教授なんて、日本中で鳴上さんだけよ」
「そうじゃなくて、安心感というか頼りがいがあるというか、蓮も頼りがいがあったけど、あの言葉と背中の安心感が凄いの。年上の男の人ってあんな感じなのかなって思ったけど、他の男の人にはないわ」
「そうね」

「鳴上さんは大学でもそんな感じなの？」
「講義中は年齢よりも年上に見えるけど、普段は私たちとあまり変わらないし、接しやすい人よ」
「そうなの？かっこいいしモテそうだよね。……彼女とかいるのかな？」
「大学ではかなりモテるわ。ファンクラブみたいなのもあるし、でも、彼女はいないんじゃないかしら」
確かに鳴上さんはかなりモテるわ、でも彼女はいないと思う。
かなみさんは手のかかる妹みたいな感じだったし。
鳴上さんの自宅に伺った時もそうだったけど、彼女がいるような感じがしなかった。
「そうなんだ～」
「ん？何、春？」
「ち、違うのよ。ちょっとかっこいいなって思っただけだから」
「……あやしい」
「マコちゃん！」
確かに鳴上さんは私や春の周りには居なかったタイプの男の人よね。
怪盗団の男性陣はみんな年下だし。
安心感……。
そう感じる男性は初めてかもしれない。
喫茶店入口の扉のベルがカランコロンと鳴る。
「いらっしゃいませ」
「よっ、来たよ。春ちゃん、新島ちゃんも来てたの？」
「春ちゃん！真ちゃん！お待たせ～クマ、春ちゃんは相変わらずキュートクマ！真ちゃんはビューチフル！」
「こんにちは、花村さん、熊田さん」
熊田さんは相変わらずな挨拶をしつつ私の右隣に、花村さんはその熊田さんの隣の席に座る。
花村さんはアイスコーヒーを、熊田さんはソーダーフロートを春に注文する。

しばらくして、また扉のベルが鳴る。
「いらっしゃいませ、……あっ、鳴上さん、いらっしゃいませ！」
何故か声が上ずる春。
「よっ、相棒！」
「先生、いらっしゃいクマ～！」
「こんにちは、鳴上さん」
花村さんは手を上げ、熊田さんは両手を上げて振り、私は小さく会釈をする。
「皆も来てたのか」
鳴上さんはそう言って、席の空いてる私の左隣に座る。
そう、鳴上さんもこの喫茶店が気に入ったようで、常連客に。
もう季節は夏。
鳴上さんと出会って3か月が過ぎようとしていた。

新たな出会い。

7月初旬。

今日も民族伝承学科の研究室でもある考古学部第2資料室に向かう。

この一学期、民族伝承学科のゼミ生徒になってから、放課後はあそこで過ごすことが多くなった。

だからと言って、法学部の勉強を疎かにしているわけではないわ。

今期の期末テストや課題をほとんどA判定でクリアしている。

私は警察官になるべく法律を学ぶためにこの大学を選んだのだから、他にかまけて成績を落としましたなんて、本末転倒な事にならないようには努力してきたし、それこそ成績を落としたら、学費を出してくれてるお姉ちゃんに申し訳ないもの。

考古学部第二資料室では、主に資料整理や文献の精査、各地域の郷土史などの歴史資料収集などを行っている。

私は主に資料整理を行っていたのだけど、この頃は文献の精査などもやらせていただけるようになった。

少しは成長したとは思う。

最初は全く興味がなく、選択学科で単位を取得するためだけに受けた学科だったのだけど、

あの山際の神社の異世界に触れてから、興味が湧き始め、今では積極的にゼミに参加し、充実感まで感じている。

でも、少々気になってることがある。

今更なんだけど、放課後は鳴上さんと二人きりになる事が多いわ。

ゼミ生は私だけだから、当然といえば当然なのだけど、恋人でも無い男女が二人きりの状況というのは、お互いに外聞的にあまりよくないとは思う。

でも、第二資料室で二人きりの時は、お互い資料整理など作業に没頭しているし、それに鳴上さんの民族伝承学への熱意の方が大きくて、それに引っ張られるように集中するから、普段は男の人として意識はしていないというよりも、出来ないといった方がいいわ。

でも、周りから見ればそうは見えないわよね。
確かに鳴上さんの整った顔立ちに優し気な笑顔はまぶしく感じるし、私だって男の人と二人きりと考えたら、意識もするし敬遠するけど、第二資料室での鳴上さんとは、なぜかそういう考えに至らない。
充実感と安心感の方が勝っているということなのかもしれない。
でも、今はまだ私が民族伝承学科のゼミ生だということを知られていないからいいものの、もし知られて、いつも鳴上さんと二人きりだと知られたら、鳴上さんのファンの女子学生達からどんなやっかみに遭うか……。
今更、考えてもしかたないことだけど。
それはそうと、春の様子が最近少しおかしい。
その理由は分かってる。
鳴上さんが春の喫茶店に来るようになって、春は鳴上さんに会うたびに声が上ずって慌ててるのよね。
春は誰に対しても自分の意見をはっきり言うし、誰に対しても物怖じしないのに、鳴上さんの前ではわかりやすいぐらいにあんな感じで意識するの。
でも、本人にそれと無しに鳴上さんを意識しているのか聞いてみると、慌てて否定するばかりで……。
本人に自覚がないのかしら？
そういえば、春の浮いた話を聞いたことがないわ。
もしかして、初恋だったりして……。
今はそっとしてあげた方がいいのかもしれないわ。
私はそんなことを考えながら、歩みを進める。

「フフフン♪フフフン♪フンフンフン♪」
第二資料室の前まで到着すると、資料室から陽気な鼻歌が聞こえてくる。
あの鼻歌、また、かなみさんが遊びに来てるみたいね。
私は扉を開け、挨拶をする。
「こんにちは」

「あっ、真さん！こんにちはーです！」
ボリュームのある髪を三つ編みで二つ括り両側に降ろし、前髪は揃え、黒縁メガネに緑色ジャージ、いつもの地味な恰好のかなみさんが元気よく挨拶を返してくれた。
「こんにちはかなみさん。かなみさん一人？鳴上さんは…いないみたいね」
私は資料室内を見渡したのだけど、鳴上さんの姿はない。
通路を挟んだ給湯室にもいなかったわ。
「悠さん、教授と出かけちゃいました。でも、3時半ぐらいには戻るって言ってましたから、もうすぐ戻ってきますよ」
高畑教授と一緒ということは大学の教授会議かしら？それとも緊急案件の依頼があったとか？
どちらにしろ、直ぐに戻られるみたいね。
それよりも、かなみさんはこの頃週一でこの資料室に来ているわ。
アイドルの仕事の方は大丈夫なのかしら？
かなみさんは立ち上がり、頬を膨らませながら私にずいっと迫る。
「真さ～ん、聞いてくださいよ～、りせ先輩がおしゃれしろってかわいい服を買って渡してくるんです～。ひどいと思いませんか？」
かなみさんは不満そうにそうい言うけど、いい先輩じゃない。
わざわざ服まで買ってきてくれて渡してくれるなんて、なかなかそこまで気を使ってくれる人はいないわ。
「いい先輩ね」
「そうですか～？私はジャージがいいんです！普段の自分を見失わないべし！」
家では多少ラフな格好はいいのだけど、かなみさんの今のその恰好で外出は厳しいと思うのだけど、おしゃれに無頓着すぎるのもどうかと思うわ。
でも、そのジャージ姿は誰もアイドルのかなみさんとは認識できないような変装にもなっているのだから、ある意味間違ってはいないから困るわね。
「ところで久慈川さんはどんな方なの？」

「ええ～りせ先輩は！凄くかわいくて、美人です！それでダンスもうまくて、歌もうまくて、演技もうまくて……、私と全然…違うんです…う、うううう……私なんて、私なんて……」
あら、また自信を無くしちゃったわ。
話の流れで久慈川りせさんの事を聞こうと思っただけだったのだけど、この話題はダメなようね。
久慈川りせ。
かなみさんの先輩でタカクラプロ所属のアイドル。
かわいらしい容姿から近頃は大人の美人へと、歌やダンスも上手で、最近では演技も高評価を受け、非の打ち所がない正真正銘の日本のトップアイドル。
そして、鳴上さんの友人。
それと気になることが一つ、かなみさんの事があるから、もしかすると久慈川りせさんもペルソナ使いかもしれないわ。

「かなみさんだって久慈川さんに無い良いところあると思うわ」
「ええ！本当ですか!?どこですか？どこですか？」
急に元気になったわ。
でも、困ったわ。
何処と言われても……
「えーっと」
「えーっと？」
キラキラとした期待した目で見つめてくるかなみさん。
りせさんに無くて、かなみさんの良いところは……。
胸が大きいところ？
いえ、それは違うわね。
見た目ではなくて、アイドルとしてのかなみさんの良いところは……
「元気なところとか？」
「それよく言われます～。でも、元気なのはみんなも一緒ですよ。その褒め言葉、小学生とかちっちゃい子に使う褒め言葉ですよ～」

かなみさんは拗ねたように私を横目で見る。
どうやら、私が出したこの答えはダメ見たい。
確かにそうよね。21歳になるかなみさんに使う褒め言葉じゃなかったわ。
それ以外では……えー、何かないかしら？
かなみさんに出会ってから、かなみさんが出演している番組に目を止めるようになった。
テレビの人気アイドル真下かなみのキラキラした姿恰好は全くの別人に見えるから、最初は違和感があったのだけど、仕草や言動は目の前のかなみさんと一緒だから、だんだんテレビの前のアイドル真下かなみも、目の前でこうやって親しく話してるかなみさんに見えてきちゃうのよね。
だから、どうしてもアイドル真下かなみという見方ができないのよ。
「親しみやすいところかしら？」
「うーん、どんな感じにですか？」
「りせさんは近づきがたい感じがするのだけど、かなみさんはもっと近しい感じがするわ」
とは言ってみたものの、久慈川りせさんとは面識がないし、かなみさんとはこうして親しくお付き合いしてるからかもしれないわね。
「うっ、なんかアイドルとしてオーラがないって言われてる感じがします～」
「いえ、そうじゃなくて……」
しまったわ。
また、かなみさんがネガティブな方向へ。

そんな時、第二資料室の引き戸がガラリと開く。
「ただいま」
鳴上さんが戻って来た。
「こんにちは、鳴上さん」
「こんにちは、新島さん」

丁度鳴上さんと私は目が合い、挨拶を交わす。
「悠さ～ん、私の良いところって何ですか？」
かなみさんが鳴上さんに駆け寄り、質問をする。
「ん？かなみの良いところ？元気を皆に分けてくれるところだ。皆、元気なかなみを見て元気になる」
「本当ですか？悠さんも元気になりますか？」
「ああ、そうだな」
「えっへん！元気はかなみんのとりえですから!!皆にも溢れるぐらい有り余った元気を分けてあげるべし!!」
鳴上さんの返事で、かなみさんは一気に元気を取り戻し、胸を突き出し自信満々にポーズを決める。
流石は鳴上さん、かなみさんの事をよくわかってるわ。

しばらくして、高畑教授が第二資料室に来られ、打ち合わせが始まる。
作業用の大きな長テーブルの上座に高畑教授、私と鳴上さんが体面に、なぜかかなみさんが嬉しそうに鳴上さんの隣に座りちゃっかり参加していた。
高畑教授がわざとらしく咳払いをし、席を立ち上がり、少々仰々しく話始める。
「え～、民族伝承学科開設し、初の夏季休暇を迎えるわけだ。そこでだ。夏合宿を行う!!」
「いぇーい！」
かなみさんだけがそれに拍手をする。
……かなみさんは参加できないでしょ？
アイドルのお仕事があるから纏まった休みは取れないんじゃないかしら？
そもそも、ここのゼミ生でも、ましては大学の学生でもないでしょうに。
「かなみは仕事があるだろ？」
流石の鳴上さんもテンションが上がってるかなみさんを窘める。

「そ、そうでした！私、夏ライブがあったんでした！でもでも、私も夏合宿行きたーい。真さんばかりずるいです～」
かなみさんは肩を落とし、私を恨めしそうに見る。
「それで、どこで何をするんですか？」
私はかなみさんの視線を気にせずに、鳴上さんと高畑教授に合宿の話の続きを促す。
「長野で伝承と伝統の地域調査を１週間から１０日程度で予定している。新島さんの予定が空いてる日だけでもいい、全日参加しなくてもいいから、手伝ってくれると助かる」
鳴上さんに優し気な笑顔でこう言われると断りにくい。
それに、民族伝承学に基づく本格的な学術調査みたいだし、興味はあるのだけど。
「あの、参加メンバーは教授と鳴上さんと私だけですか？」
「あー、一応募るつもりだけど、たぶんそうなるんじゃない？大学生がさ、夏休みにわざわざ辛気臭いこんな地味な調査さ、誰もやってくれないし～」
高畑教授がそれを言ったらダメじゃないかしら？
それに、そういうことじゃなくて……。
「その、これでも私、女性なので……」
男の人二人と１週間から１０日間も寝泊りするのは……、私もこう見えても女性なんです。
鳴上さんが何かするとは思えないけど、お姉ちゃんに男性二人と合宿行くことを伝えると、たぶん許してくれないと思う。
「あ、ごめん」
「ふはははははっ、悪い悪い、そりゃそっか。いつも悠と二人だったからな～、寝る部屋は別々だって言っても、そりゃ新島ちゃんも女だもんな。俺が嫁に怒られるところだったぜ」
鳴上さんは私が言わんとしたことを直ぐに理解してくれて、謝ってくれるのだけど、教授の言い分には釈然としないものがある。
……普段から女性として見られていなかったってことかしら？
そんな中かなみさんがこんなことを言い出し、余計にわけがわから

ないことに。
「いいな～真さん、悠さんとお泊りなんて～」
「かなみちゃん、俺も一緒だけど？」
「さすがに、それは困ります」
「え？何？新島ちゃんは悠と一緒は良くて、俺が居たらダメってこと？」
「そうじゃなくて！」
鳴上さんと二人きりがいいということではなくて、そもそも恋人でも無い男性と宿泊することが問題であって……。
「じゃあ新島さん、大学の友人を誘えないか？もしくは奥村さんでもいい」
「え？他校の春でもいいんですか？」
「学術研究ということで、他校の学生でも参加ができる」
「言い忘れてた。今回は予算からちゃんと新島ちゃんにも少ないけどアルバイト料が出るし、もちろん参加してくれる学生にもね。そんなに難しいもんじゃないし、空いた時間は観光でもレクリエーションでも好きにしてくれていいし」
「声をかけてみますね」
それなら、春も来てくれるかも。
でも、喫茶店の仕事があるから無理強いはできないけど、全日ではなくてもいいから、来てくれるとうれしいわ。
他のみんなはどうかしら？
杏は学生ではないから、たぶんダメよね。
双葉は高校生だから一応学生だけど、高校生は難しいかもしれないわ。確認が必要ね。
竜司はちゃんと学術研究してくれなさそうだし、祐介は海外留学でそれどころじゃないわ。
蓮は事情を話せばついてきてくれるかもしれないけど、教授や鳴上さんにああいった手前、男性が増えるのは本末転倒よね。
高校の友達は春以外に仲のいい子は英子ぐらいだけど、英子はこういう研究や堅苦しいのは苦手だと思うし。

大学の知り合いには、私が鳴上さんのゼミ生だと知られたくないし。
そういえば私、親しい友達って怪盗のみんな以外にほとんど居ないかも……。
仕方がないわ、モルガナにでもついてきてもらおうかしら？
「悠も誰かいい子いないのか？やたら声と態度がでかい完二って奴はいいや。男だし余計にややこしくなる」
教授は鳴上さんに合宿に参加してくれる女性の知り合いがいないか聞いてくれる。
「そうですね、直斗なら来てくれるかもしれない。忙しいかもしれないですが」
「直ちゃんか～、いいね。あの子だったら調査も捗るかもしれないし！」
鳴上さんの後輩かしら、でも直斗って男の人の名前よね。
教授が直ちゃんと呼んでるし、女性かもしれないわ。
教授も知ってるということはこの学校の学生かしら？
「ブーブー、わたしも行きたいです～。自分たちばっかりずるいです～」
かなみさんは机にうつ伏せながらダラリと手を伸ばし顎を乗せ、行儀の悪い恰好で文句を言っていた。
「かなみは学生でもないし、仕事があるだろ？」
「え～、でも～、あっ、そうだ！一泊旅行だったら大丈夫！悠さん一泊お出かけしましょうよ！何かおいしいものが食べられる所に行くべし！」
かなみさんがこんなことを言いだした。
それって、鳴上さんと二人で泊まるってことよね。
その、デートのお誘いどころか、それはもう……。
「もちろん真さんも一緒ですよ！」
「えっ？私も？」
かなみさんの意外な言葉に私は思わず目が丸くなる。
鳴上さんとかなみさんと私？

かなみさんはどういう意図で？
もしかして、かなみさんと鳴上さんが付き合えるように私にフォローを求めているのかしら？
「はい！真さんも一緒です～。だって、一緒の方が楽しいじゃないですか～」
……かなみさんは何にも考えてなかったようね。
ただ単に、お泊り旅行に行きたかっただけということかしら。
でも、鳴上さんが難色を示せばこの話は無よね。
「そうだな。だったら来週はどうだ？丁度、来週三泊四日で奈良に行く予定だ。３日目の午後からは予定が入ってないからどうだ？」
「本当ですか！スケジュール、スケジュール！あっ、丁度３日目と４日目の２日間空いてます～！やったー！」
来週の奈良ということは、鳴上さんが奈良でリニューアルオープンする県立民族博物館のオープニングセレモニーとゲスト講演に呼ばれて、一人で参加する件ね。
確か鳴上さんは初日のセレモニーと二日目の単独講演、それ以外に懇親会に参加する予定とあったわ。
「真さんも行きましょうよ～！」
「え？私も？でも……」
日程は空いてるけど、旅費も必要だし。
「新島ちゃんも行ってくればいい！当大学からスタッフ枠で予算が出てる！」
「教授、それは聞いてないですが？」
「４月に悠の参加が決まってただろ？当時は俺も嫁さんつれてついて行こうと計画していた！悠がメインだから俺達はついて行くだけ行って、奈良旅行を満喫しようと思ってたんだよ。部屋は二つ用意されてるはずだ。もちろん嫁の分は実費だぞ。でもよ。１か月前にオーストラリアに出張が決まっちゃって、そっちに嫁と行くことに決めたから」
「また、勝手にそんなことを……」
「はははっ、ぶっちゃけ奈良の方をキャンセルするの忘れてた！だ

から！新島ちゃん！行ってもらえると非常に助かる!!予算だけ取って誰もいかないなんて、大学に知られたら今度こそ何を言われるか！ここは人助けと思って！部屋も別にとってるし！そもそも嫁と一緒に泊まるためにそこそこいい部屋を頼んだし！だからかなみちゃんと泊まってくれ！かなみちゃんは実費だが、一緒に泊まれるぐらいいい部屋だから!!この通り!!」

私はこんな理由で教授に頼み込まれる。

また教授の暴走で大変なことに……。

でも、旅費がかからずに行けるのなら、行ってもいいかな。

「真さーん！行きましょうよ！きっと楽しいですよ～」

「新島さん、本当にごめん。ただ、初日のセレモニーにはスタッフとして参加してもらえると助かる。後は自由にしてくれればいいから」

でも、部屋は別々だけど一日目と二日目は鳴上さんと泊まる事になるのよね。

いい部屋だと言うからにはちゃんとしたホテルか旅館だろうし、鳴上さんとなら大丈夫よね。三日目にはかなみさんが来てくれるのだし。

「わかりました。夏合宿の件も含めて一応家族と相談させてください」

私は少々考えをまとめてから行くことを決め、返事をする。

「やったー！旅行！旅行！お泊り旅行！」

嬉しそうなかなみさん。

まだ行けるとは言っていないのだけど。

家に帰ってさっそくお姉ちゃんに相談をすると、もう大人なのだから自分で判断しなさいと言われる。

だけど、心配してくれてるのか夏合宿は友人を連れて行くことを強く言われたわ。

４日後、来週の月曜日から３泊４日で鳴上さんの助手として奈良に行くことに。

助手と言っても、元々鳴上さん一人で行く予定だったものを、私が

ついて行くだけだから手伝えることは無いのが、少々後ろめたい。
高畑教授みたいに、旅行だと割り切ればいいのでしょうけど、民族伝承学科のゼミ生としてそうはいかないわ。

7月中旬。
鳴上さんと早朝に大学で待ち合わせし、タクシーで東京駅に到着、新幹線で京都駅に、京都からは近鉄線で奈良の大和八木駅、そこからタクシーで民族博物館に到着。
私は大学入学時に使用した地味目の黒のスーツを着てるから、少々窮屈で新幹線や電車での長時間の移動は疲れたわ。
因みに鳴上さんは普段とあまり変わらないカジュアルスーツね。
近代的な平屋建て作りの民族博物館のエントランス前にタクシーを付けてもらい降りる。
回りは見渡す限りの山々と生い茂る木々、この建物以外に人工的な物はほとんど見えない。
かなり自然豊かな場所ね。
空気も澄んでおいしいように感じる。
敷地は広大な公園となっており、四季折々の草花が植えられている。
事前にネットで調べたのだけど、民族博物館が目的ではなく、公園としての利用客が多いみたい。
民族博物館が人里離れたこのような辺鄙な場所にあるには理由があった。
ここには飛鳥時代の古墳が大小合わせて三基と、集落跡地があり、それを復元し展示するために民族博物館も併設することになったとガイドには書かれてある。
「間に合いましたね」
「助かった新島さんが事前に乗り換えルートやタクシー乗り場を調べてくれたおかげだ」
始発の東京発新幹線に乗って11：00のセレモニー開始30分前に到着。

結構乗り換え時間がタイトで事前に乗り換えルートや乗り場を調べておいてよかったわ。
民族博物館の館長や大学教授や研究員の方々に鳴上さんと共に挨拶をし、その後に今日のゲストとして招かれた町長や議員さんなどの紹介を受けて挨拶する。
他の大学教授や研究員の方々は鳴上さんに好印象な方が多いようだけど、議員さんの中には鳴上さんが若いからなのか明らかに侮っているような人もいたわね。
それでも鳴上さんは笑顔で対応していた。
その後、民族博物館のリニューアルセレモニーがエントランスで行われテープカットと共に開始し、私と鳴上さんはパイプ椅子が並べられたゲスト席で、その後に館長の開催の挨拶、町長や議員さんの挨拶と続く。
こういう挨拶ってどこに行っても同じ感じよね。
特に市長さんや議員さんなんて、もう定型文を張り付けただけと言っていいのではないかしら？
聞く方もこういうものだと割り切るしかないわね。
その後は、館長さんが博物館内を私達やゲストの皆さんを引き連れ案内していただく。
奈良県中部の縄文時代から現代までの歴史や文化についての展示が時系列で並んでいる。
私は鳴上さんの横について見学を。
高校や中学の歴史教科書で見たことがある埴輪や土偶から始まって飛鳥古京の復元図など、思っていたよりも面白いかも。
それに鳴上さんが時折、私に展示物についてわかりやすく説明してくれるから尚更。
昼頃に小ホールで併設されてるお食事処の料理が運ばれて、ビュッフェ形式の昼食を兼ねた懇親会が開かれる。
参加者は５０人程、ゲストの方以外にリニューアルに関わった業者さんの方やオープニングセレモニーではお見掛けしていなかった関係者の方々も。

それにしても関係者やゲストの方々はほとんどが男性ね。女性は副館長の方と研究員の方が3人だけね。
そもそも考古学を本格的に学ぶ女性が少ないから致し方が無いわ。
しかも、この中で私が一番若いと思う。
私は助手の名目で付き添いとして参加させてもらったのだけど、本来学生がゲストとして参加するものではないのかもしれない。
でも、鳴上さん自身が若いし、この中では私の次に若い。
その鳴上さんは気後れなど全くせずに、他の大学の先生や研究員の方々と情報交換を行っていた。
私は流石に話に入っていけないため、挨拶だけをし、割り切ってビュッフェを楽しむことにした。
そういえば、ここのお食事処の名物が苺タルトと博物館のエントランスに張り紙が張ってあったわね。
タクシーでの道中、いちごやいちご狩りののぼりや看板をよく見かけたわ。
奈良は苺が名物なのかしら?
私は苺タルトが無いかビッフェ台を探す。
あった。
うん、おいしそう。
でもカロリーが高そうね。
私はケーキサーバーで苺タルトを一つ取り皿に移す。
すると後ろから声をかけられる。
「こんにちは」
振り向くと、取り皿を手にした女性研究員の方がいらっしゃった。
「こんにちは」
私は軽くお辞儀をして挨拶を返す。
「やっぱりここと言えば苺タルトよね。少しお話いいかしら?」
私は女性研究員の方に話を聞きたいと、誘われる。
どうしよう、考古学の話とかできないわ。
私、全然歴史とか詳しくないし、鳴上さんが今取り組んでいる研究の事しかわからない。

でも、この場に参加して、誘われてるのに断るのもおかしな話だし。
何か考古学の事を聞かれても、正直に考古学の事はわからないと言うしかないわ。
只の付き添いで今日ここに来たと。
「その、考古学の事は勉強中であまり詳しくなくて……」
「そんなにかしこまらなくていいわ。せっかくなのだし少ない女性同士で話しましょ」
私はそう言われてしまっては断ることもできず、女性研究員の方に誘われテーブル席に。
私は３０歳前後に見える女性研究員の方々３人とお互い自己紹介をする。
皆さんお知り合いらしく、２人は奈良市にある奈良県立博物館の研究員で、１人はここの専属研究員とのこと。
「新島さんはまだ学生で、しかも２回生なんだ。若いはずだわ。私と肌の艶が全然違うもの」
「それにしても、鳴上君じゃなかった。鳴上准教授が助手を連れて来たのを始めて見たわ」
「鳴上君の授業ってどんな感じなの？」
心配をよそに考古学の事を聞かれることはなく、本当に女子トークが展開され、私の事や学校の事や鳴上さんの事で質問攻めに。
「いいな～、私も鳴上君の授業を受けてみたい」
「大学卒業してすぐ准教授だなんて、凄い人よね」
「普通はあり得ないわ。鳴上君は大学院にも行ってないのよ。私なんて大学院出て、ここで働いてるのに」
やはり、鳴上さんはここでも有名らしい。
女子トークに花が咲き、電話番号とラインの交換を行い、最終的に彼女らを鳴上さんと引き合わせ少々話しをする事に。
皆さんはまた、女子トークを行うものだとばかり思っていたのだけど、鳴上さんの前では考古学や民俗学の話がメインに……。
私は聞いていることしかできなかったけど、なんだかちょっとは考古学の世界の一員になったような気分。

懇親会を終えて、鳴上さんと民族博物館の公園内を散策することに。
色鮮やかな花々が広大な敷地一面に植えられている。
花を目当てで来客される方が多いのも納得だわ。
「鳴上さんは花が好きだったりするんですか？」
「特に好きというわけじゃないけど、こうやって花々を見たり植物を鑑賞するのは嫌いじゃない。じゃあ新島さんは？」
「私ですか？私も特に好きというわけではないのですが、こういうところに来ると気持ちがいいというか……」
あれ？これって鳴上さんと同じということよね。
「なるほど、一緒ってことか」
「そ、そうですね」
鳴上さんを見上げて話してたのに、急に恥ずかしくなって視線を逸らす。
そんな笑顔で一緒なんて言うのは、不意打ちすぎるわ。
そういうところですよ、鳴上さん。
女性に優しくとは言いますが、鳴上さんのそれは誘惑的すぎます。
前方後円墳の復元場所に到着し円墳部の高台に上り、二人並んで風景を見る。
「昔の人はこの形に何の意味を見出していたのか、それを調べ考えるのも考古学の一つで……」
鳴上さんは私にこの古墳の事や、地形やこの土地の事について楽しそうに説明してくれる。
そんな鳴上さんの顔をふいに見上げると、直ぐに下を向く。
その……顔が見れないというか。
気恥ずかしいというか。
大学の第二資料室で二人で過ごしてる時はそんなことはないのに、なぜ？
いつもと違う場所だから？
それに何となくだけど、周囲から視線を感じるわ。
その、もしかすると端から見るとデートに見えるのかしら？

そ、そんなはずはないわよね。私の考え過ぎよ。
鳴上さんは民族考古学者として、知識が薄い私に説明してくれているだけよ。
公園散策中、私はいろいろと考えすぎてしまって、終始落ち着かない感じに……。

その後、館長さんと明日の講演について打ち合わせをし、タクシーを呼んでもらって民族博物館を後にする。

タクシーがしばらく川沿いに山裾を進むと、集落が見えてくる。
狭い道路の両脇には二階建てから三階建ての木造長屋のようなレトロな雰囲気の建物が立ち並ぶ、何かしら？昭和？いえ江戸時代？
タイムスリップしたような幻想的な風景が目の前に。
ここは天川村洞川温泉、温泉旅館が立ち並ぶ日本有数の温泉地。
そんな温泉街を進み、ひときわ大きく立派な和風建築の建物の前にタクシーが止まり、タクシーを降りると仲居さん達がお出迎えを。
タクシー運転手さんがトランクから取り出したキャリーバックを仲居さんが預かってくれる。
ここって明らかに高級旅館よね。
こんな立派なところに泊まった事なんてないわ。
「凄い立派なところですね」
「……教授、こんなところを予約してたのか」
私達は軽く会釈し、仲居さんの案内で入口へと向かう。
どうやら、鳴上さんもこんなに立派なところだと知らなかったみたいね。
教授が確かに良いところって言ってたけど、さすがにこれは……。
教授が大学側に行けなくなったとは言いにくい理由がわかったわ。
玄関に入ると、広々とした畳が広がっていた。
「ようこそ、天の川白石旅館へ」
綺麗な着物を着こなす美人が正座で深々とお辞儀を……。
女将さんなのかしら？私達とそれ程歳は変わらないように見える

から、若女将？
切れ長の目に艶のある黒髪、色白の肌、とても綺麗な人。
純和風美人とはこういう人の事をいうのかしら。
「ん？天城？なんでここに？」
「え？鳴上君？」
鳴上さんと美人の若女将がお互い顔を合わせ、驚きの表情を。
え？知り合い？